

(財) 大阪府文化財センター調査報告書 第111集

泉佐野市湊・旭町・大宮町・若宮町・大西町所在

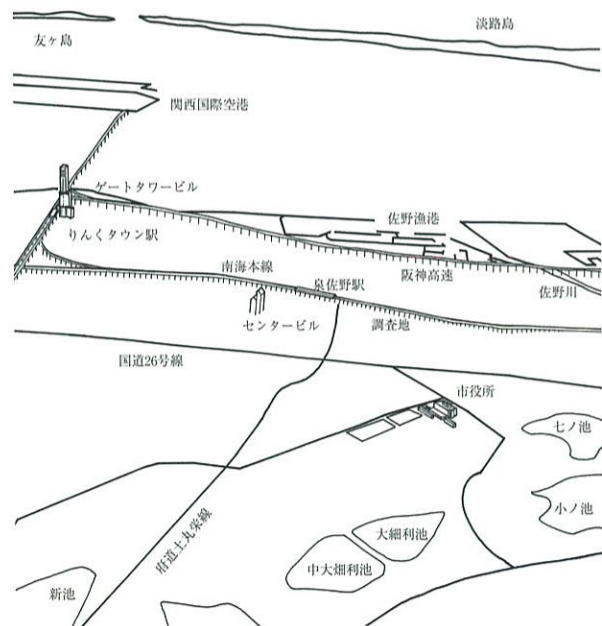
湊 遺 跡 他 II

南海本線（泉佐野市）連続立体化事業（第1～3工区）に伴う発掘調査報告書

財団法人 大阪府文化財センター



泉佐野市上空から大阪湾を望む



序 文

今回の発掘調査は、泉佐野市域の海岸部の遺跡である湊遺跡、上町東遺跡、若宮遺跡、大西遺跡で実施いたしました。特に、湊遺跡は弥生時代から製塩遺跡として著名な遺跡であります。「塩づくり」は大阪南部の「海」に面した地域では弥生時代後期以降、湊遺跡をはじめとした諸遺跡で活発に行なわれました。

大阪湾における自然の海岸線が消滅してしまった現在、「海」を媒介とし、「海」から生活の糧をさずかった人々の営みは、はるか昔のなつかしい話になってしまいました。

中世以降、海岸平野部の集落の発展過程は、まず上町遺跡や上町東遺跡にその様相を見出すことができます。従来の発掘調査の成果から企画性に富んだ町並みを示すような遺構が多数検出されています。それらは入念な都市計画の基に築き上げられたものであり、今回の上町東遺跡の調査成果でもその一端をよく表しています。さらに町屋は、時代を経て若宮遺跡、大西遺跡へと大きく拡大され、現在の景観に至ったことが発掘調査の結果、明らかになりました。

泉佐野市域には、丘陵部に豊富な中世文書や絵図で有名な荘園関連遺跡である日根野の地があります。この地はまさしく「山」を基盤としたところであり、海岸平野部の集落とは対称的な発展をとげたと考えられます。「海」と「山」、全く異なった環境を基盤として成り立った集落が、互いに交流し、共存し、それぞれを補いながら発展していく過程を、遺跡から学びとることができます。地域の歴史を明らかにし、その産物である文化財を大切にすることは、私たちの責務であります。

今回の調査の実施にあたり、多大なご協力、ご指導をいただきました南海電気鉄道株式会社、大阪府土木部岸和田土木事務所、泉佐野市教育委員会、大阪府教育委員会、地元の皆様には、心から感謝いたしますとともに、今後とも当センターへのご支援を賜りますようお願いいたします。

平成 16 年 3 月

財団法人 大阪府文化財センター
理事長 水野 正好

例 言

1. 本書は、大阪府泉佐野市湊1丁目他に計画された、南海本線（泉佐野市）連続立体交差事業（第1～3工区）に伴う、湊遺跡他の発掘調査報告書である。今回は、平成14年度に現地調査を行った部分についての報告である。なお、本事業の平成10～12年度にかけて現地調査を実施した湊遺跡他（第1工区）については、『湊遺跡他』（平成15年）を刊行している。本書は、その続刊であり、重複する所についてはできるだけ割愛しているため、上記の『湊遺跡他』を併せてご覧いただきたい。
2. 本調査地は、泉佐野市湊1丁目・旭町・大宮町・若宮町・大西1丁目に所在する。
南海本線上下線に挟まれた部分での調査のため、非常に狭長な調査区となっている。調査対象となった遺跡も湊遺跡・上町東遺跡・若宮遺跡・大西遺跡と、広範囲にまたがっており、本書では各遺跡を分けて報告する。
3. 本調査は、南海電気鉄道株式会社から委託を受け、大阪府教育委員会の指導のもと、財団法人大阪府文化財センター南部調査事務所調査第1係が実施した。現地調査は、平成14年9月2日から平成15年2月28日まで実施した。整理作業は、現地調査終了後は引き続き南部調査事務所で行った。平成16年3月本書の刊行をもって全ての作業を完了した。
当センターの調査体制は次のとおりである。

【平成14年度】

（現地調査） 調査部長 玉井 功
調整課長 赤木克視、調整係長 森屋直樹
南部調査事務所長 渡邊昌宏、調査第1係長 橋本高明
（担当）技師 後藤信義、佐伯博光

（遺物整理） 同上

【平成15年度】

（遺物整理） 調査部長 玉井 功
調整課長 赤木克視、調整係長 森屋直樹、主査 山上 弘
南部調査事務所長 藤田憲司、調査第1係長 橋本高明
（担当）主査 村上富喜子

遺物の写真撮影は南部調査事務所主任技師 立花正治、出土した木材の樹種鑑定、金属器の保存処理は中部調査事務所主査 山口誠治、同所専門調査員 仁田恵子が行った。

4. 調査の実施にあたっては、大阪府土木部岸和田土木事務所をはじめ、関係諸機関や下記の方々の援助を賜った。記して感謝の意を表したい。（敬称略）
〈調査指導〉堀江門也・松岡良憲（大阪府教育委員会）、鈴木陽一・中岡 勝（泉佐野市教育委員会）、藤田正篤（泉佐野市史編纂委員）
5. 本書の執筆は、後藤、佐伯が行い、目次に文責を明記した。
6. 本書の編集は村上、後藤が行った。
7. 本調査に関わる遺物、写真、カールスライド、実測図などの各種記録類は、財団法人大阪府文化財センターで保管している。広く活用されることを希望する。

凡 例

1. 本書中の水準は、東京湾平均潮位（T.P.）を使用している。
2. 本書中における座標値は、世界測地系に基づいており、すべて m を単位とする。
3. 本書中の方位は、座標北を示している。調査地点における座標北は、磁北より東へ $7^{\circ} 0'$ 、真北より西へ $0^{\circ} 23'$ 振れる。
4. 土色の記述は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖 20 版』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修（1997）に準拠した。
5. 遺構番号は、現地調査段階では基本的に前回調査と同様の手法で番号をつけているが、整理段階では遺構の性格を示すために遺構名を番号の前につけた。さらにトレンチ毎に重複した番号がついているため、混乱が生じるおそれがある。そこで、遺構番号の前にトレンチ名のアルファベットを冠した。例えば「A トレンチ遺構 1」＝「土坑 A 1」、「A トレンチ遺構 2」＝「溝 A 2」、「B トレンチ遺構 1」＝「溝 B 1」などである。従って、数字は、トレンチ毎での遺構の「通し番号」である。

目 次

本文目次

序文

例言

凡例

目次

挿図目次

図版目次

第1章 調査にいたる経緯と経過	(後藤) 1
第2章 位置と環境	(後藤) 5
1 地理的環境	5
2 歴史的環境	5
第3章 調査の方法	(後藤) 7
第4章 調査成果	11
第1節 基本層序	(後藤) 11
第2節 湊遺跡	(後藤) 12
1 A調査区	12
2 B調査区	17
3 C調査区	17
第3節 上町東遺跡	(後藤) 20
1 D調査区	20
2 E調査区	20
3 F調査区	26
4 G調査区	32
第4節 若宮遺跡	32
1 H調査区	(佐伯) 32
2 I調査地区	(後藤) 53
3 J調査区	(後藤) 67
4 K調査区	(後藤) 67
第5節 大西遺跡	(後藤) 70
1 L調査区	70
2 M調査区	75
3 N調査区	76
4 O調査区	76
5 P調査区	76
第5章 ま と め	(後藤) 77

挿図目次

図 1	調査区周辺図 1：5,000	3・4
図 2	泉佐野市位置図	5
図 3	周辺遺跡分布図 (国土地理院発行 平成 11 年「岸和田西部」、平成 12 年「樽井」に一部加筆) 1：25,000	6
図 4	調査区位置図 1：4,000	9・10
図 5	断面柱状図(縦) 1：60	13・14
図 6	A 調査区最終掘削面平面図 1：250	15
図 7	A 調査区北端部最終掘削面平面図 1：100	15
図 8	A 調査区最終掘削面 A 1 溝断面図 1：20	16
図 9	A 調査区最終掘削面 A 2 溝断面図 1：20	16
図 10	A 調査区最終掘削面 A 3 土坑断面図 1：20	16
図 11	A 調査区最終掘削面 A 4 溝断面図 1：20	16
図 12	A 調査区最終掘削面 A 5 溝断面図 1：20	16
図 13	A 調査区最終掘削面 A 6 土坑断面図 1：20	16
図 14	A 調査区最終掘削面 A 7 溝断面図 1：20	16
図 15	A 調査区最終掘削面 A 8 土坑断面図 1：20	16
図 16	A 調査区出土遺物図	16
図 17	B 調査区第 4 層上面平面図 1：300	18
図 18	B 調査区第 7 層上面平面図 1：300	18
図 19	B 調査区第 4 層上面 B 1 土坑平面図・断面図 1：20	19
図 20	B 調査区第 4 層上面 B 3 溝断面図 1：20	19
図 21	B 調査区第 9 層上面 土器溜り平面図 1：10	19
図 22	B 調査区第 9 層上面 土器溜り出土遺物図	20
図 23	B 調査区出土遺物図	21
図 24	C 調査区第 2 面平面図 1：200	22
図 25	C 調査区第 1 面平面図 1：00	23
図 26	C 調査区第 1 面 C 1 溝断面図 1：100	23
図 27	C 調査区第 1 面 C 1 溝出土遺物図	23
図 28	C 調査区第 1 面 C 2 土坑断面図 1：20	23
図 29	D 調査区最終掘削面平面図 1：200	24
図 30	D 調査区第 1 層出土遺物図	24
図 31	E 調査区第 1 面平面図 1：250	25
図 32	E 調査区第 1 面 E 24 土坑平面図・断面図 1：20	26
図 33	E 調査区第 1 面 E 5 ピット断面図 1：20	27
図 34	E 調査区第 1 面 E 2 溝平面図・断面図 1：20	27
図 35	E 調査区第 1 面 E 22 溝平面図・断面図 1：20	27
図 36	E 調査区出土遺物図	28
図 37	F 調査区最終遺構面平面図 1：200	29

図 38	F 調査区 F 7 土壙墓平面図・断面図	1 : 20	30
図 39	F 調査区最終遺構面 F 31 土壙墓平面図・断面図・立面図	1 : 20	30
図 40	F 調査区出土遺物図		31
図 41	G 調査区最終遺構面平面図	1 : 200	33・34
図 42	H・I 調査区最終面平面図	1 : 400	35・36
図 43	H 1 調査区最終遺構面平面図	1 : 200	37
図 44	H 2 調査区最終遺構面平面図	1 : 200	37
図 45	H 3 調査区最終遺構面平面図	1 : 200	38
図 46	H 4 調査区最終遺構面平面図	1 : 200	39
図 47	H 5 調査区最終遺構面平面図	1 : 200	40
図 48	H 1 調査区最終遺構面 H 1 溝断面図	1 : 20	41
図 49	H 2 調査区最終遺構面 H 1 溝断面図	1 : 40	41
図 50	H 2 調査区最終遺構面 H 2 溝断面図	1 : 40	41
図 51	H 2 調査区最終遺構面 H 8 土坑・H 9 溝平面図	1 : 20	42
図 52	H 5 調査区最終遺構面 H 15 土坑平面図	1 : 20	42
図 53	H 調査区出土遺物図 (1)		43
図 54	H 調査区出土遺物図 (2)		44
図 55	H 調査区出土遺物図 (3)		45
図 56	H 調査区出土遺物図 (4)		46
図 57	H 調査区出土遺物図 (5)		47
図 58	H 調査区出土遺物図 (6)		48
図 59	H 2 調査区出土鬼瓦推定復原図		49
図 60	H 調査区出土遺物図 (7)		50
図 61	H 調査区出土遺物図 (8)		51
図 62	H 調査区出土遺物図 (9)		52
図 63	H 調査区出土遺物図 (10)		53
図 64	H 調査区出土遺物図 (11)		53
図 65	I 1 調査区第 1 面平面図	1 : 150	54
図 66	I 2 調査区第 1 面平面図	1 : 150	55
図 67	I 3 調査区第 1 面平面図	1 : 150	56
図 68	I 4 調査区第 1 面平面図	1 : 150	57
図 69	I 5 調査区第 1 面平面図	1 : 150	57
図 70	I 3 調査区第 1 面 I 1 溝断面図	1 : 20	58
図 71	I 3 調査区第 1 面 I 2 溝断面図	1 : 20	58
図 72	I 3 調査区第 1 面 I 3 溝遺物出土状況図・立面図	1 : 10	59
図 73	I 3 調査区第 1 面 I 20 土壙墓平面図・断面図	1 : 20	59
図 74	I 3 調査区第 1 面 I 21 土壙墓断面図	1 : 20	60
図 75	I 3 調査区第 1 面 I 22 土壙墓断面図	1 : 20	60
図 76	I 3 調査区第 1 面 I 23 土壙墓断面図	1 : 20	60
図 77	I 調査区出土遺物図 (1)		61
図 78	I 調査区出土遺物図 (2)		62

図 79	I 調査区出土遺物図 (3)	63
図 80	I 調査区出土遺物図 (4)	64
図 81	I 調査区出土遺物図 (5)	65
図 82	J 調査区第 1 面平面図 1:300	68
図 83	K 調査区第 1 面平面図 1:300	68
図 84	J 調査区第 1 面 J 1 土坑断面図 1:20	69
図 85	J 調査区第 1 面 J 2 土坑断面図 1:20	69
図 86	J 調査区第 1 面 J 3 土坑断面図 1:20	69
図 87	J 調査区第 1 面 J 4 土坑断面図 1:20	69
図 88	J 調査区第 1 面 J 5 土坑断面図 1:20	69
図 89	J 調査区第 1 面 J 12 土坑平面図・断面図 1:10	69
図 90	J 調査区第 1 面 J 8 土壙墓平面図・断面図 1:20	70
図 91	J 調査区第 1 面 J 8 土壙墓出土遺物図	70
図 92	J 調査区第 1 面 J 13 溝断面図 1:20	70
図 93	J 調査区第 1 面 J 18 溝断面図 1:20	70
図 94	L 調査区第 1 面平面図 1:200	71
図 95	M 調査区第 1 面平面図 1:200	71
図 96	L 7 土坑断面図 1:20	72
図 97	L 8 土坑断面図 1:20	72
図 98	L 9 土坑断面図 1:20	72
図 99	L 10 土坑断面図 1:20	72
図 100	M 2 土坑断面図 1:20	72
図 101	M 4 土坑断面図 1:20	72
図 102	M 5 土坑断面図 1:20	72
図 103	M 3 土坑断面図 1:20	72
図 104	M 8 溝断面図 1:30	72
図 105	N 調査区第 1 面平面図 1:200	73
図 106	O・P 調査区第 1 面平面図 1:200	73
図 107	N 調査区第 1 面 N 2 溝断面図 1:20	74
図 108	N 調査区第 1 面 N 1 土坑断面図 1:20	74
図 109	O 調査区第 1 面 O 1 溝断面図 1:20	74
図 110	O 調査区第 1 面 O 2 溝断面図 1:20	74
図 111	P 調査区第 1 面 P 1 落ち断面図 1:60	74
図 112	M・N・O・P 調査区出土遺物図	75
図 113	調査区基盤層上面断面図 1:2,000	79・80

図版目次

図版 1	1 A 調査区最終掘削面 全景 (北東から)
	2 A 調査区最終掘削面 全景 (北西から)
	3 A 調査区最終掘削面 全景 (北西から)

- 図版 2
- 1 B 調査区第 1 面 (北西から)
 - 2 B 調査区第 1 面 全景 (北東から)
 - 3 B 調査区第 1 面 全景 (南西から)
 - 4 B 調査区第 1 面 全景 (北東から)
 - 5 B 調査区第 2 面 全景 (北東から)
 - 6 B 調査区第 2 面 全景 (南西から)
- 図版 3
- 1 B 調査区第 1 面 B 1 土坑断面 (北西から)
 - 2 B 調査区第 1 面 B 1 土坑完掘状況 (南西から)
 - 3 B 調査区第 2 面 土器溜まり (南東から)
 - 4 B 調査区第 2 面 風倒木検出状況 (北西から)
 - 5 C・D 調査区 遠景 (南西から)
- 図版 4
- 1 C 調査区第 1 面 全景 (南西から)
 - 2 C 調査区第 1 面 C 1 溝、C 2 土坑 (北西から)
 - 3 C 調査区第 1 面 道路状遺構 (南西から)
 - 4 C 調査区第 1 面 C 1 溝 (北東から)
 - 5 C 調査区第 1 面 C 1 溝断面 (東から)
 - 6 D 調査区第 1 面 全景 (南西から)
- 図版 5
- 1 E 調査区第 1 面 全景 (北東から)
 - 2 E 調査区第 1 面 全景 (南西から)
 - 3 E 調査区第 1 面 全景 (南西から)
 - 4 E 調査区第 1 面 E 2 溝遺物出土状況 (北から)
 - 5 E 調査区第 1 面 E 24 土坑 (北から)
- 図版 6
- 1 E 調査区第 1 面 E 22 溝遺物出土状況 (東から)
 - 2 F 調査区第 1 面 全景 (東から)
 - 3 F 調査区第 1 面 全景 (西から)
- 図版 7
- 1 F 調査区第 1 面 F 7 土壙墓断面 (北東から)
 - 2 F 調査区第 1 面 F 7 土壙墓完掘状況 (北東から)
- 図版 8
- 1 F 調査区第 1 面 F 31 土壙墓完掘状況 (東から)
 - 2 F 調査区第 1 面 F 31 土壙墓土器出土状況 (東から)
- 図版 9
- 1 G 1～4 調査区遠景 (西から)
 - 2 G 4～6 調査区遠景 (東から)
 - 3 G 1 調査区第 1 面 全景 (西から)
 - 4 G 2 調査区第 1 面 全景 (東から)
 - 5 G 3 調査区第 1 面 全景 (西から)
 - 6 G 4 調査区第 1 面 全景 (東から)
 - 7 G 5 調査区第 1 面 全景 (西から)
 - 8 G 6 調査区第 1 面 全景 (東から)
- 図版 10
- 1 H 1 調査区第 1 面 全景 (西から)
 - 2 H 2 調査区第 1 面 全景 (西から)
- 図版 11
- 1 H 3 調査区第 1 面 全景 (西から)

- 2 H 4 調査区第 1 面 全景 (東から)
- 3 H 5 調査区第 1 面 全景 (東から)
- 4 H 5 調査区第 1 面 H 15 土坑 (東から)
- 5 H 5 調査区第 1 面 H 15 土坑遺物出土状況 (北から)
- 6 H 2 調査区第 1 面 H 8 土坑・H 9 溝 (北から)
- 図版 12 1 I 1 調査区第 1 面 全景 (西から)
- 2 I 2 調査区第 1 面 全景 (東から)
- 3 I 3 調査区第 1 面 全景 (東から)
- 図版 13 1 I 3 調査区第 1 面 全景 (西から)
- 2 I 4 調査区第 1 面 全景 (西から)
- 3 I 5 調査区第 1 面 全景 (西から)
- 4 I 3 調査区第 1 面 I 11 井戸 (北西から)
- 5 I 3 調査区第 1 面 I 1 溝 (西から)
- 図版 14 1 I 3 調査区第 1 面 I 3 溝土器出土状況 (西から)
- 2 I 3 調査区第 1 面 I 3 溝土器出土状況 (南から)
- 3 I 3 調査区第 1 面 I 20 土壙墓 (南西から)
- 4 I 3 調査区第 1 面 I 22 土壙墓 (南から)
- 5 J 調査区東半部第 1 面 全景 (西から)
- 6 J 調査区西半部第 1 面 全景 (西から)
- 図版 15 1 K 調査区第 1 面 全景 (東から)
- 2 L 調査区第 1 面 全景 (南西から)
- 3 M 調査区第 1 面 全景 (北東から)
- 4 M・N 調査区第 1 面 全景 (北東から)
- 図版 16 1 N 調査区第 1 面 全景 (南西から)
- 2 N 調査区第 1 面 全景 (南西から)
- 3 O 調査区第 1 面 O 2 溝断面 (南から)
- 4 O 調査区第 1 面 全景 (北東から)
- 5 P 調査区第 1 面 全景 (北東から)
- 6 P 調査区第 1 面 落ち断面 (北から)
- 図版 17 A・B 調査区出土遺物
- 図版 18 B 調査区出土遺物
- 図版 19 B・E・F 調査区出土遺物
- 図版 20 F・H 調査区出土遺物
- 図版 21 H 調査区出土遺物
- 図版 22 H 調査区出土遺物
- 図版 23 H・I 調査区出土遺物
- 図版 24 H・I 調査区出土遺物
- 図版 25 I・J・O 調査区出土遺物
- 図版 26 E・H・I 調査区出土遺物

第1章 調査にいたる経緯と経過

大阪湾の泉州沖に計画された関西国際空港建設に伴い、アクセス道路や鉄道の建設（現関西空港自動車道、空港連絡道路、JR・南海関西空港線）、関連施設建設および海岸部の埋め立て事業（りんくうタウン）などの開発が急激に進み、泉佐野市を中心とした地域における文化財調査もそれに伴い、件数が増加した。特に、空港連絡道路・空港連絡鉄道計画予定地については、周知の遺跡や未確認の遺跡の存在が予想されるため、大阪府教育委員会文化財保護課と担当各課の間で取り扱いが協議された。その結果、遺跡の分布状況の把握を目的とする分布調査を、大阪府教育委員会文化財保護課が実施することとなった。これを受けて、昭和60年2月に空港連絡道路・空港連絡鉄道計画予定地および、南海電鉄南海本線泉佐野駅から羽倉崎駅間、国鉄（現JR）阪和線熊取駅から日根野駅を通り空港連絡鉄道計画予定地までの間で、現地調査をおこなった。この結果、「中開遺跡」が新規発見遺跡として認定された。

その後、泉佐野都市計画道路事業・関西国際空港連絡鉄道・分岐線事業・南海本線（泉佐野市）連続立体交差事業という一連の関西国際空港関連の事業に伴い、平成2年2月に泉佐野市大西2丁目から松原1丁目において、（財）大阪府埋蔵文化財協会が試掘調査をおこなった。これを受けて、平成2年度には中開遺跡において、発掘調査が開始され、試掘調査も継続しておこなわれた。また、これに先立ち、平成元年には南海本線（泉佐野市）連続立体交差事業に伴う発掘調査が、（財）大阪府埋蔵文化財協会により、湊遺跡でも開始されている。南海本線（泉佐野市）連続立体交差事業は、井原の里駅から泉佐野駅間の主要地方道泉佐野熊取線との交差点から高架になり、関西国際空港へのアクセスとして泉佐野市大西付近で本線から分岐し、空港連絡道路と合流し空港へ至るものである。当初の調査対象地は、本線高架化工事の際に仮線路となる本線に隣接した部分である。

さらに、平成3年度には、同じく泉佐野都市計画道路事業・関西国際空港連絡鉄道・分岐線事業・南海本線（泉佐野市）連続立体交差事業に伴い、（財）大阪府埋蔵文化財協会が、続けて中開遺跡と大西遺跡の発掘調査と、南海本線線路敷に沿った部分（湊遺跡・上町東遺跡・上町遺跡・大西遺跡・中開遺跡）において試掘調査をおこなった。

平成4年度も継続して、泉佐野都市計画道路事業・関西国際空港連絡鉄道・分岐線事業・南海本線（泉佐野市）連続立体交差事業に伴い、（財）大阪府埋蔵文化財協会が、大西遺跡の発掘調査と試掘調査（上町遺跡隣接地 [泉佐野駅構内]）をおこなった。特に、平成3～4年度は、関西国際空港へのアクセス線の新規建設工事が優先されることから、中開・大西遺跡の調査を中心におこなわれた。また、この時期には、同時に空港連絡道路の建設に伴う発掘調査もおこなわれており、南海本線をまたぐ部分においても、中開遺跡の調査が進められていた。

平成5年度には、南海本線（泉佐野市）連続立体交差事業に伴い、（財）大阪府埋蔵文化財協会が、中開遺跡と上町遺跡の発掘調査をおこなった。この時点で、南海分岐線事業に伴う発掘調査はほぼ終了しており、平成6年の関西国際空港開港に向けて、空港連絡道路と連絡鉄道の建設が急ピッチでおこなわれた。

平成6年には関西国際空港が開港し、それに伴うアクセス道路や鉄道も一応完成したが、関連事業は継続して計画されており、さらに開発が進んでいる。泉佐野都市計画道路事業と南海本線（泉佐野市）連続立体交差事業は継続事業として、空港開港後も計画が進められることとなった。

平成7年度には、南海本線（泉佐野市）連続立体交差事業に伴い、泉佐野市教育委員会が、上町東遺

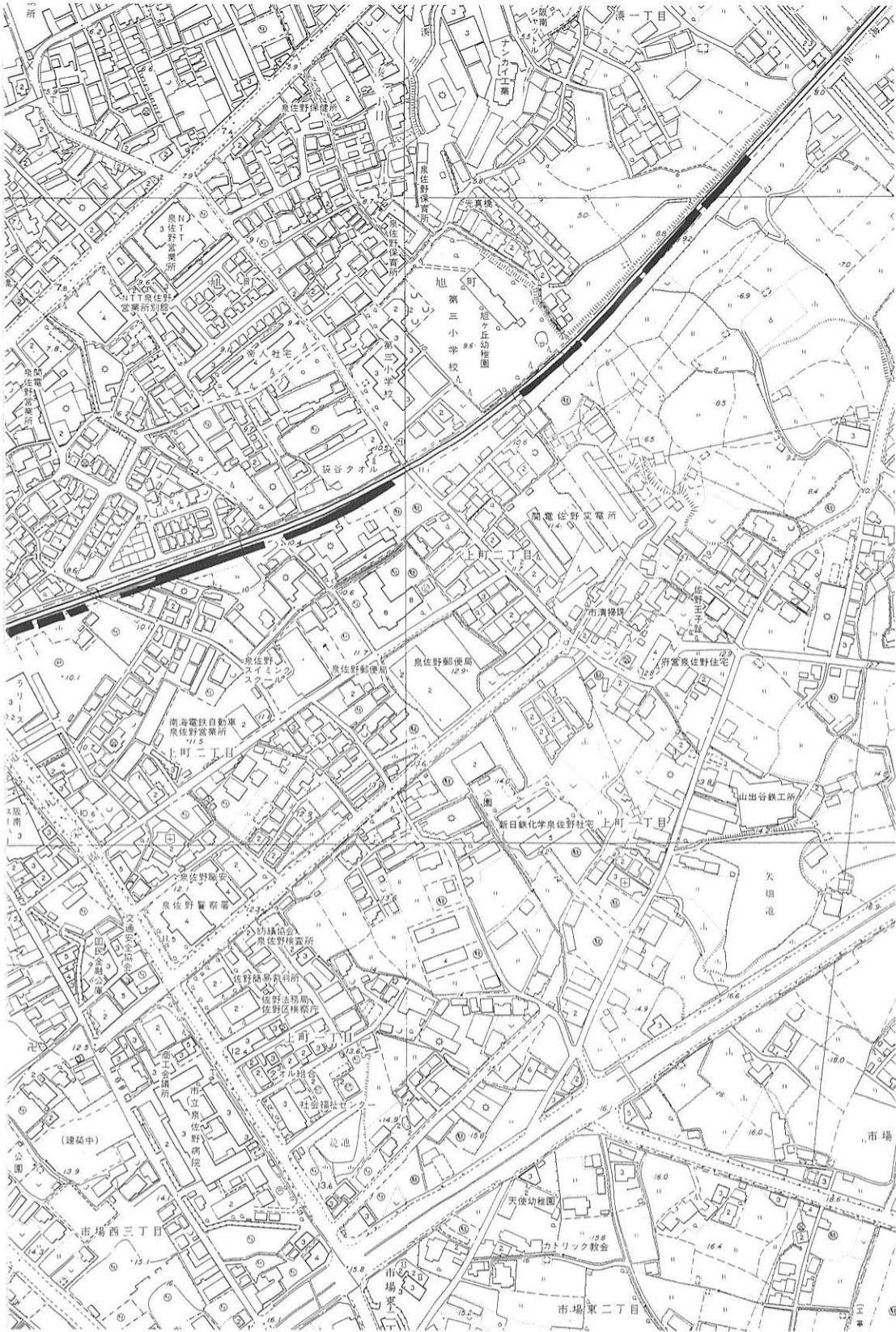
第1章 調査にいたる経緯と経過

跡の発掘調査をおこなった。調査主体は変わったが、本線高架化工事の際に仮線路となる本線に隣接した部分の調査であり、継続事業であることから、調査方針に変更はなく、幅約10mの狭長なトレンチ調査となった。調査は平成8年度にも断続的におこなわれ、平成9年度に現地調査を終了した。また、同事業の中で、泉佐野駅駅舎が高架化することから、泉佐野駅北側部分において再開発が計画され、若宮遺跡の範囲内にあたることから、それに伴う発掘調査を泉佐野市教育委員会がおこなうことになった。現地調査は、当該地区を分割して、平成9年度まで断続的におこなわれた。

平成9年度に、本線高架化工事の際に仮線路となる本線に隣接した部分の現地調査が終了したことから、仮線路工事が開始された。これに伴い、南海本線（泉佐野市）連続立体交差事業の本線高架化工事の計画が具体化したことから、平成10年11月に、大阪府教育委員会と大阪府、泉佐野市、南海電気鉄道株式会社、（財）大阪府文化財調査研究センター（現 大阪府文化財センター）の5者間で「南海本線（泉佐野市）連続立体交差事業における埋蔵文化財調査に関する協定」が締結された。これに基づき、平成10年12月に南海電気鉄道株式会社との委託契約を交わし、（財）大阪府文化財調査研究センターが発掘調査を実施することになったものである。埋蔵文化財調査工事は、単独でおこなわれるものではなく、南海本線（泉佐野市）連続立体化工事の中に組み込まれたものとなっている。そのため、車両が仮線路での運行を開始した後、本線部分の線路撤去、盛土除去、土留め用の鋼矢板打設という流れがスムーズにおこなわれた。鋼矢板打設終了後、順次調査に入ることになり、大阪側にある工事起点から泉佐野駅駅舎手前まで、すなわち湊遺跡から若宮遺跡の一部にかけての調査を、平成10年12月から平成12年11月まで継続的に行った。

そして、今回の調査は、これらの連続立体化工事によって上り線線路（難波方面行き）の高架橋建設工事がひとまず完成したことを受けて、旧線路および旧駅舎部分、すなわち湊遺跡、上町東遺跡、若宮遺跡、大西遺跡の4遺跡に跨って行われた。これは、連続立体化工事の全体計画の中では後半部分にあたるものの、工事の進捗上、一部未調査部分が残っており、工事完成後に調査に着手する予定である。調査期間は、平成14年9月より平成15年2月まで現地調査を行い、引き続き平成16年3月まで遺物整理作業を行った。

なお、この章は『湊遺跡他－南海本線（泉佐野市）連続立体化工事（第1工区）に伴う発掘調査報告書－』（財団法人大阪府文化財センター 2003）に修正・加筆を行った。



- 2 H 4 調査区第 1 面 全景 (東から)
- 3 H 5 調査区第 1 面 全景 (東から)
- 4 H 5 調査区第 1 面 H 15 土坑 (東から)
- 5 H 5 調査区第 1 面 H 15 土坑遺物出土状況 (北から)
- 6 H 2 調査区第 1 面 H 8 土坑・H 9 溝 (北から)
- 図版 12 1 I 1 調査区第 1 面 全景 (西から)
- 2 I 2 調査区第 1 面 全景 (東から)
- 3 I 3 調査区第 1 面 全景 (東から)
- 図版 13 1 I 3 調査区第 1 面 全景 (西から)
- 2 I 4 調査区第 1 面 全景 (西から)
- 3 I 5 調査区第 1 面 全景 (西から)
- 4 I 3 調査区第 1 面 I 11 井戸 (北西から)
- 5 I 3 調査区第 1 面 I 1 溝 (西から)
- 図版 14 1 I 3 調査区第 1 面 I 3 溝土器出土状況 (西から)
- 2 I 3 調査区第 1 面 I 3 溝土器出土状況 (南から)
- 3 I 3 調査区第 1 面 I 20 土壙墓 (南西から)
- 4 I 3 調査区第 1 面 I 22 土壙墓 (南から)
- 5 J 調査区東半部第 1 面 全景 (西から)
- 6 J 調査区西半部第 1 面 全景 (西から)
- 図版 15 1 K 調査区第 1 面 全景 (東から)
- 2 L 調査区第 1 面 全景 (南西から)
- 3 M 調査区第 1 面 全景 (北東から)
- 4 M・N 調査区第 1 面 全景 (北東から)
- 図版 16 1 N 調査区第 1 面 全景 (南西から)
- 2 N 調査区第 1 面 全景 (南西から)
- 3 O 調査区第 1 面 O 2 溝断面 (南から)
- 4 O 調査区第 1 面 全景 (北東から)
- 5 P 調査区第 1 面 全景 (北東から)
- 6 P 調査区第 1 面 落ち断面 (北から)
- 図版 17 A・B 調査区出土遺物
- 図版 18 B 調査区出土遺物
- 図版 19 B・E・F 調査区出土遺物
- 図版 20 F・H 調査区出土遺物
- 図版 21 H 調査区出土遺物
- 図版 22 H 調査区出土遺物
- 図版 23 H・I 調査区出土遺物
- 図版 24 H・I 調査区出土遺物
- 図版 25 I・J・O 調査区出土遺物
- 図版 26 E・H・I 調査区出土遺物

第1章 調査にいたる経緯と経過

大阪湾の泉州沖に計画された関西国際空港建設に伴い、アクセス道路や鉄道の建設（現関西空港自動車道、空港連絡道路、JR・南海関西空港線）、関連施設建設および海岸部の埋め立て事業（りんくうタウン）などの開発が急激に進み、泉佐野市を中心とした地域における文化財調査もそれに伴い、件数が増加した。特に、空港連絡道路・空港連絡鉄道計画予定地については、周知の遺跡や未確認の遺跡の存在が予想されるため、大阪府教育委員会文化財保護課と担当各課の間で取り扱いが協議された。その結果、遺跡の分布状況の把握を目的とする分布調査を、大阪府教育委員会文化財保護課が実施することとなった。これを受けて、昭和60年2月に空港連絡道路・空港連絡鉄道計画予定地および、南海電鉄南海本線泉佐野駅から羽倉崎駅間、国鉄（現JR）阪和線熊取駅から日根野駅を通り空港連絡鉄道計画予定地までの間で、現地調査をおこなった。この結果、「中開遺跡」が新規発見遺跡として認定された。

その後、泉佐野都市計画道路事業・関西国際空港連絡鉄道・分岐線事業・南海本線（泉佐野市）連続立体交差事業という一連の関西国際空港関連の事業に伴い、平成2年2月に泉佐野市大西2丁目から松原1丁目において、（財）大阪府埋蔵文化財協会が試掘調査をおこなった。これを受けて、平成2年度には中開遺跡において、発掘調査が開始され、試掘調査も継続しておこなわれた。また、これに先立ち、平成元年には南海本線（泉佐野市）連続立体交差事業に伴う発掘調査が、（財）大阪府埋蔵文化財協会により、湊遺跡でも開始されている。南海本線（泉佐野市）連続立体交差事業は、井原の里駅から泉佐野駅間の主要地方道泉佐野熊取線との交差点から高架になり、関西国際空港へのアクセスとして泉佐野市大西付近で本線から分岐し、空港連絡道路と合流し空港へ至るものである。当初の調査対象地は、本線高架化工事の際に仮線路となる本線に隣接した部分である。

さらに、平成3年度には、同じく泉佐野都市計画道路事業・関西国際空港連絡鉄道・分岐線事業・南海本線（泉佐野市）連続立体交差事業に伴い、（財）大阪府埋蔵文化財協会が、続けて中開遺跡と大西遺跡の発掘調査と、南海本線線路敷に沿った部分（湊遺跡・上町東遺跡・上町遺跡・大西遺跡・中開遺跡）において試掘調査をおこなった。

平成4年度も継続して、泉佐野都市計画道路事業・関西国際空港連絡鉄道・分岐線事業・南海本線（泉佐野市）連続立体交差事業に伴い、（財）大阪府埋蔵文化財協会が、大西遺跡の発掘調査と試掘調査（上町遺跡隣接地〔泉佐野駅構内〕）をおこなった。特に、平成3～4年度は、関西国際空港へのアクセス線の新規建設工事が優先されることから、中開・大西遺跡の調査を中心におこなわれた。また、この時期には、同時に空港連絡道路の建設に伴う発掘調査もおこなわれており、南海本線をまたぐ部分においても、中開遺跡の調査が進められていた。

平成5年度には、南海本線（泉佐野市）連続立体交差事業に伴い、（財）大阪府埋蔵文化財協会が、中開遺跡と上町遺跡の発掘調査をおこなった。この時点で、南海分岐線事業に伴う発掘調査はほぼ終了しており、平成6年の関西国際空港開港に向けて、空港連絡道路と連絡鉄道の建設が急ピッチでおこなわれた。

平成6年には関西国際空港が開港し、それに伴うアクセス道路や鉄道も一応完成したが、関連事業は継続して計画されており、さらに開発が進んでいる。泉佐野都市計画道路事業と南海本線（泉佐野市）連続立体交差事業は継続事業として、空港開港後も計画が進められることとなった。

平成7年度には、南海本線（泉佐野市）連続立体交差事業に伴い、泉佐野市教育委員会が、上町東遺

跡の発掘調査をおこなった。調査主体は変わったが、本線高架化工事の際に仮線路となる本線に隣接した部分の調査であり、継続事業であることから、調査方針に変更はなく、幅約10mの狭長なトレンチ調査となった。調査は平成8年度にも断続的におこなわれ、平成9年度に現地調査を終了した。また、同事業の中で、泉佐野駅駅舎が高架化することから、泉佐野駅北側部分において再開発が計画され、若宮遺跡の範囲内にあたることから、それに伴う発掘調査を泉佐野市教育委員会がおこなうことになった。現地調査は、当該地区を分割して、平成9年度まで断続的におこなわれた。

平成9年度に、本線高架化工事の際に仮線路となる本線に隣接した部分の現地調査が終了したことから、仮線路工事が開始された。これに伴い、南海本線（泉佐野市）連続立体交差事業の本線高架化工事の計画が具体化したことから、平成10年11月に、大阪府教育委員会と大阪府、泉佐野市、南海電気鉄道株式会社、(財)大阪府文化財調査研究センター（現 大阪府文化財センター）の5者の間で「南海本線（泉佐野市）連続立体交差事業における埋蔵文化財調査に関する協定」が締結された。これに基づき、平成10年12月に南海電気鉄道株式会社との委託契約を交わし、(財)大阪府文化財調査研究センターが発掘調査を実施することになったものである。埋蔵文化財調査工事は、単独でおこなわれるものではなく、南海本線（泉佐野市）連続立体化工事の中に組み込まれたものとなっている。そのため、車両が仮線路での運行を開始した後、本線部分の線路撤去、盛土除去、土留め用の鋼矢板打設という流れがスムーズにおこなわれた。鋼矢板打設終了後、順次調査に入ることになり、大阪側にある工事起点から泉佐野駅駅舎手前まで、すなわち湊遺跡から若宮遺跡の一部にかけての調査を、平成10年12月から平成12年11月まで継続的に行った。

そして、今回の調査は、これらの連続立体化工事によって上り線線路（難波方面行き）の高架橋建設工事がひとまず完成したことを受けて、旧線路および旧駅舎部分、すなわち湊遺跡、上町東遺跡、若宮遺跡、大西遺跡の4遺跡に跨って行われた。これは、連続立体化工事の全体計画の中では後半部分にあたるものの、工事の進捗上、一部未調査部分が残っており、工事完成後に調査に着手する予定である。調査期間は、平成14年9月より平成15年2月まで現地調査を行い、引き続き平成16年3月まで遺物整理作業を行った。

なお、この章は『湊遺跡他－南海本線（泉佐野市）連続立体化工事（第1工区）に伴う発掘調査報告書－』（財団法人大阪府文化財センター 2003）に修正・加筆を行った。

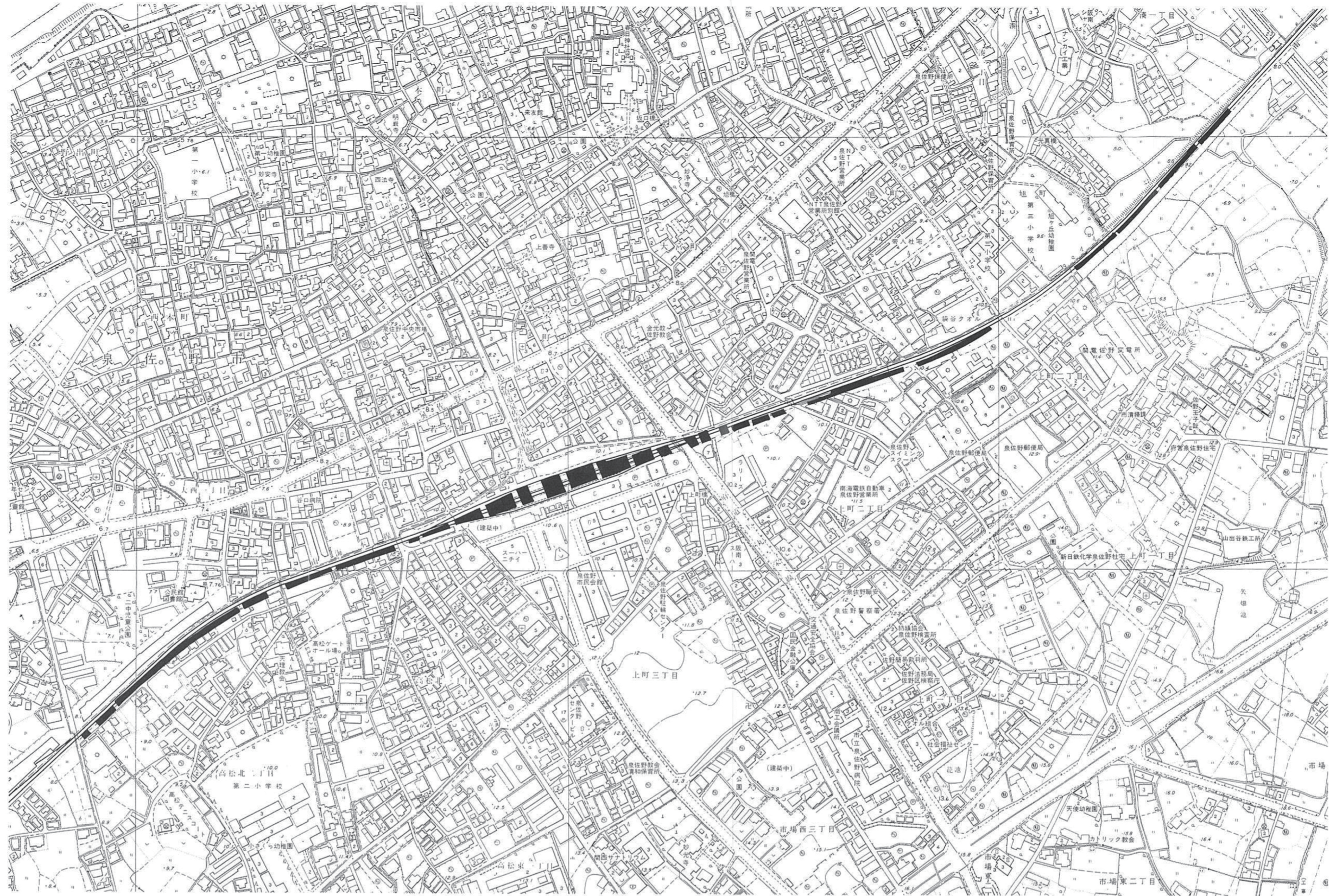


図1 調査区周辺図 1:5,000

第2章 位置と環境

1 地理的環境

今回の調査は、南海本線連続立体交差工事業に伴う性格上、湊遺跡、上町東遺跡、若宮遺跡、大西遺跡、4遺跡に跨った。うち湊遺跡、上町東遺跡、若宮遺跡の一部については、平成10～12年（1998～2000年）に調査された箇所に隣接しており、既刊の『湊遺跡他－南海本線（泉佐野市）連続立体化工事（第1工区）に伴う発掘調査報告書－』（財団法人大阪府文化財センター 2003）に詳しく述べてあるため、重複する部分についてはそちらを参照していただくとして省略する。

これらの遺跡群が所在する泉佐野市は、大阪府の南西部に位置する。市域の北西部は大阪湾に面し、南東部は和泉層群で形成された和泉山脈にあたる。そして、市域は地形的に大きく三つに分類することができる。まずは、市域の南東部に連なる和泉山脈および最上位段丘部、そこから海岸線に向かって緩やかな勾配をもつ上位段丘から中位段丘部、そして、北西部の大阪湾に面した地域に広がる下位段丘および沖積低地に区分される海岸平野部である。また、市内の地形を形成する大きな要因となっている3つの河川が存在しており、北から見出川、佐野川、榎井川となる。これらの河川はいずれも和泉山脈に端を発し、大阪湾に注ぎ込む。

湊遺跡は佐野川の左岸にあたり、大半が佐野川の氾濫低地および旧河川の埋没によって形成された沖積低地に立地するが、一部は榎井川との間に広がる下位段丘上に属する。上町東遺跡から若宮遺跡、さらに大西遺跡にかけては、佐野川と榎井川との間に形成された下位段丘上に立地するが、上町東遺跡と若宮遺跡は、間を流れる円田川によって分けられる。

2 歴史的環境

今回調査を行った湊遺跡他の周辺は多くの遺跡が存在することで知られていたが、関西国際空港建設に伴い、新規発見の遺跡も増え、大規模な発掘調査も行われるようになり、徐々にではあるが遺跡の状況も明らかになってきた。

湊遺跡は、昭和54年に確認された遺跡である。弥生時代から中世の複合集落遺跡として、あるいは多量の製塩土器が出土したことで知られる。上町東遺跡は、昭和63年に確認された遺跡である。鎌倉時代の集落遺跡で、掘立柱建物や区画溝をはじめとする遺構や日用雑器のほかにはふいごの羽口や鉄製小刀などが出土している。若宮遺跡は、昭和62年に確認された遺跡である。同年に泉佐野市教育委員会が調査を行ったが、中世後半の掘立柱建物群、区画溝、土壙墓群などを検出した。若宮遺跡の東には上町東遺跡、南には上町遺跡と中世前半代に開発された集落跡が存在するが、当遺跡の北側を紀州街道が通っていることや、塩汲道との接点に位置することなどから、この地域にまで開発が広がった結果であると考えられる。大西遺跡は、昭和61年に確認された遺跡で、中世後期の集落跡であるが、中世末以降の水田耕作による削平を受けていることや、大規模な調査が行われていないことなどから、詳細については不明である。

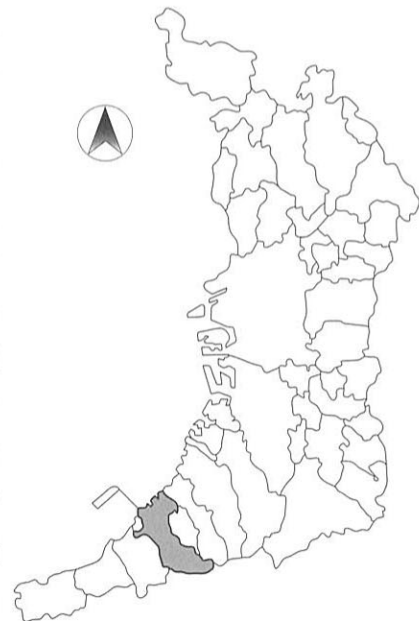
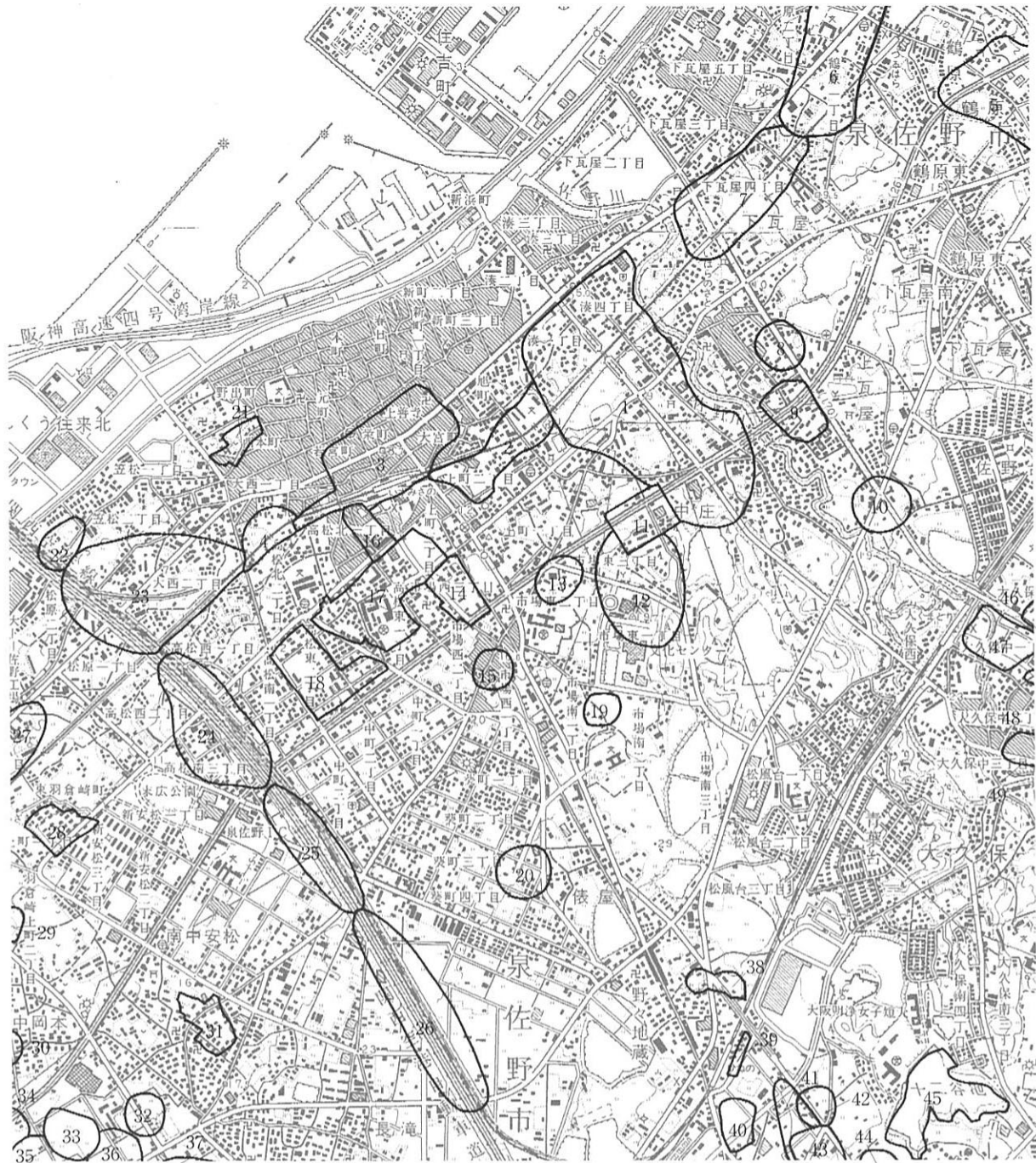


図2 泉佐野市位置図



- | | | | |
|------------|-----------|-------------|-------------|
| 1. 湊遺跡 | 13. 市場東遺跡 | 25. 安松遺跡 | 37. 諸目遺跡 |
| 2. 上町東遺跡 | 14. 市場西遺跡 | 26. 長滝遺跡 | 38. 北尻遺跡 |
| 3. 若宮遺跡 | 15. 市場南遺跡 | 27. 羽倉崎東遺跡 | 39. 日根野駅東遺跡 |
| 4. 大西遺跡 | 16. 若宮南遺跡 | 28. 安松田遺跡 | 40. 白水池遺跡 |
| 5. 貝田遺跡 | 17. 上町遺跡 | 29. 羽倉崎上町遺跡 | 41. 中嶋遺跡 |
| 6. 森山遺跡 | 18. 中ノ池遺跡 | 30. 岡本廃寺 | 42. 岡口遺跡 |
| 7. 井原の里遺跡 | 19. 井原池遺跡 | 31. 南中安松遺跡 | 43. 小塚遺跡 |
| 8. 上瓦屋遺跡 | 20. 俵屋遺跡 | 32. 岸ノ下遺跡 | 44. 十二谷遺跡 |
| 9. 上瓦屋南遺跡 | 21. 大場遺跡 | 33. 岡ノ崎遺跡 | 45. 日根莊遺跡 |
| 10. 山出遺跡 | 22. 松原遺跡 | 34. 船岡山南遺跡 | 46. 大久保D遺跡 |
| 11. 檀波羅密寺跡 | 23. 中開遺跡 | 35. 道ノ池遺跡 | 47. 大久保B遺跡 |
| 12. 檀波羅遺跡 | 24. 末廣遺跡 | 36. 中菖蒲遺跡 | 48. 降井家屋敷跡 |

図3 周辺遺跡分布図 (国土地理院発行 平成11年「岸和田西部」、平成12年「樽井」に一部加筆) 1:25,000

第3章 調査の方法

調査の方法については、基本的には前回の調査方法を遵守するかたちで行った。

今回は、調査区が南海本線の線路敷地内および泉佐野駅構内であることや、調査区の両側に擁壁や高架橋脚、さらには線路敷きに挟まれた位置に設定されたため、制約を受けたなかでの調査となった。また、連続立体化事業に伴う調査である関係上、幅約2～19 m、総延長約1.6 kmで、平面形がS字状を呈する狭長なものとなっている。そこで、調査区の設定は橋脚下部工の単位および調査区を横切る生活道路や水路、作業効率さらには工区が3工区に分かれていることなどを考慮して、全体をA～Pと16調査区に分けた（図4）。

さらにG～I調査区に関しては、橋脚下部工の単位ごとに枝番をつけて調査を行った。調査区は橋脚下部工事に伴って閉め切り鋼矢板を打設して土留めが施されていたが、HおよびI調査区に関しては、一部を除いて既往の調査区のラインが鋼矢板の内側にあったため、重複する部分はオープンカット工法で掘り下げた。

A～C調査区に関しては、既往の調査成果から谷状地形や旧河道が調査区を横切っており、調査対象面が深いため、H鋼による支保工を施して調査を行った。しかし、谷状地形や旧河道の底は、橋脚基礎部分のレベルよりも深かったため、基盤層上面まで達しない箇所があった。そこで他の工法を使用して下層の調査を行えないか協議を重ねたが、調査区の両側をはしる線路に与える影響を考慮すれば無理であるとの結論に達したため、安全上の最深レベルまで掘り下げた段階で調査を終了した。従って、線路敷設の際の盛土が除去できない状態で調査を終了した箇所がある。

また、G調査区に関しても、表土および盛土を重機で掘削した結果、調査対象面が深くなることが確認できたため、H鋼による支保工を施して調査を行った。

なお、D～P調査区では、最終調査対象面よりも橋脚下部工の掘削深度の方が深かったが、最終調査対象面を検出した段階で調査を終了した。

出土遺物の取り上げについては、今回の調査区がS字状の狭長な平面形を呈し、かつ座標軸に対して大きく傾くことなどから、前回の調査方法を踏襲して、各地調査区の難波側から和歌山側に向かって10 m毎に地区区割りをし、これを行った。

遺構番号については一部凡例でも述べたが、現地調査段階では基本的に前回調査と同様の手法で番号をつけているが、G～I調査区に関しては枝番をふった調査区毎に遺構番号をつけた。整理段階では遺構の性格を示すために遺構名を番号の前につけた。

遺構面は、各トレンチにおける検出順に上層からつけた。そのため、各トレンチ間の同一番号がそのまま同一面を表しているとは限らない。

遺構全体の実測作業は、最終遺構面についてはヘリコプターによる写真測量および図化作業（1/50）を測量業者に委託して行った。遺構図や遺物出土状況図それに断面図などの作成に関しては、適当な縮尺を用いてこれを行った。

現地調査における記録写真に関しては、35mmカメラ（黒白、カラーリバーサル）と6×7カメラ（黒白）を適宜使用して、調査担当者が撮影を行った。

第3章 調査の方法

本報告書に掲載した遺構図（平面図、断面図）は全てデジタルデータによって作成したものである。デジタルデータの作成方法については次のとおりである。

○デジタルデータ作成に使用した機材

PC	CPU	Pentium 4 プロセッサー	1.8GHz
	メモリ	512MB	
	HDD	80GB	
ディスプレイ		19 インチ TFT	
スキャナー		A 4 判、A 3 版（A 3 版を超えるものは外注）	
ソフトウェア		Adobe PhotoShop7.0、Illustrator10	

○発掘調査中に作成した手書きの実測図の場合

原図をスキャナーを用いて取り込み（300dpi）、PhotoShop7.0 上でトリミングし、Illustrator10 を用いて加工（トレース）し、デジタルデータ化した。

○空中撮影により作成した平面図の場合

解析図化機によって数値図化(DXF 形式)されているため、Illustrator10 上で簡単な加工のみ行った。

デジタルデータの有効性

本報告書の作成作業の中で行った遺構図のデジタル・データ化について、その有効性について若干述べることにする。

従来の報告書作成作業の中で大きな時間的ウェイトを占める挿図の版下作成作業（トレースを含む）が、単純化したことである。具体的には、従来の版下作成作業では、掲載する図のスケールを確定し、線号を決め、トレースを開始する。その作業に入る前提として、原図を縮小しあるいは複写し、つなぎ合わせ、トレースの下図の作成を行わなければならなかった。これらの作業はすべて報告書の全体を見通した上で実施できるものであって、全体構想が固まらなければ円滑に作業を進めることはできなかった。さらに、縮小コピー、張り合わせ等の作業では誤差が生じる恐れがあり、かなり慎重な作業が要求された。

今回試みた作業では、現場作業中から完成した図面を随時スキャンニングし、PC 上でトレースし、データ化を進めた。したがって、現場作業の終了時点では現場で作成した図の大半がデータ化されており、報告書作成作業に置き換えて考えれば遺構図のトレースが終了していたことになる。できあがったデータには次のような利点があげられる。

- ・スケール、線号を自由に変更できる。
- ・網掛け、張り合わせ等自由に加工することができる。
- ・大型の図（付図、折り込み図）であっても画面上での作業なので、取り扱いと比較的簡単である。
- ・精度の高い図を作成できる。
- ・データは報告書以外にも有効利用できる。

報告書作成過程で補助労力として、一部の作業に上記のようなことを取り入れたわけであるが、さらに改善の余地はあるものの、今後有効な手段として活用されるものと考えられる。

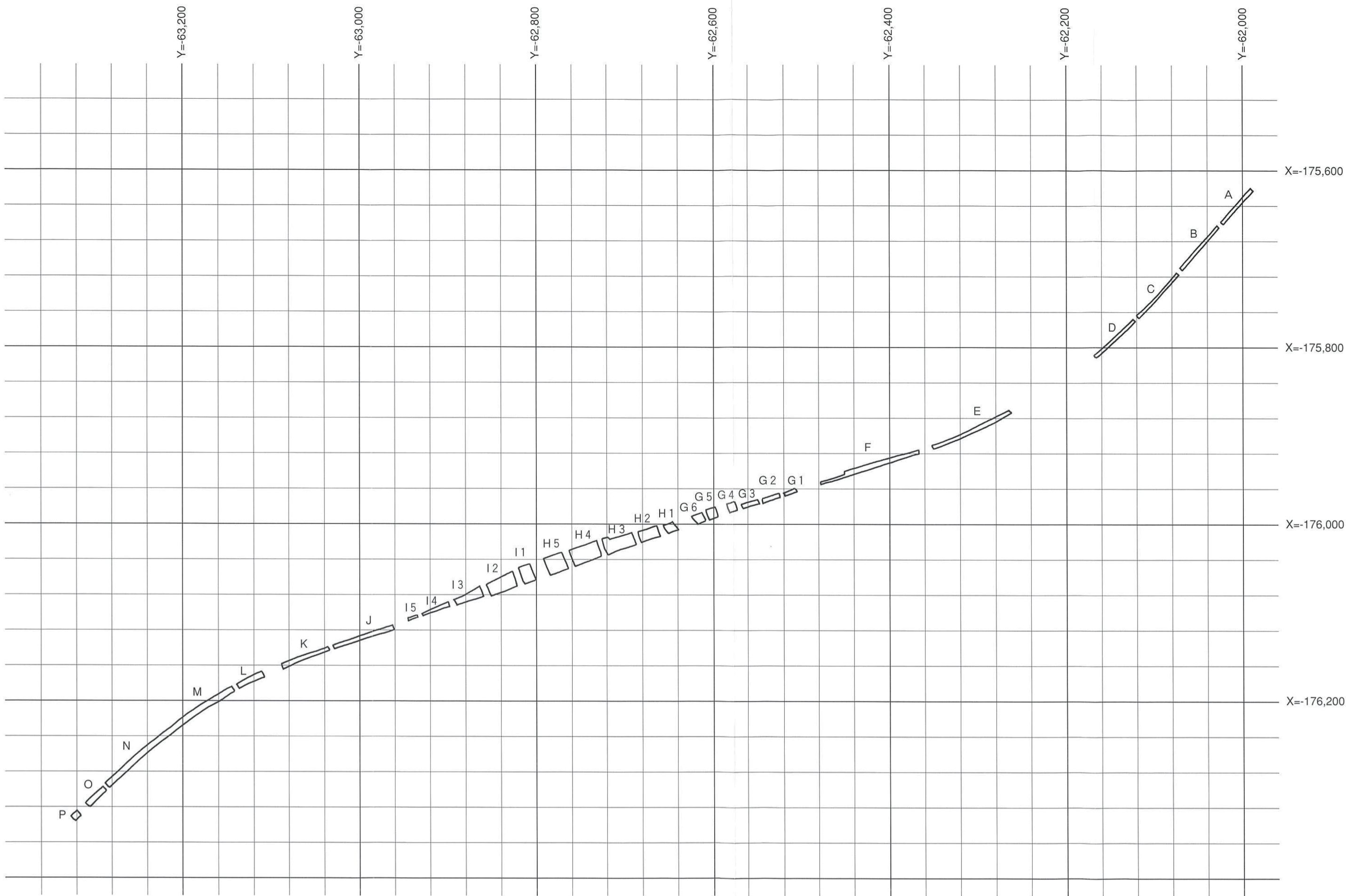


图4 調査区位置図 1:4,000

第4章 調査成果

第1節 基本層序

今回の調査区の総延長が約1.6 kmと長いことから、断面図はトレンチ毎の柱状図で表した。そして、本節の記述については各遺跡単位に分割して行った。但し、湊遺跡・上町東遺跡・若宮遺跡の一部は、前回の調査区に接していることから、詳細については割愛する。

湊遺跡（A～C調査区）については、調査区の大部分が南東－北西方向に広がる開析谷の中にあっており、谷を流れる自然流路による洪水砂層が堆積する。この洪水砂層は、粗砂・細砂を中心とする層とシルト層の互層で構成される。

この開析谷は前回の調査時と同様、その大半は南海本線建設時の線路盛土によって埋められていた。この線路盛土は、3 mを超える厚さの箇所もあり、掘削限界深度を越えて線路盛土がされている箇所もみられる。したがって、安全上、線路盛土や包含層の途中で調査を終了したことから、この開析谷の全容については今後の調査成果を待つ必要がある。

A調査区では、線路盛土の下層には旧耕土層および近世耕作土層と整地土層が堆積する。その下には中世の包含層が0.1～0.3 mの厚さで堆積するが、これは開析谷が埋没した際の最終堆積層であると考えられる。A調査区の難波側から中央部まではこの中世包含層を除去して、古墳時代中期から中世の自然流路の洪水砂層を除去し、弥生時代末から古墳時代初頭の土壌化が認められる面を検出した。調査区の中央部より和歌山側については、線路盛土の途中で掘削限界深度に達したため、下層については不明である。

B調査区においてもA調査区と同様の堆積状況が看取されたが、中世の包含層の下層で明確な土壌化面を1面検出した。

C調査区においては、難波側はB調査区と同様、線路盛土の下に旧耕土層および近世耕作土層が存在する。その下層には中世包含層が堆積しており、それを除去して中世の水田耕作面を検出した。この中世の耕作土層を除去した段階で洪水砂の堆積が確認できた。なお、調査区中央部においては、旧耕土層を除去した段階で基盤層を検出した。調査区の和歌山側は再び開析谷の落ちがはじまり、線路盛土が掘削限界深度にまで達する。

上町東遺跡（D～F調査区）は、湊遺跡から続く開析谷の一部と、段丘平坦面上に立地する。開析谷内の堆積状況は湊遺跡のそれと大差ないが、段丘平坦面上の堆積は薄く、攪乱や削平が著しい。旧耕土層はほぼ全域で認められ、その直下で基盤層上面となる。

D調査区では一部近世耕作土層が認められる。

E調査区は攪乱や削平が著しく、旧耕土層の直下で基盤層上面を検出した。

F調査区は、E調査区よりも段丘面が低くなっているため、中世包含層が良好な状態で残っており、掘立柱建物や土壙墓などの遺構も検出された。

若宮遺跡（G～K調査区）は、遺跡の東端を円田川が流れており、その氾濫原と西に広がる段丘平坦面となる。

G 1～4調査区は円田川の氾濫原による堆積が認められる。近世および中世の包含層が堆積しており、掘削限界深度まで掘り下げたが、下層には大人の拳大の円礫層が堆積する。

G 5・6調査区は円田川の左岸に広がる段丘平坦面となるため堆積は薄く、線路盛土の下層には旧耕作土層および近世耕作土層が存在するのみで、基盤層上面に達する。

第4章 調査成果

H・I調査区は、駅舎部分にあたることから、線路盛土が厚く施されていた。その下層も旧耕作土および近世耕作土層のみ存在する。中世の遺構は検出されるものの、包含層の堆積は認められなかったことから、削平を受けたと考えられる。

J・K調査区は、旧耕作土層の下面で基盤層上面を検出した。この旧耕作土層を除去した際に、基盤層を削り出した畦畔が検出されたことから、かなり削平を受けているものと考えられる。そのため検出された遺構も少ない。

大西遺跡（L～P調査区）は、その大部分が若宮遺跡から広がる段丘平坦面に立地するため、堆積層は薄い。

L～N調査区は、旧耕作土層および部分的に残る近世耕作土層がみられるのみで、大半は旧耕作土直下で基盤層上面を検出した。

O調査区は段丘平坦面の端部にあたるため、旧耕作土層と近世耕作土層の下層に中世包含層の堆積が残る。全体的に攪乱や削平が著しい。

P調査区は、段丘平坦面の縁辺部に位置し、開析谷の肩部にあたる。そのため、旧耕作土層の下層に中世包含層が良好に残る。

第2節 湊遺跡

1 A調査区

当調査区は、湊遺跡の縁辺部に位置し、開析谷（谷1）の中にあたる。前節でも述べたとおり、線路盛土が厚く施されており、下層の包含層は比較的良好に残っていた。線路盛土の直下には旧耕作土層があり、その下層には近世および中世以降の耕作土層（第2・3層）が存在するが、線路および切梁などの障害物があるため重機による掘削が行えず、人力普通掘削によって除去して調査を行った。但し、調査区の中央部より南（和歌山側）はさらに線路盛土が厚く、掘削限界深度まで掘り下げても包含層および遺構面を検出するにいたらなかった。従って、精査が行えたのは北半部（難波側）のみである。つまり、谷1の最終埋没面は北から南に向かって低くなることが看取できた。第4層は、谷を流れる自然流路が運んできた洪水堆積物で、砂層を主体とする土層が認められた。第4層洪水砂を掘削して、標高5.7mでシルト層を主体とする土壌化層を検出した（第5層上面）。しかし、第5層上面はほぼ掘削限界深度に達しており、基盤層を検出することができなかった。第5層上面で検出された遺構は、溝、土坑、落込みなどであるが、いずれも不定形なものである。遺構埋土はいずれも上層の洪水砂層を主体とする土層が認められる。

A1溝は調査区の北西隅で検出した。埋土中より弥生土器の小片が出土した。

A2溝は北東隅で検出した。

A3土坑は径0.4mの円形を呈し、深さは0.2mを測る。

A4溝は平面不定形を呈す。深さは0.3mを測る。

A5溝は山側から海側に向かって走り、西側の落込みに取りつく。

A6土坑は不定形を呈し、深さ0.2mを測る。出土遺物は弥生土器、製塩土器などである。1は弥生土器甕の底部である。摩滅が著しいものの外面にタタキ調整が残る。2は製塩土器の脚部である。筒部から大きく開く脚をもつ。脚台1式に分類されるものである。

A7溝は幅0.7m、深さ0.2mを測り、西側の落込みに取りつく。

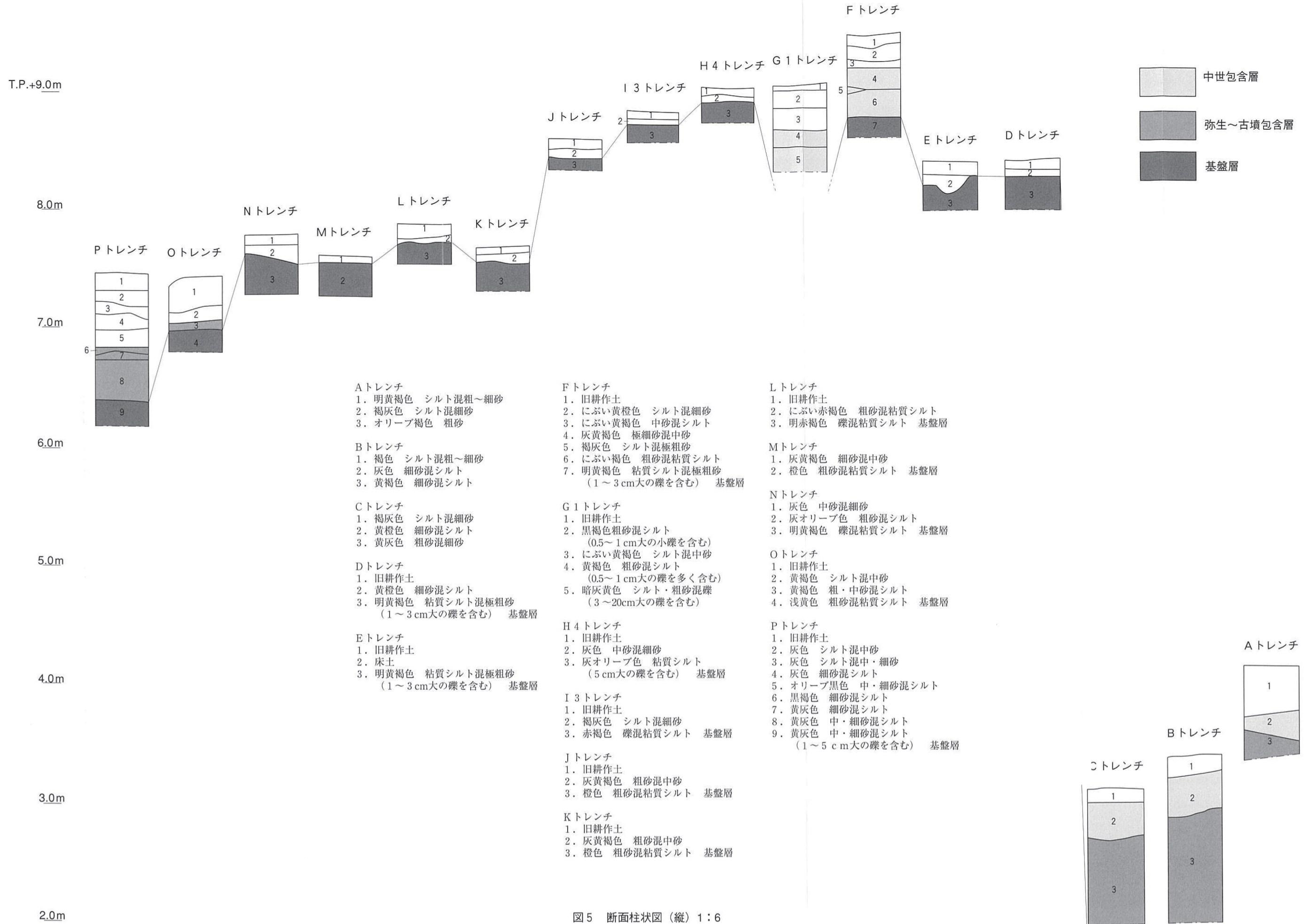


図5 断面柱状図(縦) 1:6

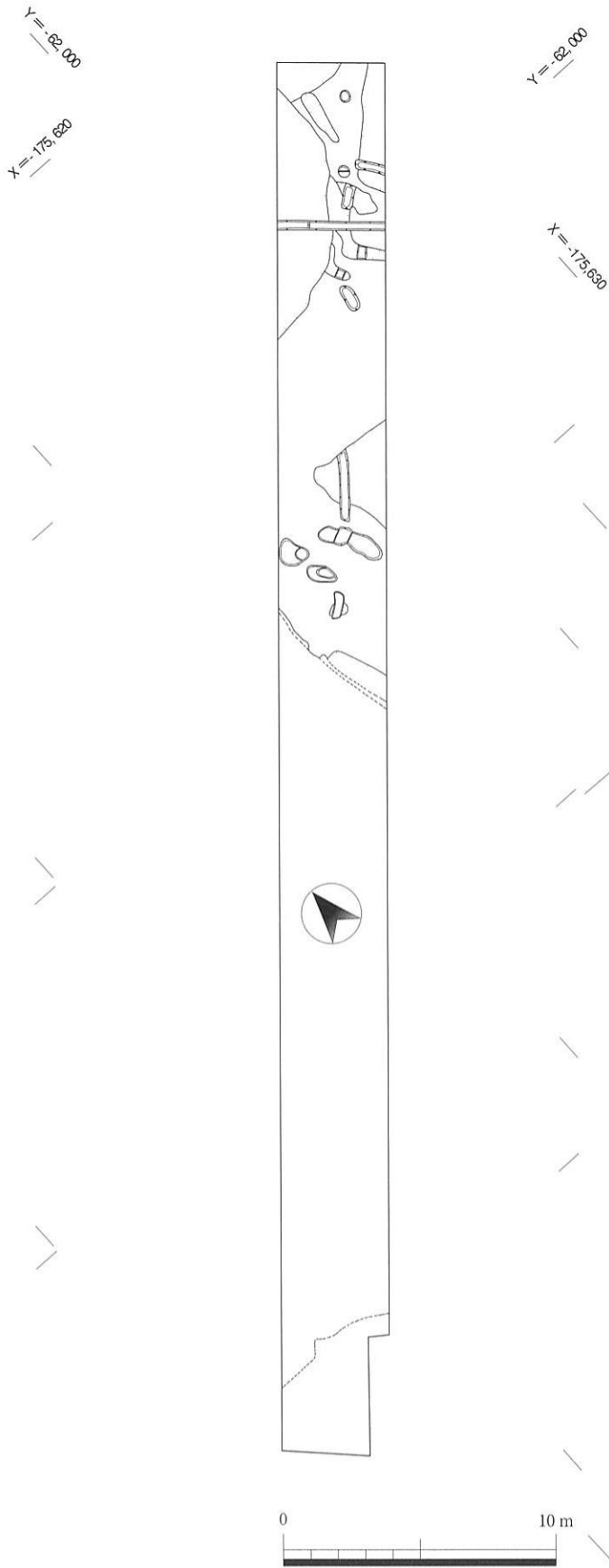


図6 A調査区最終掘削面平面図

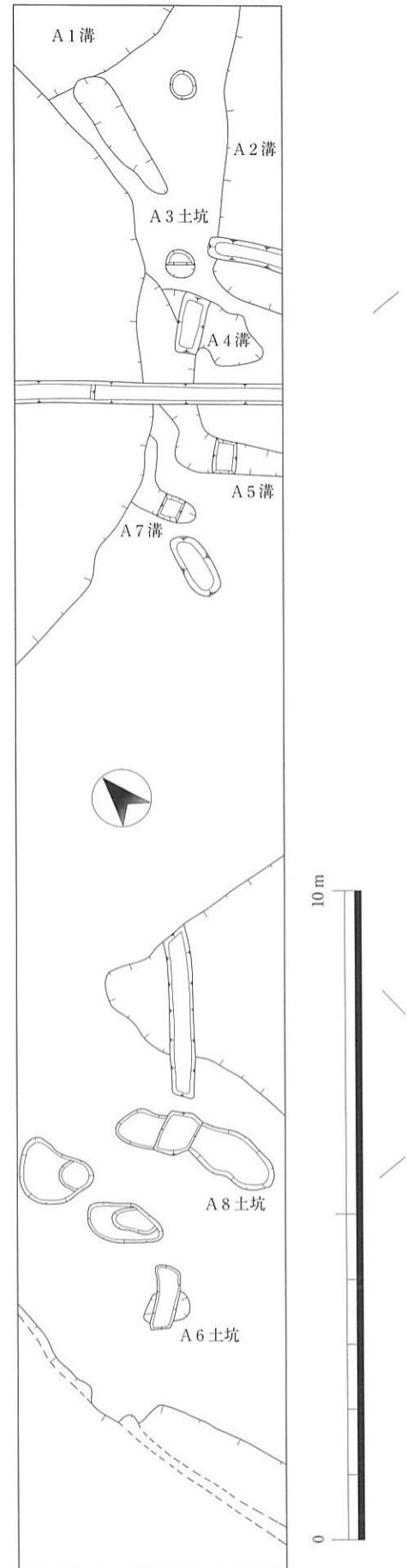
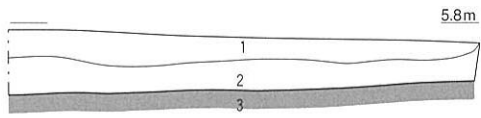


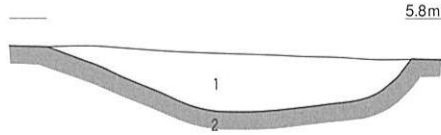
図7 A調査区北端部最終掘削面平面図

第4章 調査成果



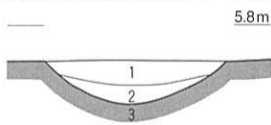
- 1 灰オリーブ色シルト混じり極細砂
- 2 灰オリーブ色極細砂混じり細砂
- 3 灰黄色極細砂

図8 A 調査区最終掘削面 A 1 溝断面図



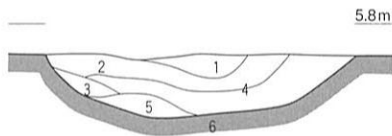
- 1 灰黄色細砂
- 2 灰黄色極細砂

図9 A 調査区最終掘削面 A 2 溝断面図



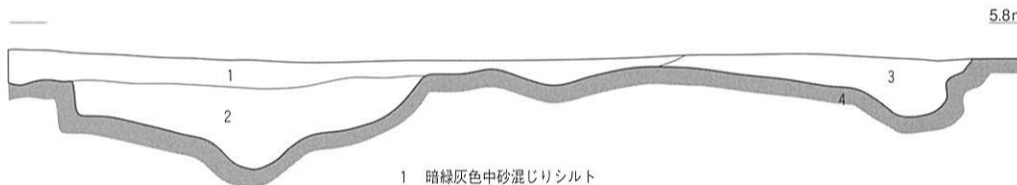
- 1 明黄褐色細砂混じりシルト
- 2 灰黄褐色極細砂混じりシルト
- 3 灰黄色極細砂

図10 A 調査区最終掘削面 A 3 土坑断面図



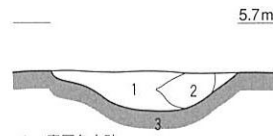
- 1 灰黄褐色粗砂混じり細砂
- 2 灰白色粗砂
- 3 にぶい黄橙色中砂
- 4 褐灰色砂、中砂混じりシルト（炭化物含む）
- 5 褐灰色礫混じり粗砂
- 6 灰黄色極細砂

図11 A 調査区最終掘削面 A 4 土坑断面図



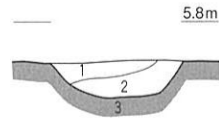
- 1 暗緑灰色中砂混じりシルト
- 2 オリーブ灰色細砂混じり粗、中砂
- 3 褐灰色粗砂混じりシルト（土器片含む）
- 4 灰黄色極細砂

図12 A 調査区最終掘削面 A 5 溝断面図



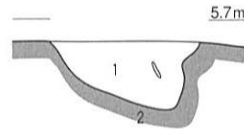
- 1 青灰色中砂
- 2 暗青灰色極細砂混じりシルトブロック
- 3 灰黄色極細砂

図13 A 調査区最終掘削面 A 6 土坑断面図



- 1 にぶい黄色褐粗砂、中砂混じりシルト
- 2 灰黄褐色シルト混じり中砂（土器片含む）
- 3 灰黄色極細砂

図14 A 調査区最終掘削面 A 7 溝断面図



- 1 暗青灰色極細砂混じりシルト（土器片含む）
- 2 灰黄色極細砂

図15 A 調査区最終掘削面 A 8 土坑断面図

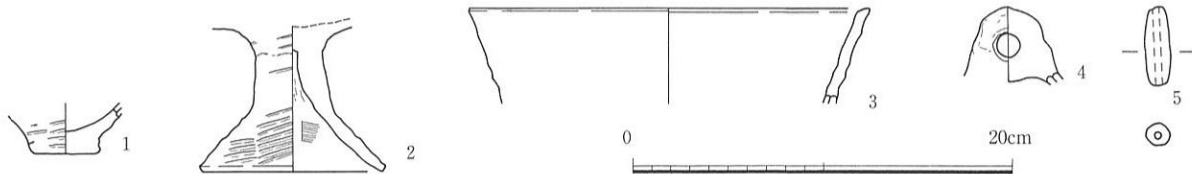


図16 A 調査区出土遺物図

A 8 土坑は長さ 2.5 m、幅 0.8 m、深さ 0.4 m を測る。出土遺物は弥生土器、製塩土器などである。弥生土器については小片のため、図示できなかった。3 は製塩土器の口縁部である。口径および形態から脚台 2 式と考えられる。また、包含層より 4 の須恵器タコ壺、5 の土錘などが出土した。

2 B 調査区

当調査区は、A 調査区から続く谷 1 の中にあたる。やはり、線路盛土が厚く、下層の残りは良好であった。当調査区も人力普通掘削によって線路盛土、旧耕作土層および中世以降の耕作土層を除去した後、精査を行い、標高 5.1 m で、中世の耕作面（第 4 層上面）を検出した。検出した遺構は耕作に伴う溝群と土坑 1 基である。

溝群は、北東-南西方向を指向するが、これは現在、調査区周辺にみられる地割り方向とも一致する。このことから、少なくともこの周辺の地割りは、中世段階には成立していたといえる。溝群の埋土は中砂混じりシルトである。埋土中から須恵器、土師器、瓦器などの細片が出土したが、図示できるものはなかった。

B 1 土坑は調査区のほぼ中央隅で検出した。長径 1.0 m、短径 0.8 m の楕円形を呈し、一段テラスをもつ。なお、遺物の出土はなかった。

第 4 層を除去した下層には、谷 1 の中の洪水砂層が約 0.6 ~ 1.0 m 以上の厚さで堆積する。この洪水砂層は大きく 3 層に分層できる。最上層の 6 層内からは須恵器、弥生土器、製塩土器などが出土した。14 ~ 17 は須恵器である。14 は杯蓋である。15 は杯身である。16・17 はタコ壺である。18 は弥生土器壺底部であるが、混入と考えられる。19 ~ 22 は製塩土器である。19 は口縁部である。20 ~ 22 は脚部である。製塩土器はいずれも脚台 2 式である。中層の 7 層からは、製塩土器の脚部（23 ~ 25）が出土した。いずれも脚台 2 式である。下層の 8 層からは弥生時代後期後半の土器が出土した。26 ~ 32 は甕である。33 ~ 35 は壺である。33 は体部下半に焼成後穿孔が認められる。34 は底部外面に木葉痕が残る。36 は高杯である。37 は脚台 1 式の製塩土器である。

この洪水砂を除去して、標高 4.1 ~ 4.5 m でシルト層を基盤とする土壌化のみられる遺構面（第 9 層上面）を検出したが、調査区南端部は、洪水砂が掘削限界深度を越えて堆積しているため、遺構面は検出できなかった。

遺構面は、起伏が激しく比高差は 0.4 m を測る。これは下層の谷 1 が埋没した際の自然地形によってできた窪みに、自然流路が流れたためと考えられる。主だった遺構は検出されなかったが、調査区の北西隅にある落込み状の肩口に土器溜りを検出した（図 21）。出土遺物は、畿内第 5 様式の弥生土器、砥石などである。6 ~ 12 は弥生土器である。6 ~ 11 は甕、12 は鉢である。13 は砂岩製の砥石である。下半部を欠損するが、3 面に使用痕が認められる。

なお、この面の土手状の高まり部分を中心に風倒木を 14 本と、流木を 1 本検出した。樹種鑑定の結果、風倒木についてはコナラ亜属 2 点、マツ科 7 点、ヤナギ属 2 点、ミズキ 2 点、トチノキ 1 点で、流木はマツ科であった。これらの結果から、当時の植生は水辺に近い二次林であったと考えられる。

3 C 調査区

当調査区は、線路盛土、旧耕作土層および中世以降の耕作土層を重機で除去してから精査を行った。そして、人力によって、厚さ約 0.3 m の中世耕作面（第 1 層上面）を検出した後、包含層およびその下

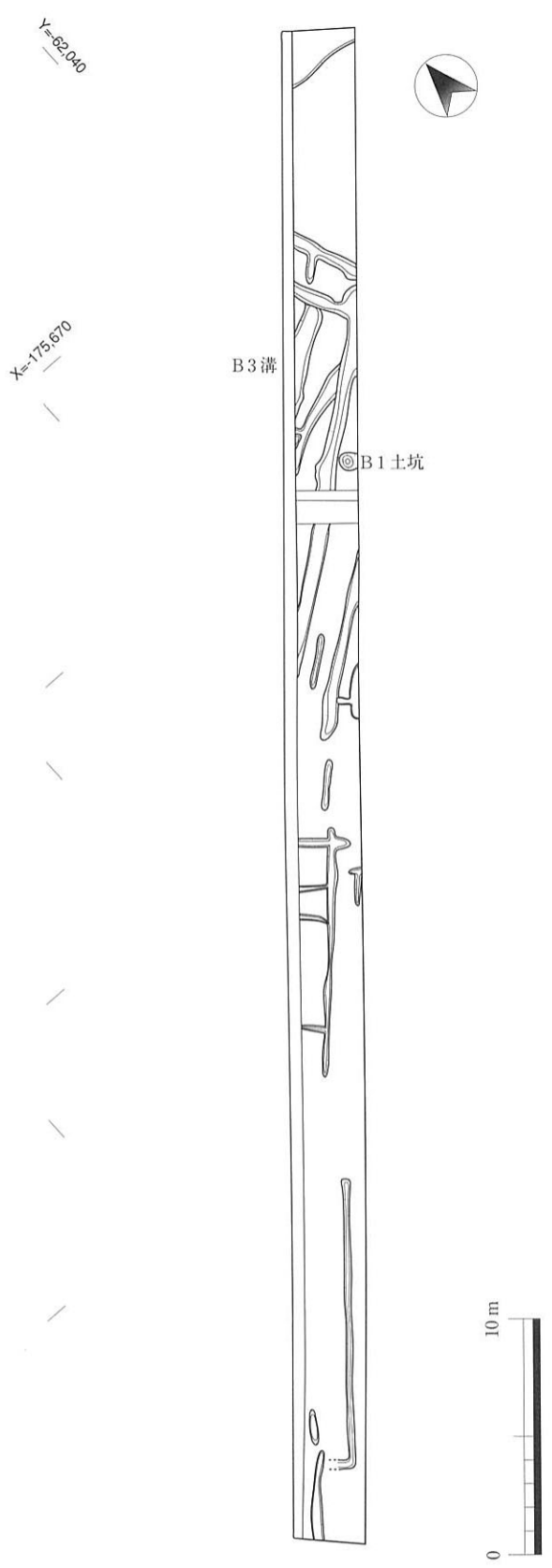


図17 B調査区第4層上面平面図

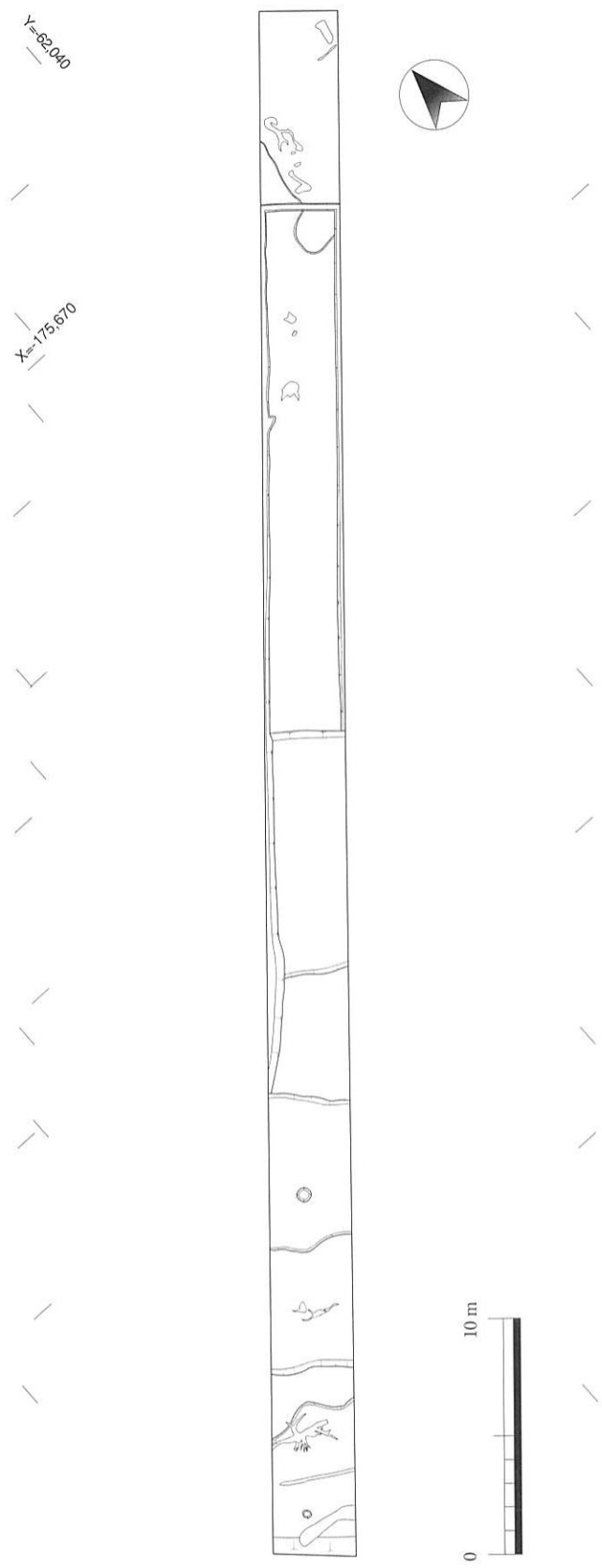


図18 B調査区第7層上面平面図

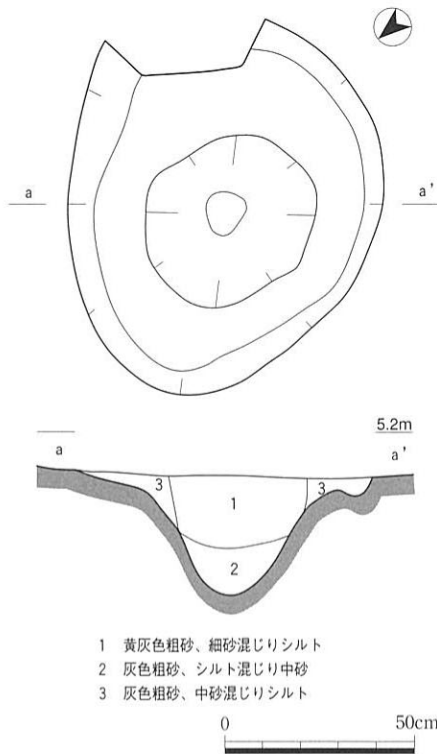


図19 B調査区第4層上面 B1土坑平面図・断面図

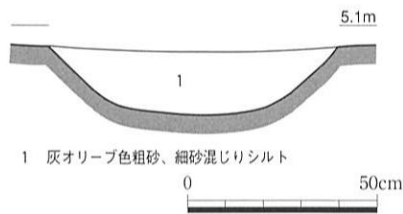


図20 B調査区第4層上面 B3溝断面図



図21 B調査区第9層上面 土器溜り平面図

層にある厚さ約0.7mの洪水堆積層を掘削した。結果、2つの谷と、段丘面を検出した。

段丘面は調査区のほぼ中央部に位置する。標高5.9mを測り、南東-北西方向にのびる。この段丘面の幅は、山側よりも海側の方が狭くなっていることや、既往の調査成果などから、山側から派生しており、調査区のやや海側（北西方向）で収束し、2つの谷が合流する。

A調査区から続く谷1は、C調査区の北端部で、標高約4.0～5.1mで谷の底を検出した。段丘面を挟んだ南側にある谷2は、段丘崖を形成しながら急激に落ち、標高4.8mでテラス面（第3層上面）をもつ。テラス面では溝、ピット、土坑などを検出した。

C1溝は段丘崖の縁辺部に沿ってはしるもので、深さは約0.4mを測る。このC1溝は、下層にある谷底をはしる自然流路が埋没した際の最終面と考えられる。このC1溝内より弥生時代後期後半の土器が出土したが、図示できたのは1点だけである。38は、壺の口頸部である。ピットは4基検出し、いずれも径約0.2～0.3m、深さ0.1m前後を測る。

C 2 土坑は、径約 0.6 m、深さ約 0.2 m を測るが、遺物の出土はなかった。なお、調査区の南端部から 10 m は、掘削限界深度が高く、第 2 層の途中までしか調査行うことはできなかった。

厚さ約 0.2 m の第 3 層を除去して、第 4 層上面を検出した。段丘面から 1.4 m 下にテラス面が形成され、山側から海側に向かって開口する自然流路を検出した。断面観察によると流水堆積が認められる。

第 3 節 上町東遺跡

1 D 調査区

当調査区は、一部を除いて上町東遺跡となるが、C 調査区から続く谷 2 と、段丘面を検出した。段丘面を除く山側半部は、平成 5 年に財団法人大阪府埋蔵文化財協会が発掘調査を行っており、中世の掘立柱建物をはじめとする遺構が検出されている。また、調査区海側半部についても南海本線創業時の線路盛土が存在しており、谷部分のほとんどを人力普通掘削によって除去したが、掘削限界深度にいたっても線路盛土が認められる。

従って、遺構面および包含層が残っていたのは、段丘面上および段丘崖部のみである。調査区南西端は段丘平坦面の縁辺部にあたり、標高は 9.0 m を測る。当調査区における谷底の掘削限界深度が 5.6 m であることから、段丘面と谷との比高差は 3.4 m 以上を測ることになる。段丘面は約 0.5 m の線路盛土と旧耕作土層を除去して検出したが、後世の削平と攪乱が著しく遺構は検出されなかった。遺物は土師質のマダコ壺 (39) などが出土した。

2 E 調査区

当調査区は、D 調査区の南西端で検出した段丘面上に立地する。後世の攪乱による削平が著しかったことや、南側が調査済みであったため、実際に調査を行ったのは、幅 1.0 ~ 4.4 m と狭小な範囲であった。特に調査区の東側 1/3 は、標高 10.3 m を測り、盛土および旧耕作土層を除去した段階で基盤層上面を

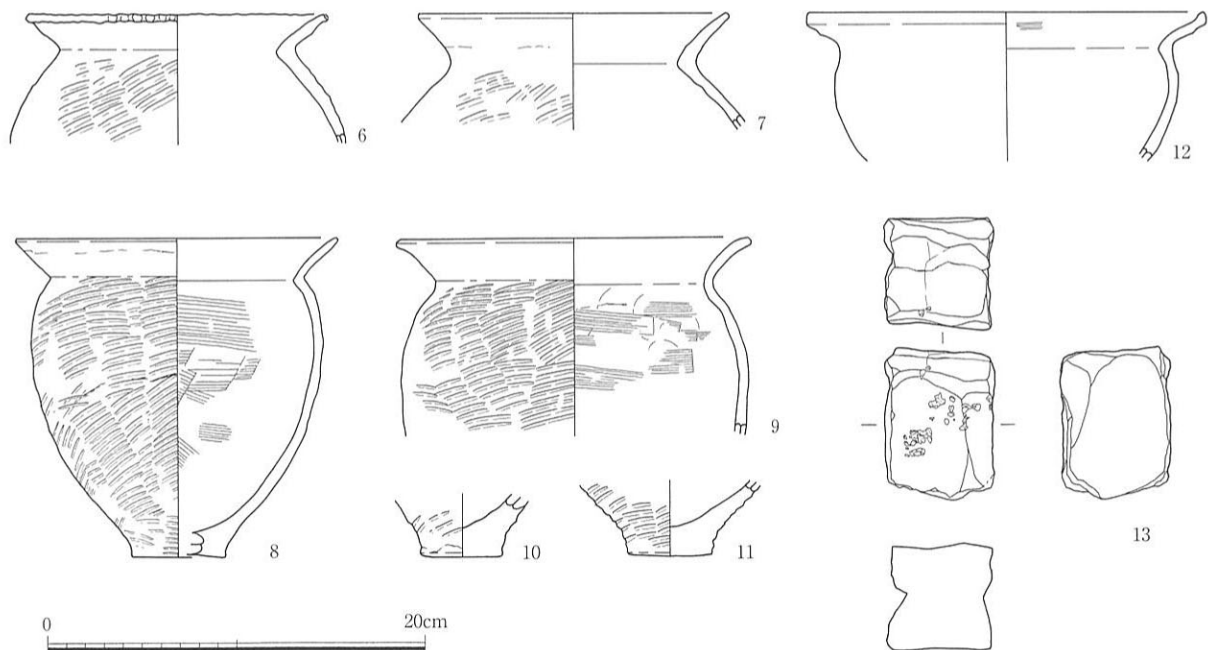


図22 B 調査区第 9 層上面 土器溜り出土遺物図

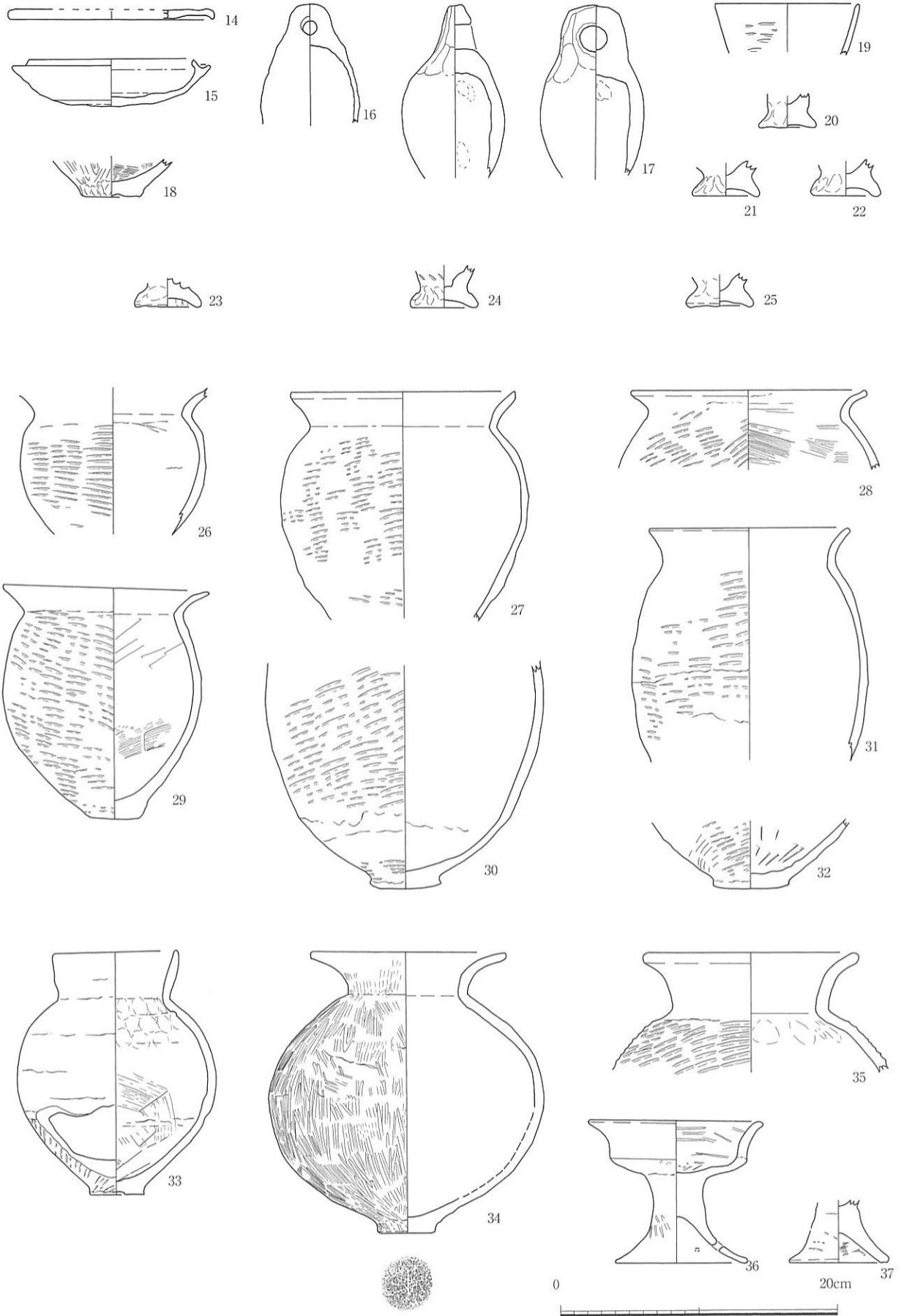


图23 B調査区出土遺物図



図24 C調査区第2面平面図

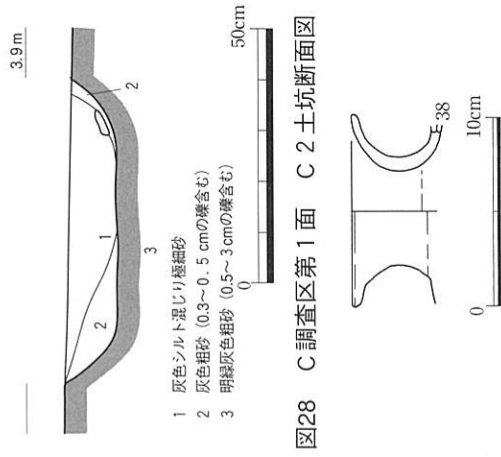


図28 C調査区第1面 C2土坑断面図

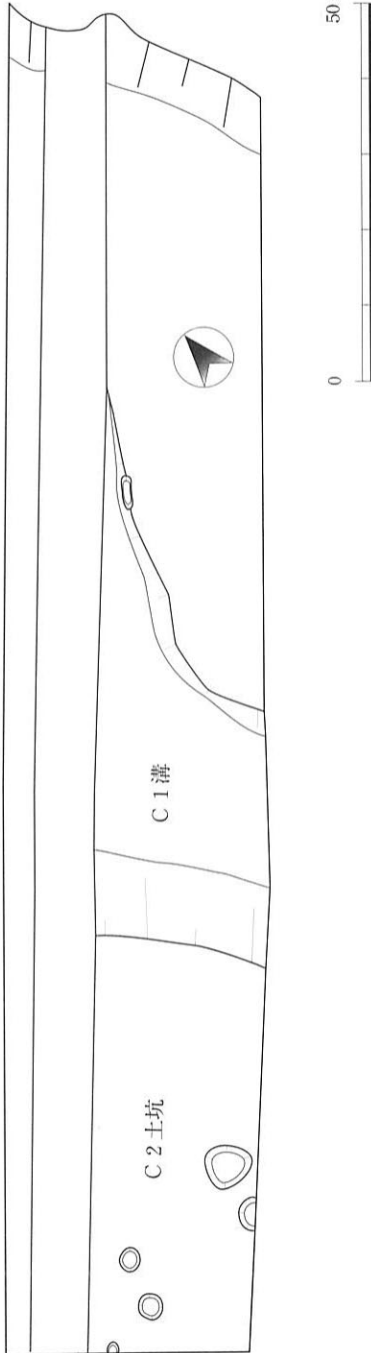


図25 C調査区第1面平面図

図27 C1溝出土遺物図

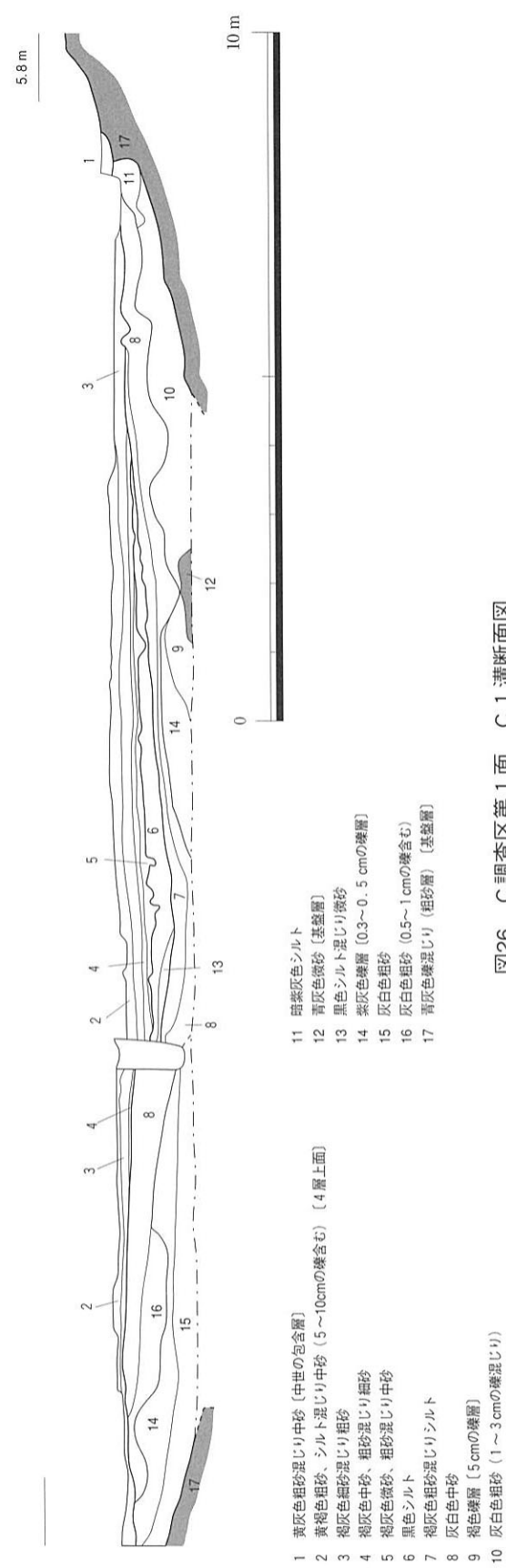


図26 C調査区第1面 C1溝断面図

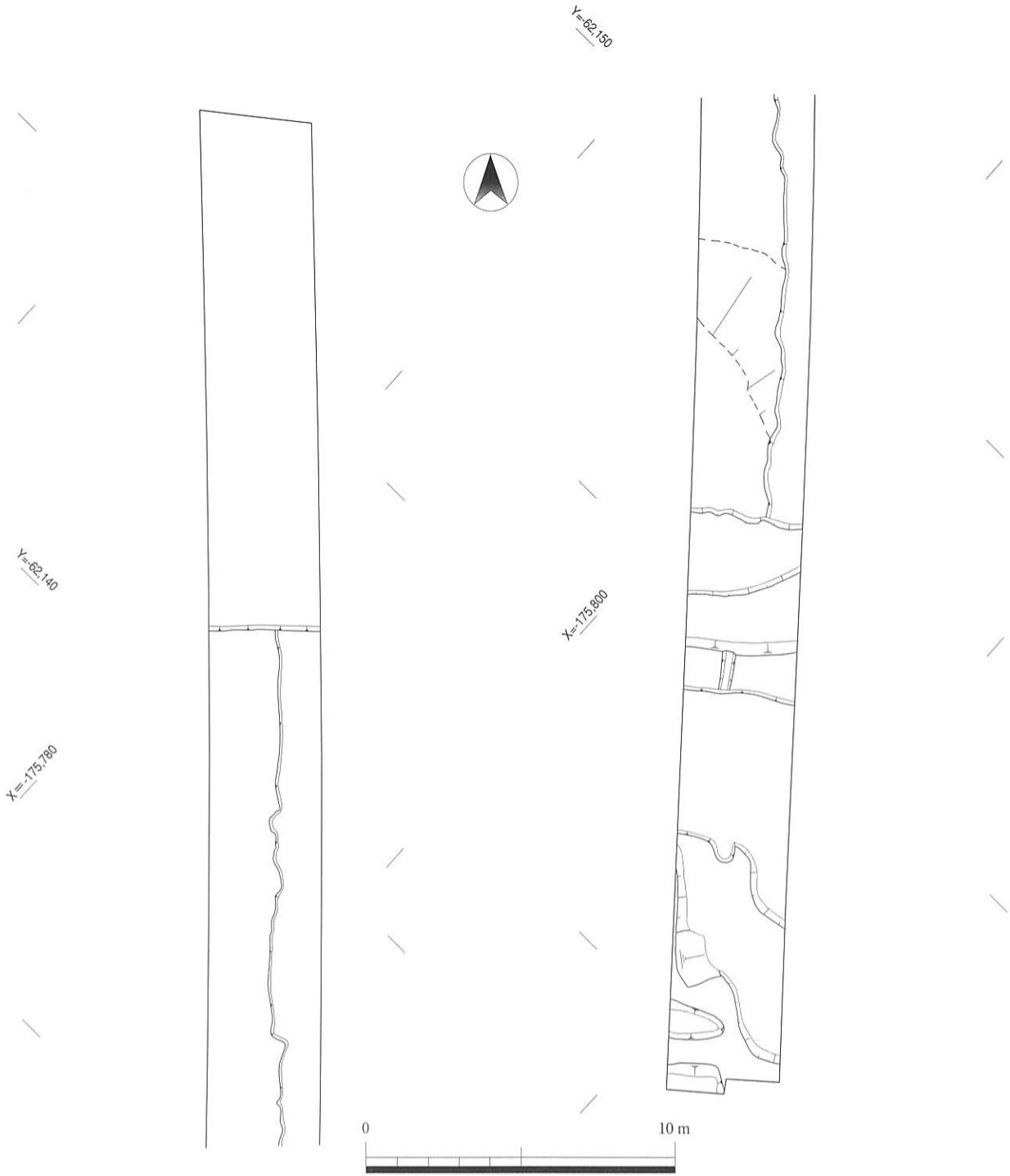


図29 D調査区最終掘削面平面図

検出したことから、最も高い場所のため相当削平を受けていると考えられ、遺構は希薄であった。残りの西側部分については、層厚約0.1 mの中世以降の包含層が堆積する。これらの堆積層を除去して検出した遺構は、土坑3基とピット1基、溝が13条である。

当調査区で検出された溝の多くは、地割りに則って縦横に直交してはしっており、中世以降に一帯が耕地化した際の、耕作に伴う溝や畝立ての痕跡と考えられる。

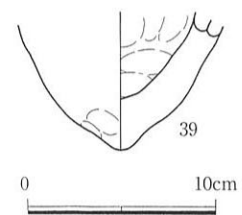


図30 D調査区第1層出土遺物図

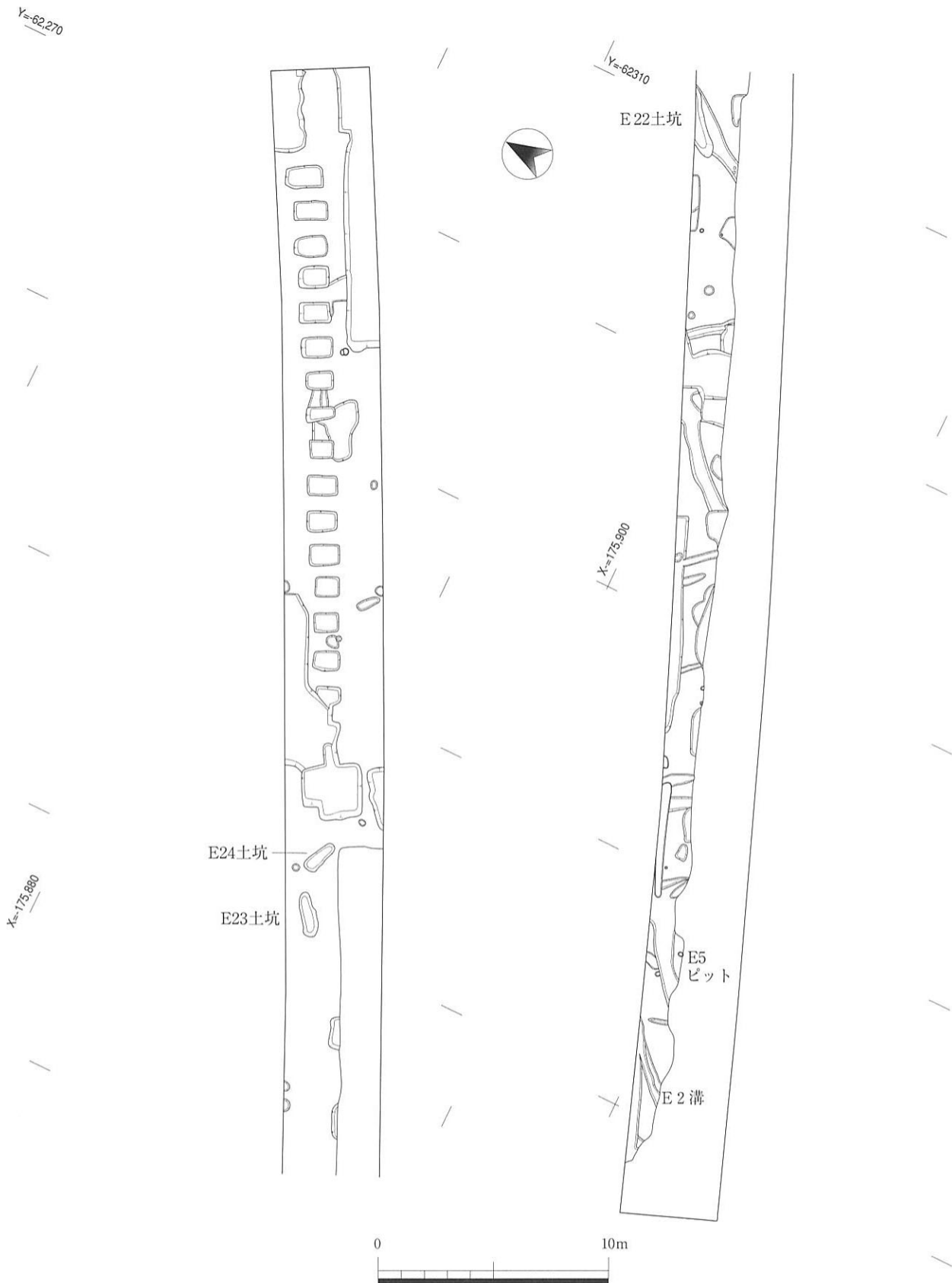


図31 E調査区第1面平面図

第4章 調査成果

E 2 溝は調査区の西端部で検出した。北東-南西方向にはしり、幅 0.5 m、深さ 0.3 m を測る。溝の南肩にはテラスを有す。溝の上層からは瓦器椀、瓦質土器、土師器などが出土したが、図示できたのは瓦器椀のみである。(40~43) なお、この E 2 溝は、前回の調査で検出した溝 E 77 の続きである。

E 5 ピットは、平成 7~9 年度に泉佐野市教育委員会が調査を行った際に検出した、S B 1005 に伴う柱穴のひとつである。径 0.2 m、深さ 0.4 m を測る。

E 22 土坑は、前回の調査で検出した、溝 E 77 の一部である。したがって、この遺構は、規模が長さ 3.4 m、幅 0.8 m、深さ 0.3 m を測る平面楕円形の土坑である。土坑の底部からは、須恵器甕、土師器皿、瓦器椀、瓦器小皿、青磁碗などの破片が廃棄された状態で出土した。44・45 は土師器皿である。46・47 は瓦器で、46 は小皿、47 は椀である。48 は白磁碗の破片である。49 は須恵器甕である。

E 23 土坑は、調査区中央東寄りで検出した。長さ 1.9 m、幅 0.7 m、深さ 0.2 m を測り、東北東-西南西方向に長軸をもつ楕円形の土坑である。埋土内より土師器小皿 (50)、瓦器椀の細片 (51) などが出土した。

E 23 土坑の東には E 24 土坑が位置する。E 23 土坑に直交する形で西北西-東南東方向に長軸を有しており、長さ 1.6 m、長幅 0.6 m、短幅 0.4 m、深さ 0.1 m を測る。埋土は褐灰色粗砂混じりシルトの 1 層のみであった。埋土内から遺物の出土はなかった。前回の調査でも、これらの土坑の北側に位置する場所で、規模、形態が酷似する土坑が 1 基検出されていることや、F トレンチでも同様の規模を測る土坑墓が検出されていることなどから、これらの土坑は土坑墓と考えられる。

包含層中より白磁碗の底部 (52) や、土師器甕 (53) などが出土した。

3 F 調査区

当調査区は、D 調査区から続く段丘面上に立地する。当調査区も、南北両辺が調査済みのため、調査区の幅は 1~4 m と狭小なものであった。標高 9.0~9.5 m を測り、東側 (難波側) から西 (和歌山側)

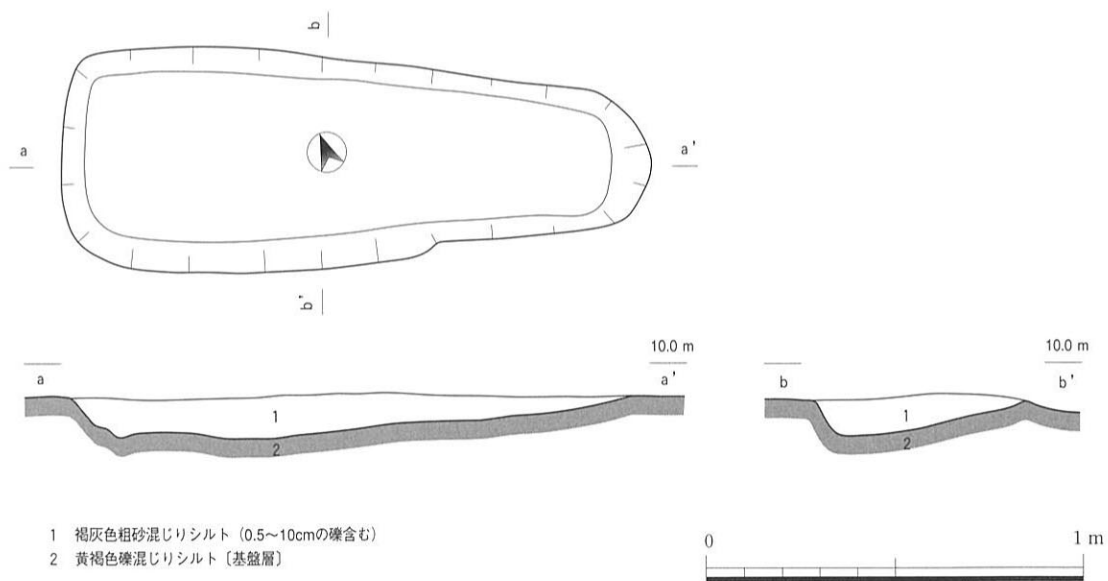


図32 E 調査区第 1 面 E 24 土坑平面図・断面図

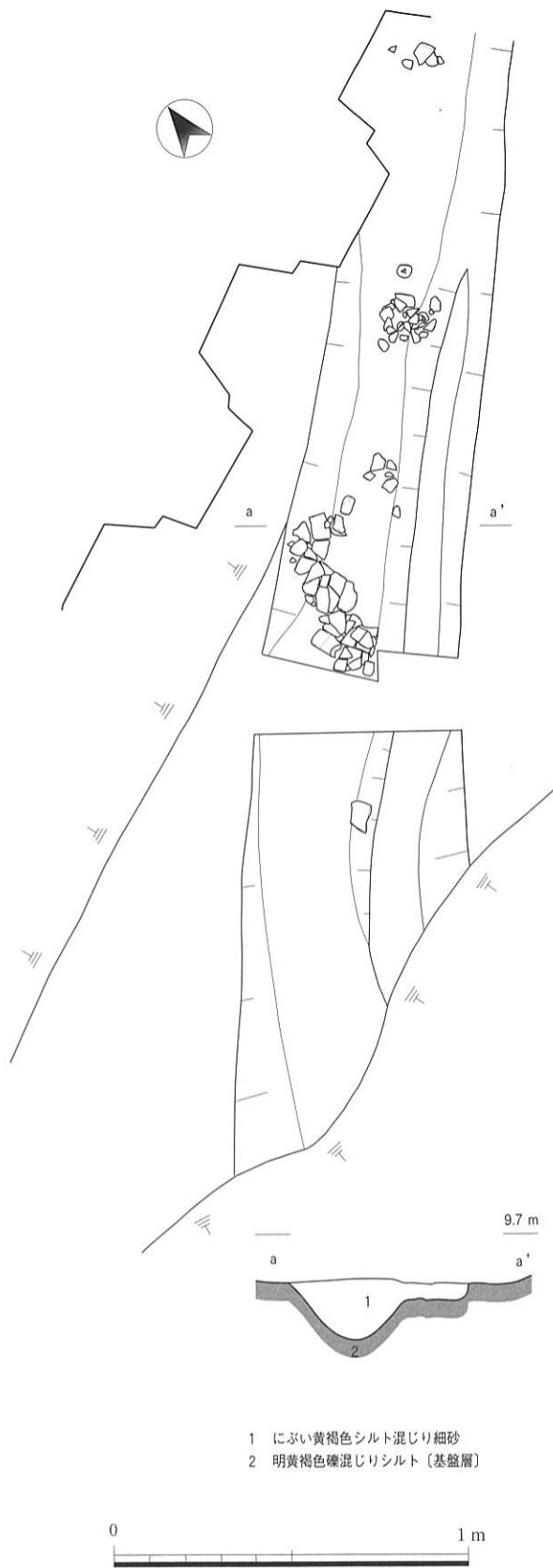


図34 E調査区第1面 E2溝平面図・断面図

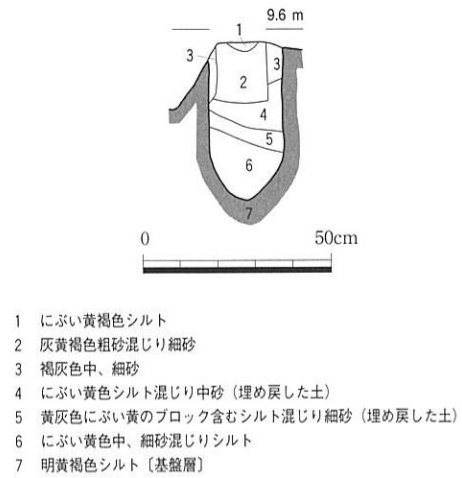


図33 E調査区第1面 E5ピット断面図

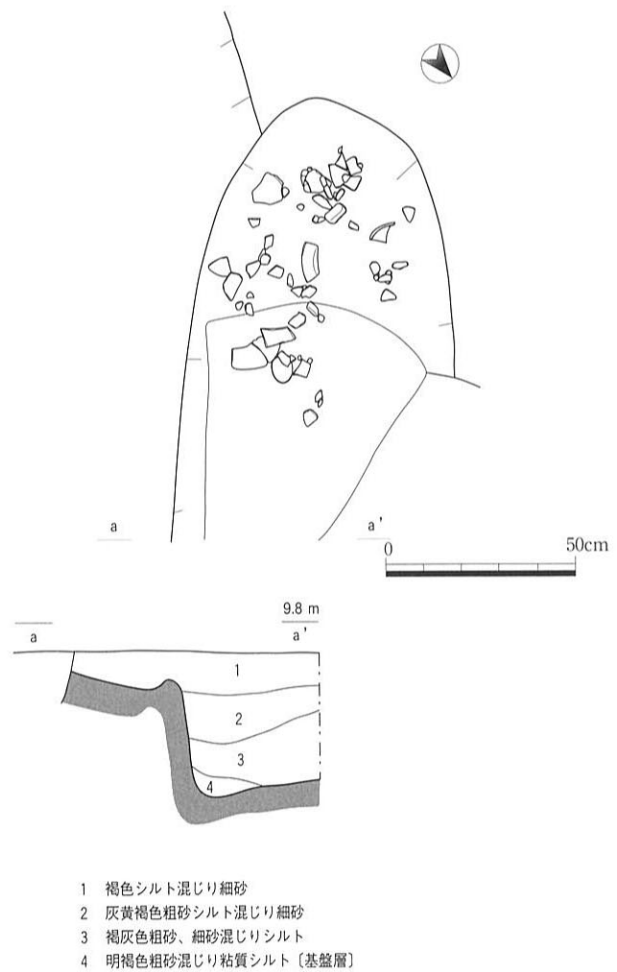


図35 E調査区第1面 E22溝平面図・断面図

に向かって低くなる。これは、上町東遺跡と若宮遺跡の間、つまりG調査区の中央には開析谷がはしっており、そこを円田川が流れていて、段丘面を二分しているためである。つまり、当調査区は段丘の縁辺部にあたっていることから、包含層の堆積も厚く、遺構の残りも良好であった。特に、調査区中央部や西側では深さ0.5 m程の浅い谷状の窪みがみられ、標高も8.5 mを測る。

中世以降の包含層を除去して、基盤層上面で遺構面を検出した。但し、前述の谷状の浅い窪み部分では、基盤層上面より1層上面で検出した。当調査区では、既往の調査より、13世紀の屋敷地であったことが報告されており、今回もその資料を裏付ける遺構が検出された。検出した遺構は、溝、土坑、土壙墓、ピットなどである。調査区の東端部で検出したF 19溝、F 26溝、F 27溝は、既往の調査から、耕作に伴う溝と考えられる。

F 19溝は調査区の東端部に位置し、幅0.4 m、深さ0.1 mを測る。溝埋土から土師器小皿(62)や瓦器椀(63)が出土した。

F 6溝は幅0.7 m、深さ0.1 mの規模をもち、北西-南東方向にはしる。溝内から瓦器椀(54~56)や瓦器小皿(57)などが出土した。

F 8溝は上段幅2.5 m、下段幅1.2 m、深さ0.3 mを測り、北東-南西方向にはしる。主な出土遺物は瓦器椀(58~60)である。このF 6溝とF 8溝は、既往の調査成果を検討した結果、調査区外で屈曲する同一遺構であることがわかった。屋敷地を区画するための溝と考えられる。

F 30ピットは、既往の調査で検出された建物1を、F 22ピットは既往の調査で検出された建物2を構成する柱穴の一つであると考えられる。よって、建物1は1×3間の規模になる。

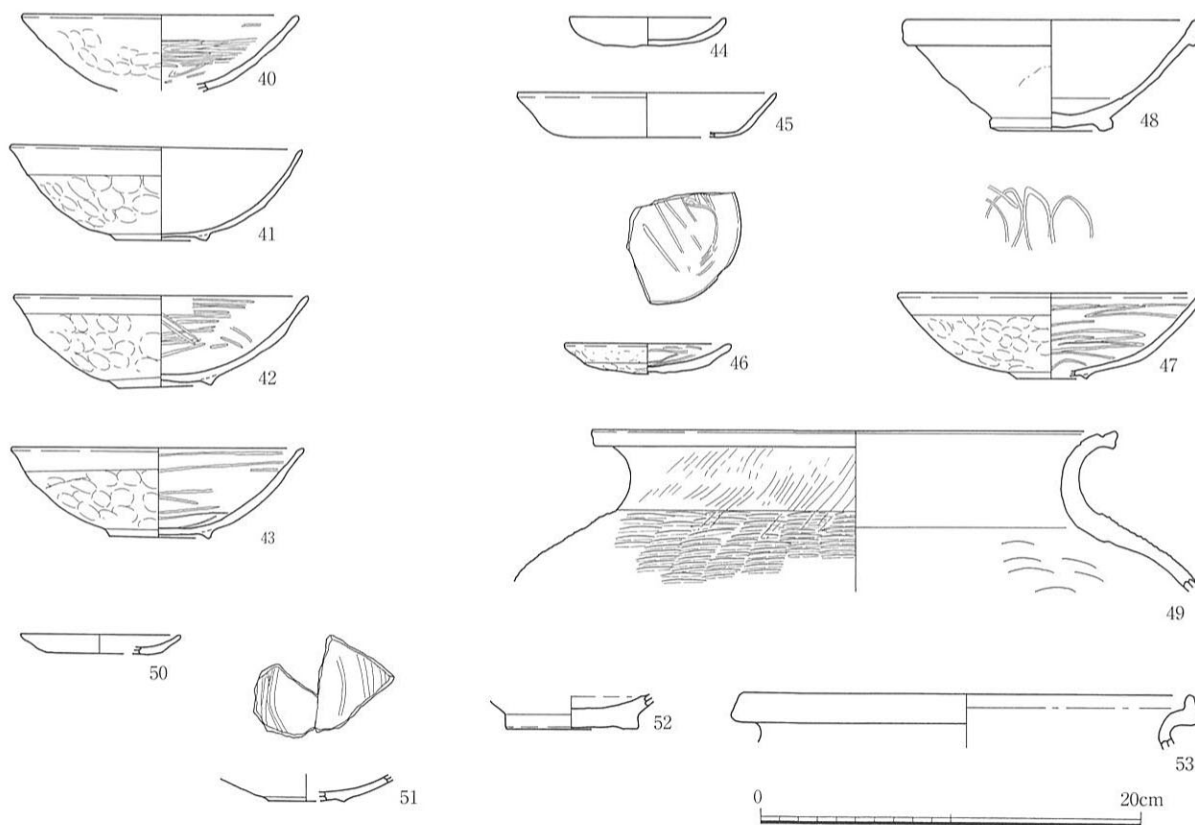


図36 E調査区出土遺物図

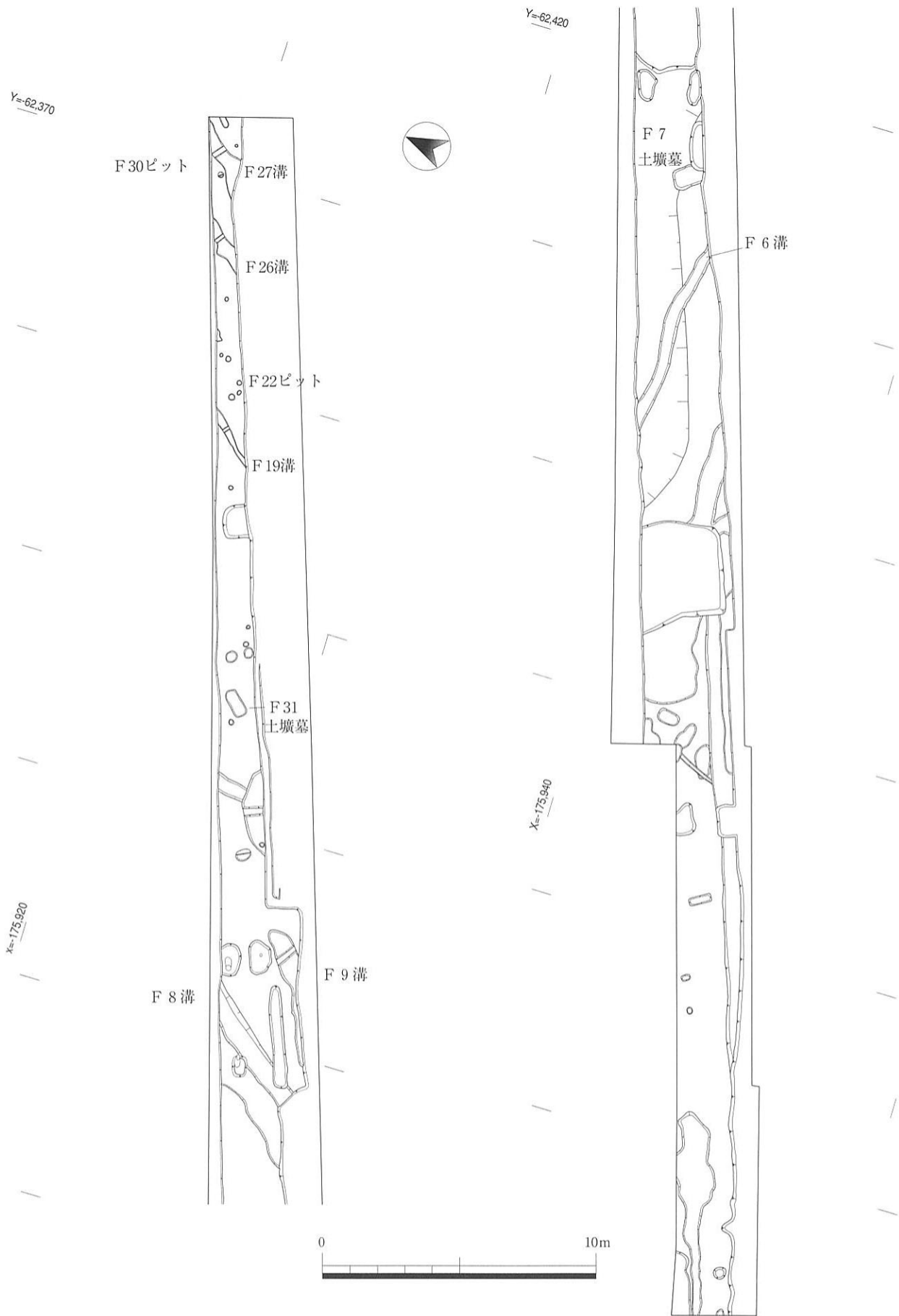


図37 F調査区最終遺構面平面図

第4章 調査成果

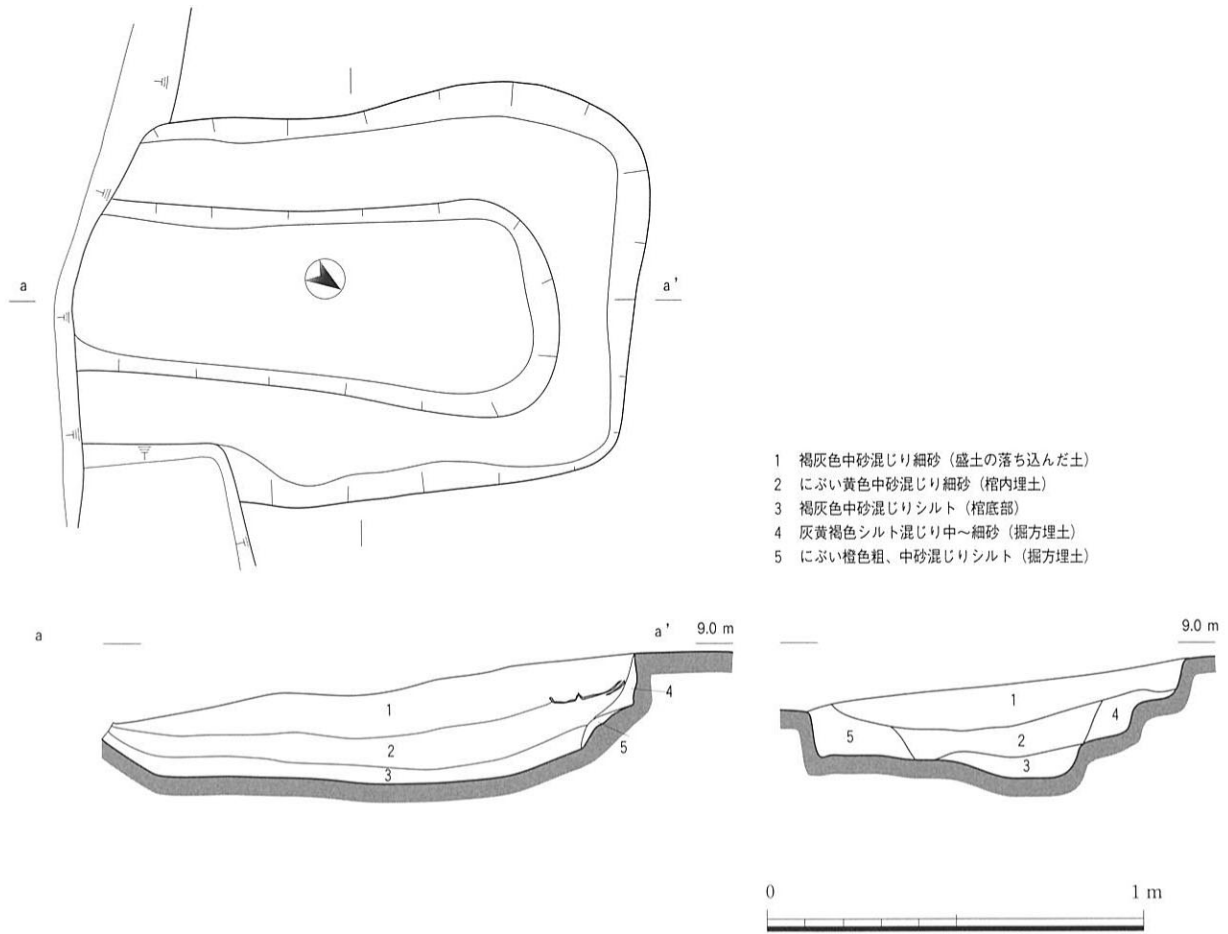


図38 F調査区 F7土墳墓平面図・断面図

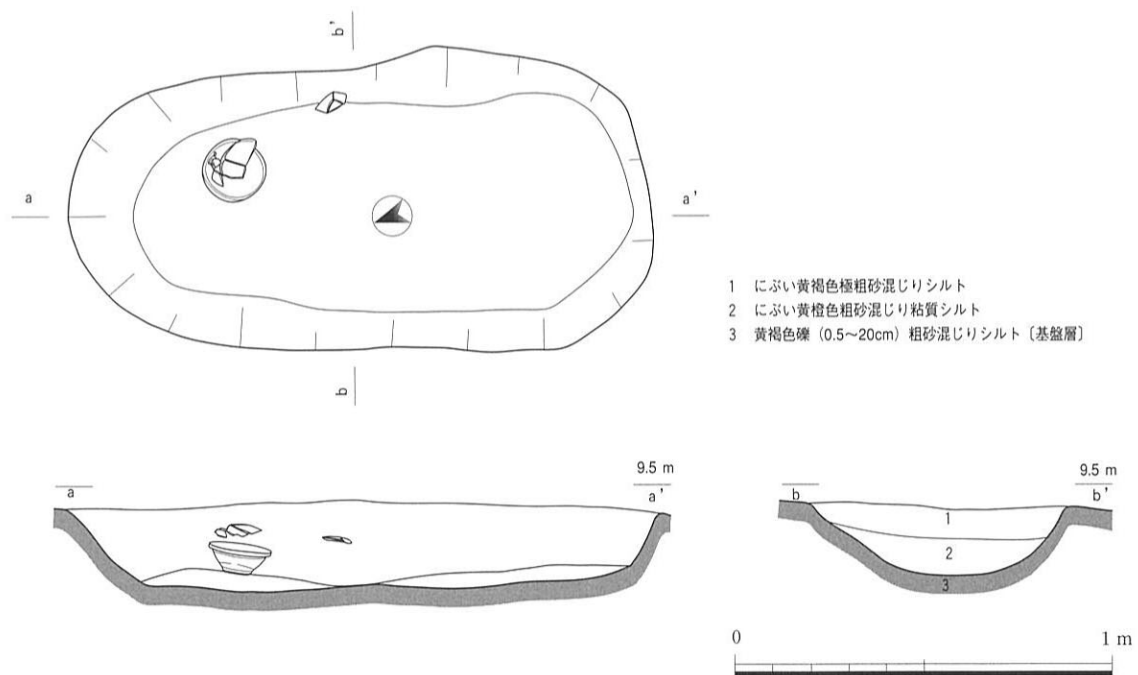


図39 F調査区最終遺構面 F31土墳墓平面図・断面図・立面図

58 はほぼ完形で、見込み部に並行状暗文を施す。

F 9 溝はF 8 溝の東 2.7 m に位置し、幅 1.1 m、深さ 0.1 m を測る。溝埋土内より瓦器 (61) が出土した。

F 7 土壙墓は、F 6 溝と F 8 溝に囲まれた区画の南東隅で検出された。残存する墓壙の規模は、長さ 1.5 m 以上、幅 1.0 ~ 1.1 m、深さ 0.3 m を測る。また、墓壙の中央部は棺を据え付けるために、残存長 1.25 m 以上、幅 0.45 ~ 0.55 m、深さ 0.1 m の規模で一段深く掘り下げられており、北を頭位とすることがわかる。遺物は、棺内頭位付近より土師器小皿 4 点 (64 ~ 67) と完形の白磁碗が 1 点 (68) 出土した。68 は玉縁状の口縁部をもち、体部外面はヘラケズリ調整する。また、高台部は削り出す。これらの遺物から、この土壙墓は 13 世紀である。

F 31 土壙墓は F 7 土壙墓の東約 32 m で、F 6 溝と F 8 溝に囲まれた区画の外側で検出した。長辺 1.5 m、短辺 0.6 ~ 0.7 m、深さ 0.2 m を測る隅丸方形を呈する。北東 - 南西方向に長軸をもつ。遺物は土壙の北東部から瓦器碗 2 点 (69・70) と完形の白磁碗 1 点 (71) が出土した。71 は玉縁状の口縁部をもち、体部外面にハケ目調整を施し、高台部は削り出す。これらの遺物から、この土壙墓は 13 世紀である。

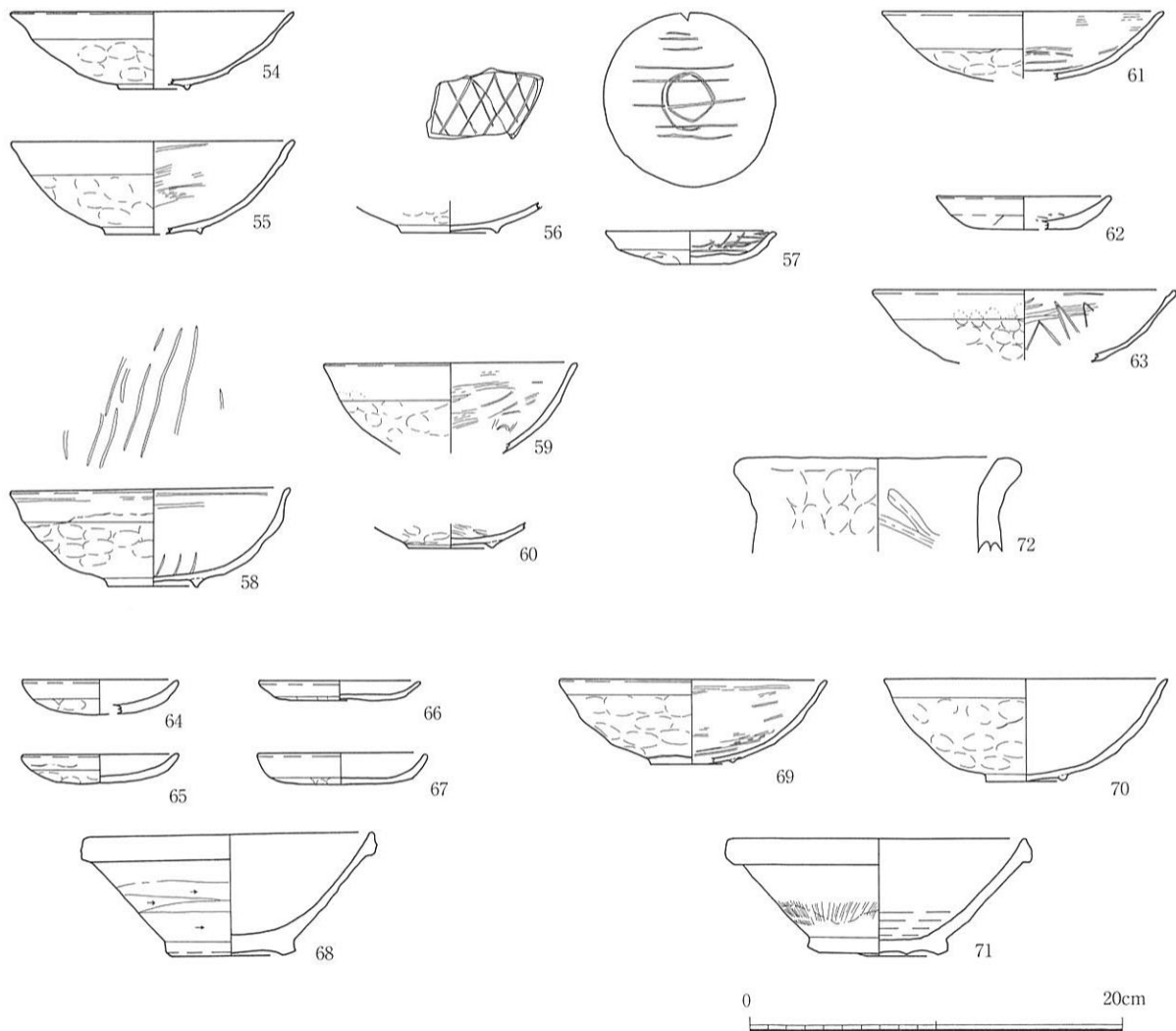


図40 F 調査区出土遺物図

第4章 調査成果

E 23 土坑・E24 土坑、F 7 土壙墓、F 31 土壙墓などは、分布密度や周辺の調査成果などから、掘立柱建物を中心とした屋敷地に伴う屋敷墓としての性格をもつものであると考えられる。72 は包含層から出土した土師質のマダコ壺である。

4 G 調査区

当調査区はトレンチを難波側から和歌山側に向かってG 1～6 調査区の6箇所に分けて設定した。G 1～4 調査区は円田川の右岸に、G 5・6 調査区は円田川の左岸に位置する。

G 1～4 調査区については円田川の氾濫原となっており、線路盛土を除去した後、標高8.2～8.5 mまで掘り下げて面を検出したが、自然地形の落ち込みが数ヶ所認められるのみであった。さらに、下層を確認するため一部ではあったが標高7.7 mまで掘り下げたが、大人の拳大の礫層を確認した。また、遺物の出土はなかった。

G 5・6 調査区は円田川の左岸で若宮遺跡に続く段丘上面にあたる。線路盛土および旧耕作土層を除去して基盤層を検出した。標高は9.2～9.3 mを測る。

G 5 調査区は後世の攪乱が著しく、遺構面の残りは悪かった。検出した遺構は中世以降の井戸2基と不定形土坑4基である。

G 6 調査区も後世の攪乱が著しく、遺構面の残りは悪かった。検出した遺構は井戸1基、不定形土坑1基、溝状の落ち込み1基である。出土遺物からいずれも中世以降のものである。

第4節 若宮遺跡

1 H 調査区

当調査区では、H 1～H 5の計5つのトレンチを設けて調査を行った。南海線の難波側に位置するトレンチがH 1、順に和歌山側に向かってH 2、H 3、H 4、H 5となる。発掘調査の過程では、トレンチ毎に遺構番号を付けて調査を行ったが、本書では、H 調査区全体を通して遺構番号を付け直した。

H 調査区全体の地形は、大きく見るとH 1～H 3が標高9.0～9.45 mで、H 4・5へ向かって緩やかに下り9.0～8.6mを測る。また、全体に東から西へ向かって、緩やかに下がってゆく。特にH 4・5では、耕地化に伴う削平が顕著であるが、東側と西側では、0.6 m前後の比高差がある。

遺構面は、近・現代の盛土及び旧耕作土を重機により除去した後、近世～中世の耕作土を人力で除去して検出した。この結果、遺構検出面は基盤層である礫層上面もしくは、礫層の凹みに堆積したシルト層の上面である。また、攪乱や近現代の造成が基盤層まで達している部分も多く、遺構面の遺存状態は悪い。

この面で検出した遺構には、畦畔や溝、浅い凹み、土坑、小穴などがある。畦畔は、主にH 4・5で検出しておりH 1～H 3では見られなかった。また、溝や土坑、小穴は主にH 1～H 3で検出されていることから、H 1～H 3とH 4・5では異なった土地利用がなされていたことが推測される。

以下、検出した遺構について記述する。

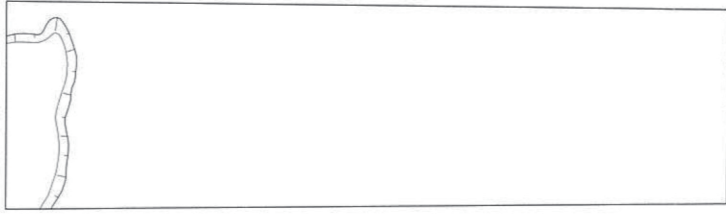
H 1 溝は、H 1～H 2にかけて検出したL字状の溝である。溝は南西から北東へ約24 m伸び、そこから南東へほぼ直角に折れ曲がり、調査区外へと延びる。溝の深さは約0.35～0.5 mで、折れ曲がる部分はやや深く0.6 m前後を測る。幅は概ね3.0～3.5 mである。溝の埋土は2層に分層でき、上層は10

X=175970

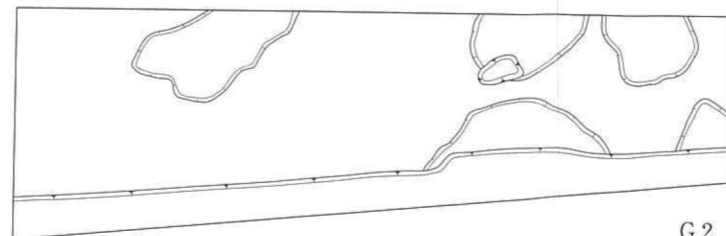
Y=62,550

X=175,980

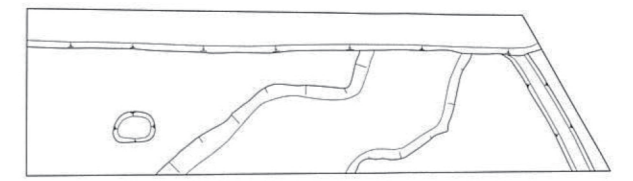
Y=62,620



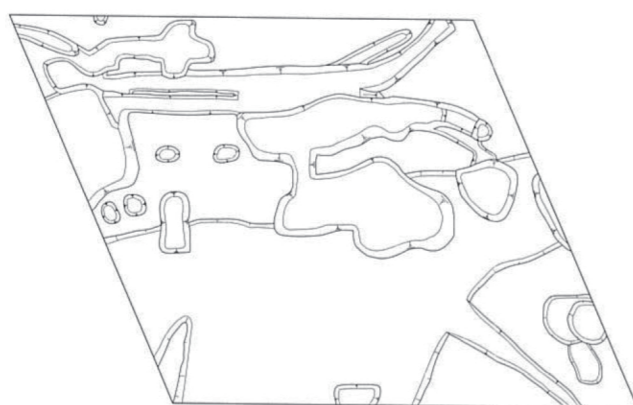
G1



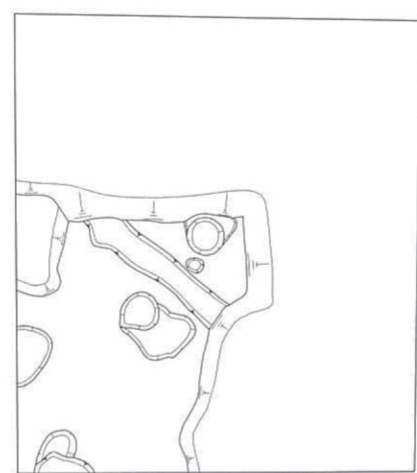
G2



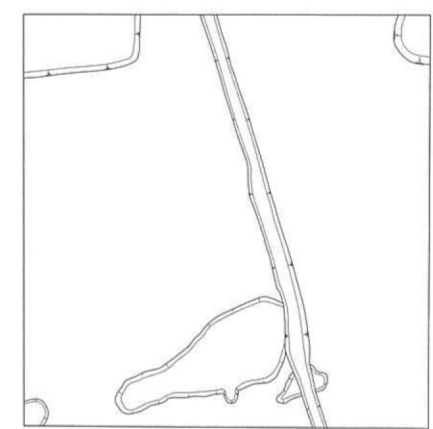
G3



G4



G5



G6

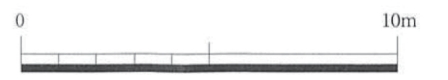
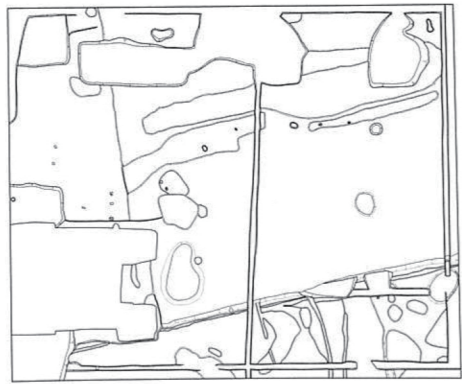


図41 G調査区最終遺構図平面図



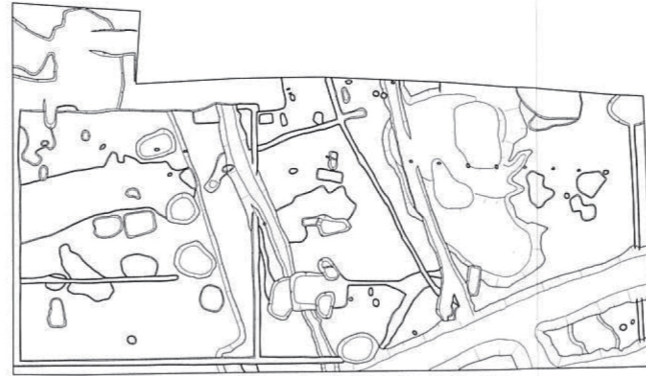
Y=62,789 X=176,030



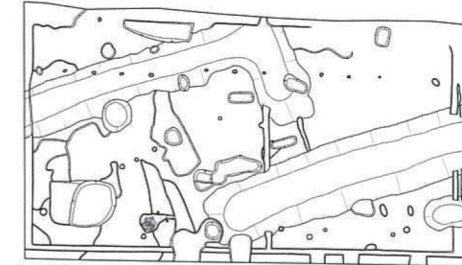
H 5



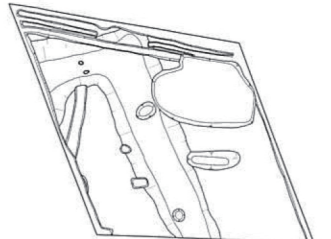
H 4



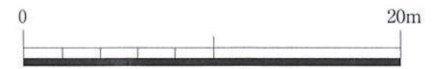
H 3



H 2



H 1

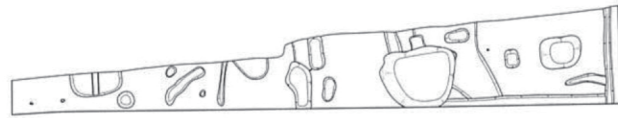


X=176,070

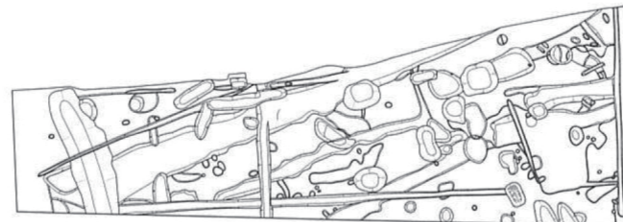
Y=62,940



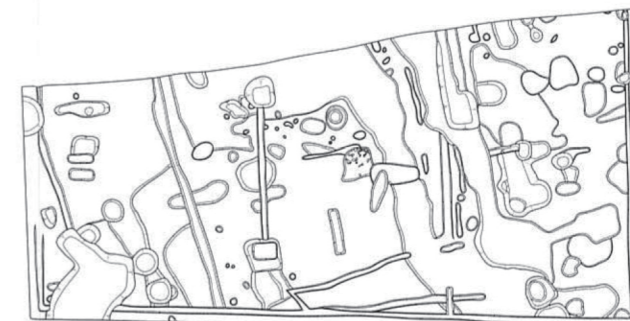
I 5



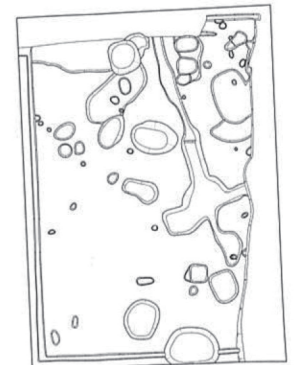
I 4



I 3



I 2



I 1



図42 H・I調査区最終面平面図

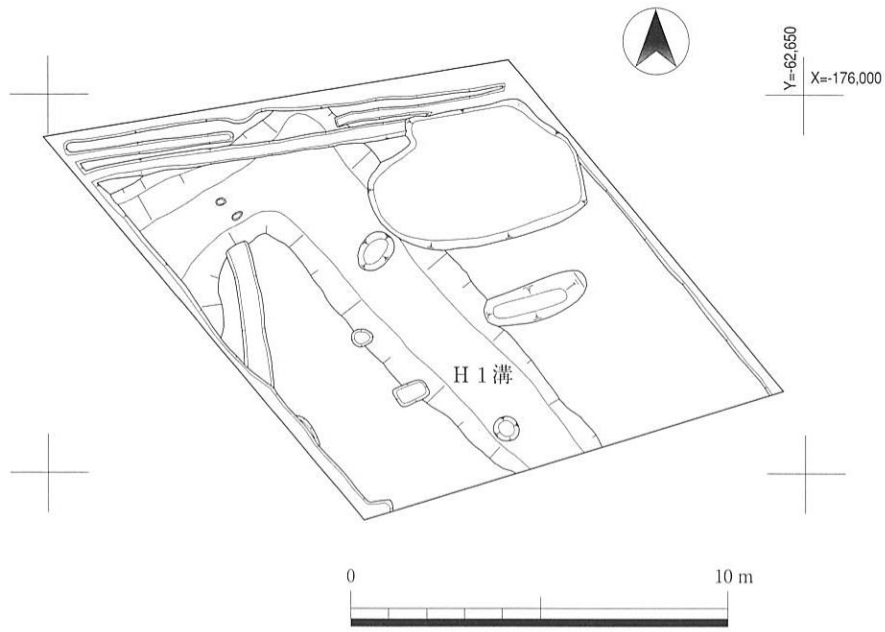


図43 H1調査区最終遺構面平面図

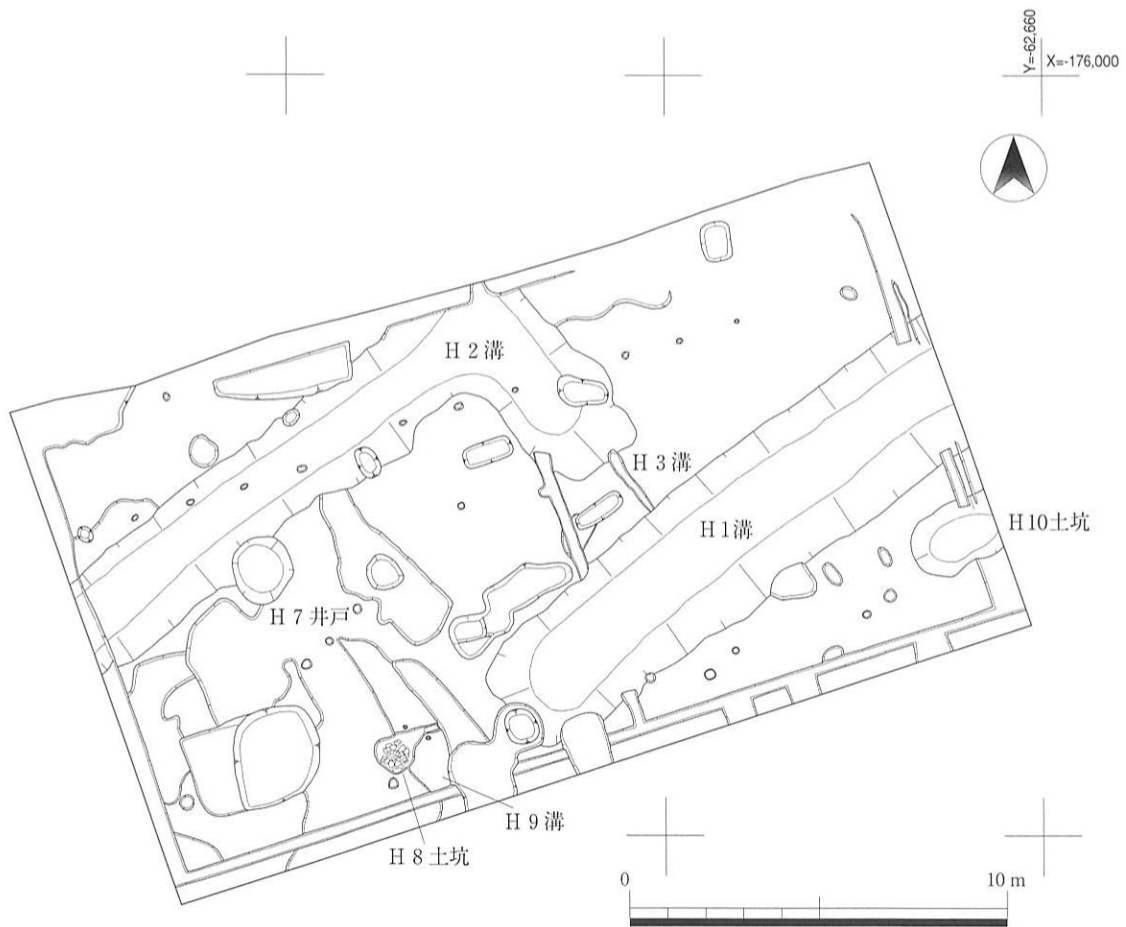


図44 H2調査区最終遺構面平面図

第4章 調査成果

Y 4/1 灰シルト中砂混じりで、礫が若干入る。また、瓦が多く入っており、土器も若干入る。下層は10 Y 4/1 灰シルトで中砂が若干入る。溝の機能時の堆積層と考えられる。埋土の上層からは、多量の瓦が出土している他、羽釜片などが若干出土している。羽釜などの土器類は、主に南東へほぼ直角に折れ曲がった部分から出土している。また、南西から北東へ延びる部分では、多量の瓦と共に、焼土が集中している。H 1 溝からは前述したように多量の瓦類と少量ではあるが土器が出土している。図化したものに81～84の三巴文軒丸瓦、85～88の唐草文軒平瓦、水波紋軒平瓦がある。丸瓦では89～91の

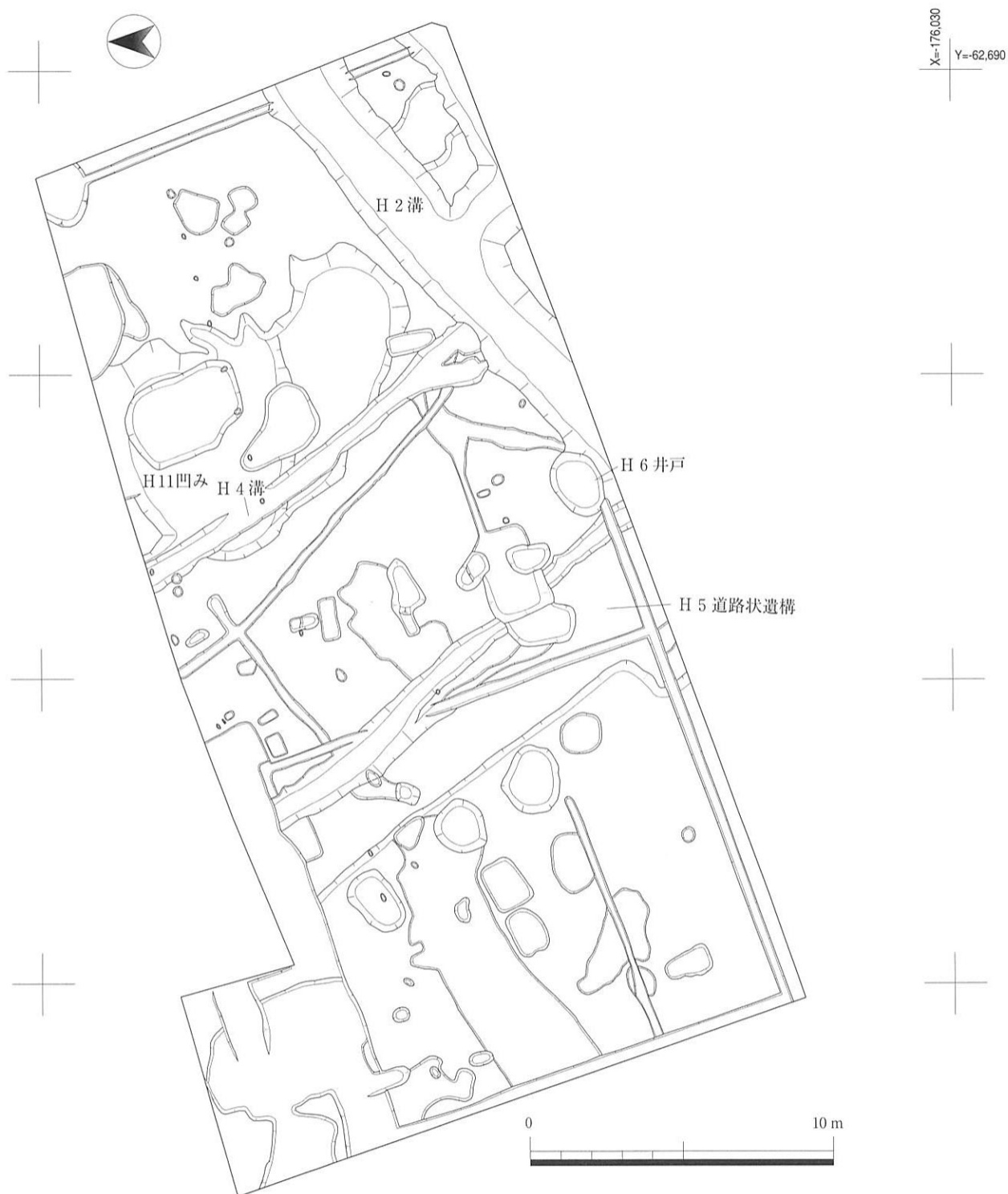


図45 H3調査区最終遺構面平面図



図46 H4調査区最終遺構面平面図

第4章 調査成果

玉縁式丸瓦。平瓦では、92～94の凸面に粗い斜格子が施されている瓦や、103・104の縄目が施されている瓦がある。凸面に粗い斜格子が施されている平瓦の凹面には、布目などが見られるものが多いが、92は凸面と同じような粗い斜格子が、転写されたような形で見られた。95～101は凸面に『檀波羅蜜寺』のスタンプが押された文字瓦である。いずれも破片であるが、96・98に見られるように2列のものもある。また96は、凹面に反転されたような形で、文字が見られる。106～109は鴈振瓦である。105・110は鬼瓦、112は鬼板である。

土器では、73土師器小皿、74・75備前すり鉢、76・77瓦質羽釜、78・79瓦質甕がある。これらの土器は概ね14世紀後半～15世紀前半のものであることから、この頃に多量の瓦や焼土とともにH1溝は埋められたと考えられる。

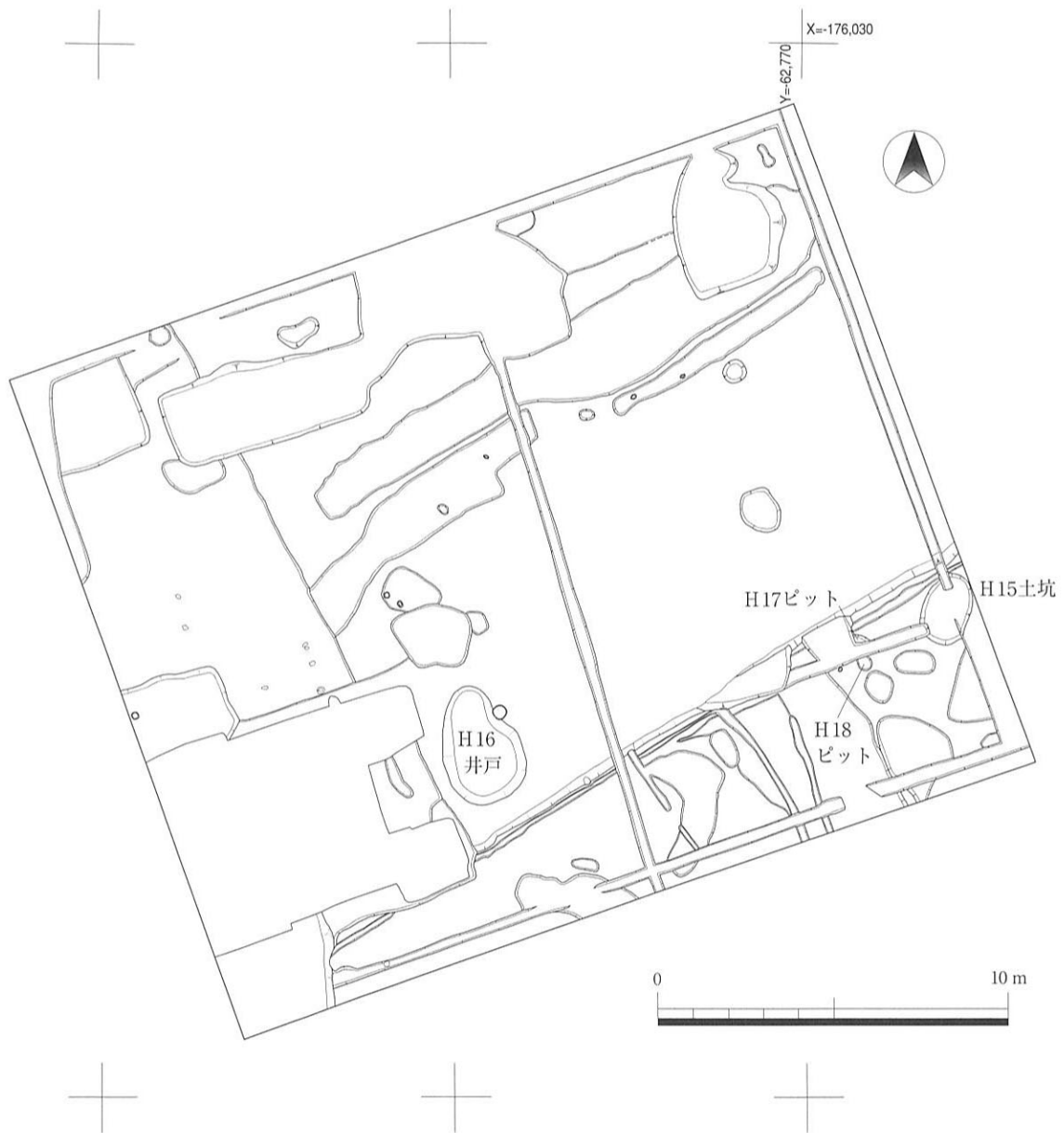


図47 H5調査区最終遺構面平面図

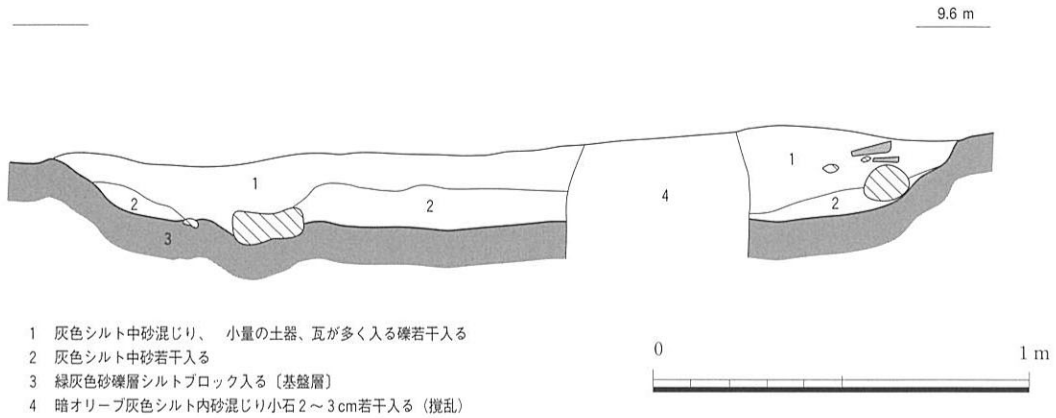


図48 H1調査区最終遺構面 H1溝断面図

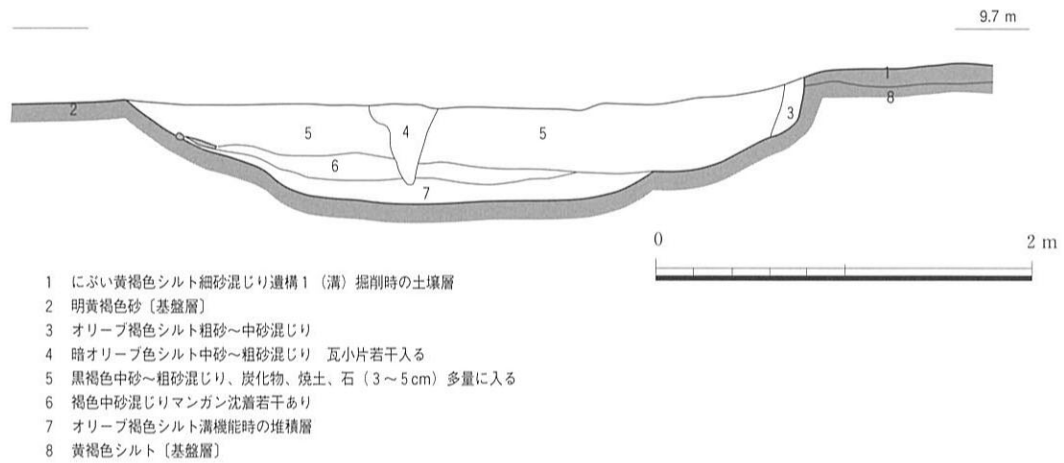


図49 H2調査区最終遺構面 H1溝断面図

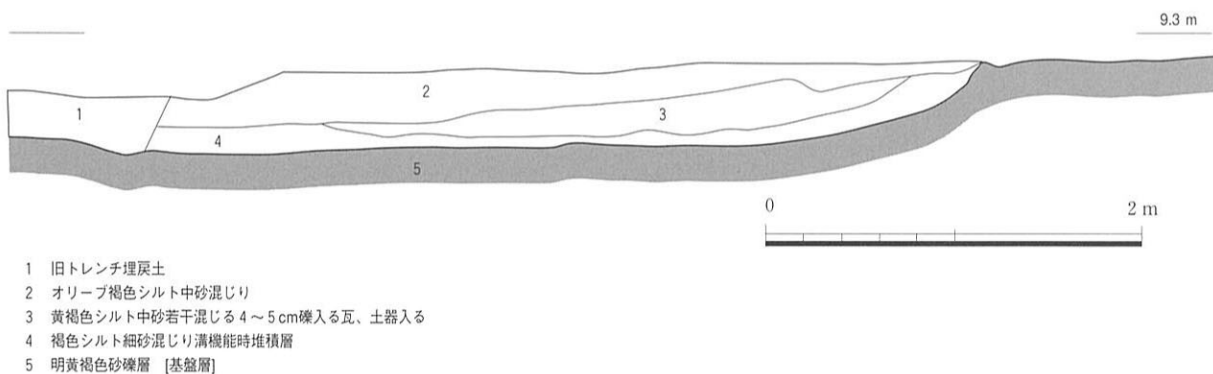


図50 H2調査区最終遺構面 H2溝断面図

第4章 調査成果

H2溝は、H1溝と同様のL字状の溝で、H2～H3にかけて検出した遺構である。溝は南西から北東へ約35m延び、そこから南東へほぼ直角に折れ曲がり、3.5m延びて収束する。溝の深さは、南西から北東へ延びる部分の南西側では0.3m前後、北東部分では0.5m前後と、北東側の溝底が南西側よりも低くなっている。また、南東へ折れ曲がった部分では約0.45mである。溝幅は2.5m前後である。溝の埋土は大きく3層に分層できる。上層は10YR 3/1黒褐シルト中砂～粗砂混じり。炭化物、焼土、

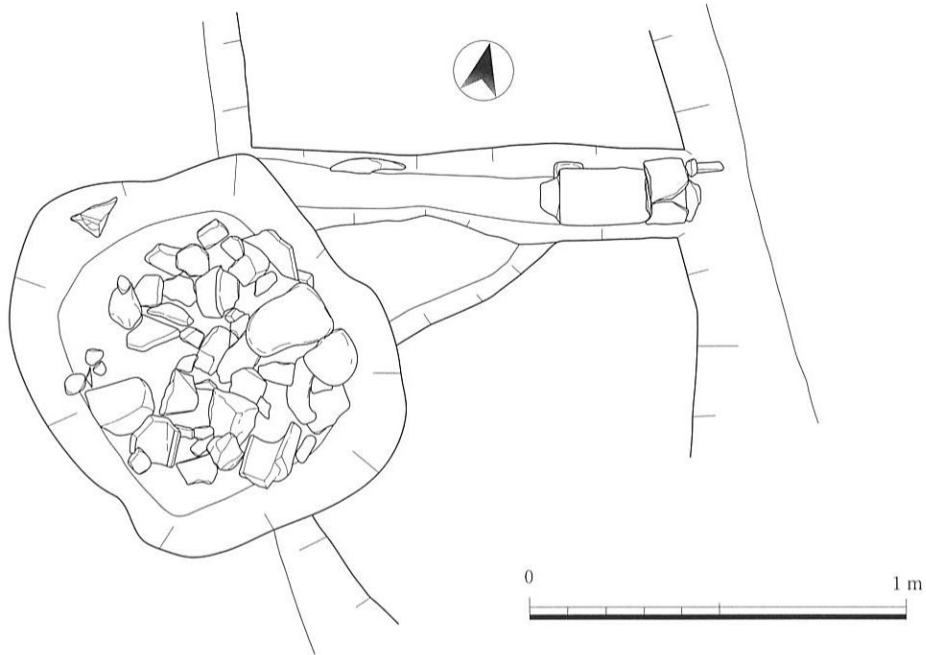


図51 H2調査区最終遺構面 H8土坑・H9溝平面図

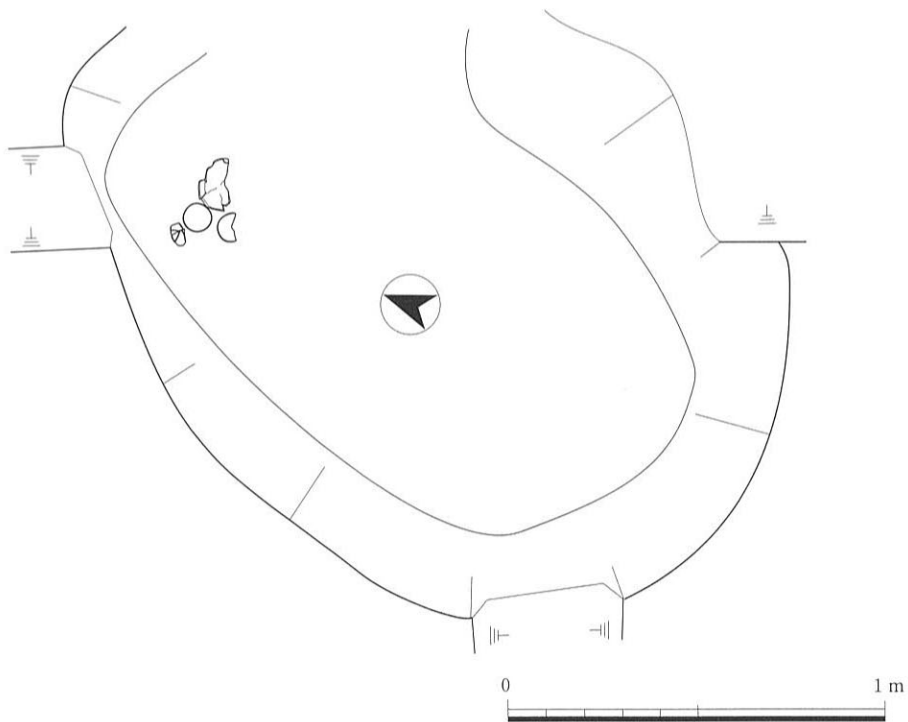


図52 H5調査区最終遺構面 H15土坑平面図

河原石（直径3～5cm）が多量に入る。中層は10 Y R 4/6 褐シルト中砂混じり。マンガンの沈着が若干見られる。下層は2.5 Y 4/4 オリーブ褐シルト。溝の機能時の堆積層と考えられる。

埋土内からは、多量の瓦が出土している他、羽釜・瓦器・土師器・青磁など土器も若干出土している。図化している遺物に、127・128 三巴文軒丸瓦、130 唐草文軒平瓦がある。129 は鳥衾である。131・132 は玉縁式丸瓦で、凸面は板ナデを施している。133・134 は平瓦で、凸面に格子目叩きが見られる。135 は、『檀波羅蜜寺』のスタンプの内『羅』『蜜』と『寺』の一部が見られる。他の文字瓦と同様に凸面には離れ砂が見られる。土器では、113～115 土師小皿、117 竜泉窯系青磁碗、118～121 瓦質羽釜、122 瓦質甕、123 湊焼、125 瓦質火舎がある。この他、124 は瓦を2次加工して丸くしたもの、126 は石臼の上臼である。これらの土器は、概ね14世紀後半～15世紀前半のものであり、この頃に多量の瓦とともにH2溝は、埋められたと考えられる。なお、116・120 は時期が新しく混入品と考えられる。

H1溝・H2溝は、出土した遺物からほぼ同時期に埋められたものであり、規模や平面形が類似し、溝の方向も揃っている点から、同時期に機能していた溝と考えられる。

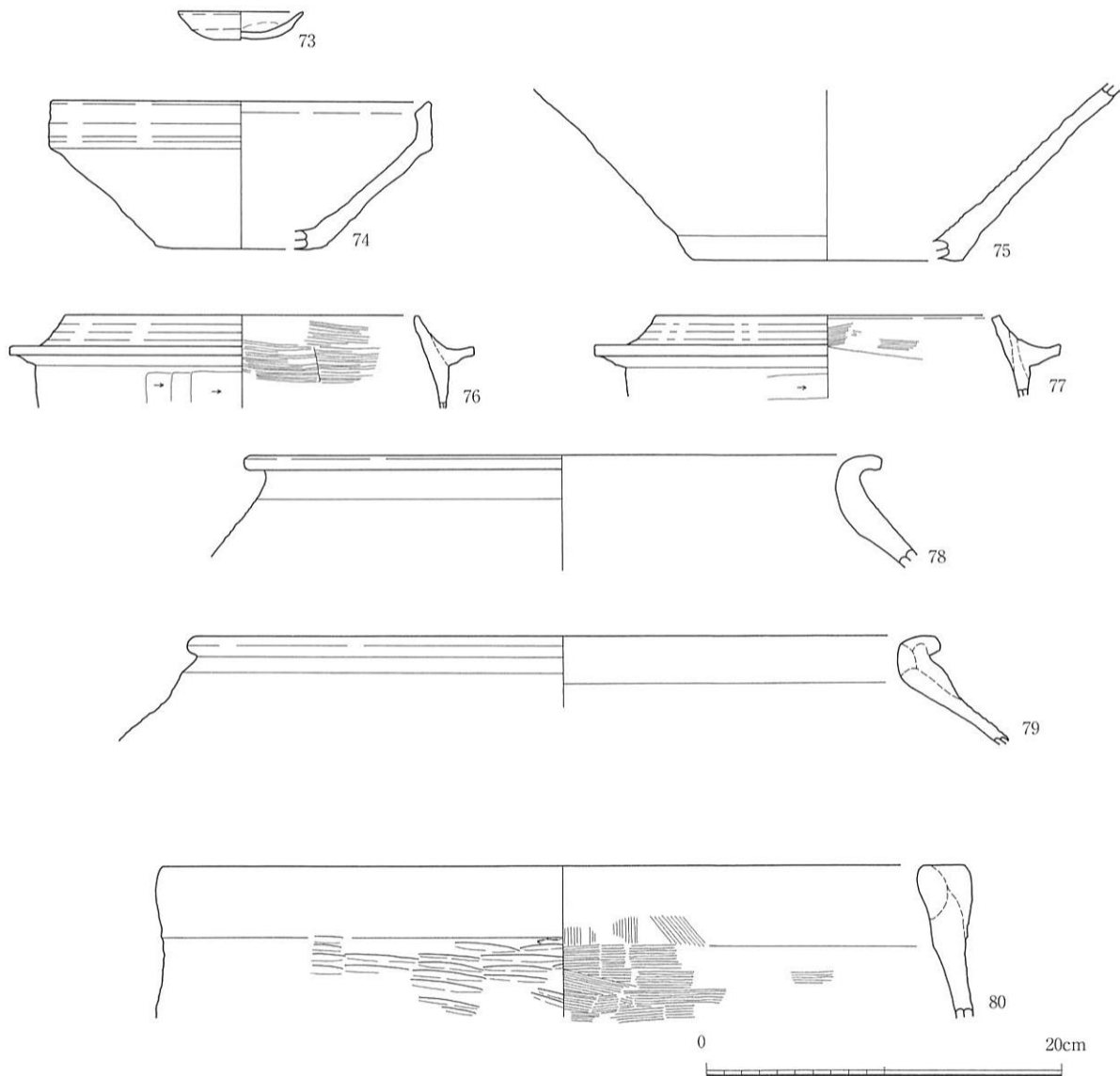


図53 H調査区出土遺物図（1）

H 3 溝は、H 1 溝・H 2 溝と先後関係にあり H 2 溝→H 3 溝→H 1 溝の順となる。幅は 0.3 m 前後、深さは約 0.1 m である。

H 4 溝は、北西から南東に延びる溝で、H 2 溝に取り付いている。検出延長は約 13.5 m、幅約 0.7 m、深さ 0.3 m 前後を測る。ほぼ H 2 溝に直交して掘削されている。溝内から出土した遺物で図化したものに 140 の斜格子叩きの施された平瓦片がある。

H 5 道路状遺構は、北西から南東に延びる遺構で、幅 2 m 前後、高さは遺構検出面から 0.15 m 前後である。

H 5 道路状遺構は、基盤層を削りだして造られており、盛土ではない。本来はこの上に土壌層が存在していたと考えられる。主軸は 1～4 溝と揃っており、これらの溝と有機的な関係にあると考えられる。

H 6 井戸は、平面形が長径 2.3 m、短径 1.1 m の楕円形呈する、素掘りの井戸である。

H 7 井戸は、平面形が直径約 1.6 m のほぼ円形を呈する素掘りの井戸である。深さは 0.8 m をこえる。

H 8 土坑は、平面形が隅丸の方形を呈する土坑で、南西から北東方向へ延びる H 9 溝が取り付いている。土坑と溝は先後関係が見られないことから、同時期の遺構である。

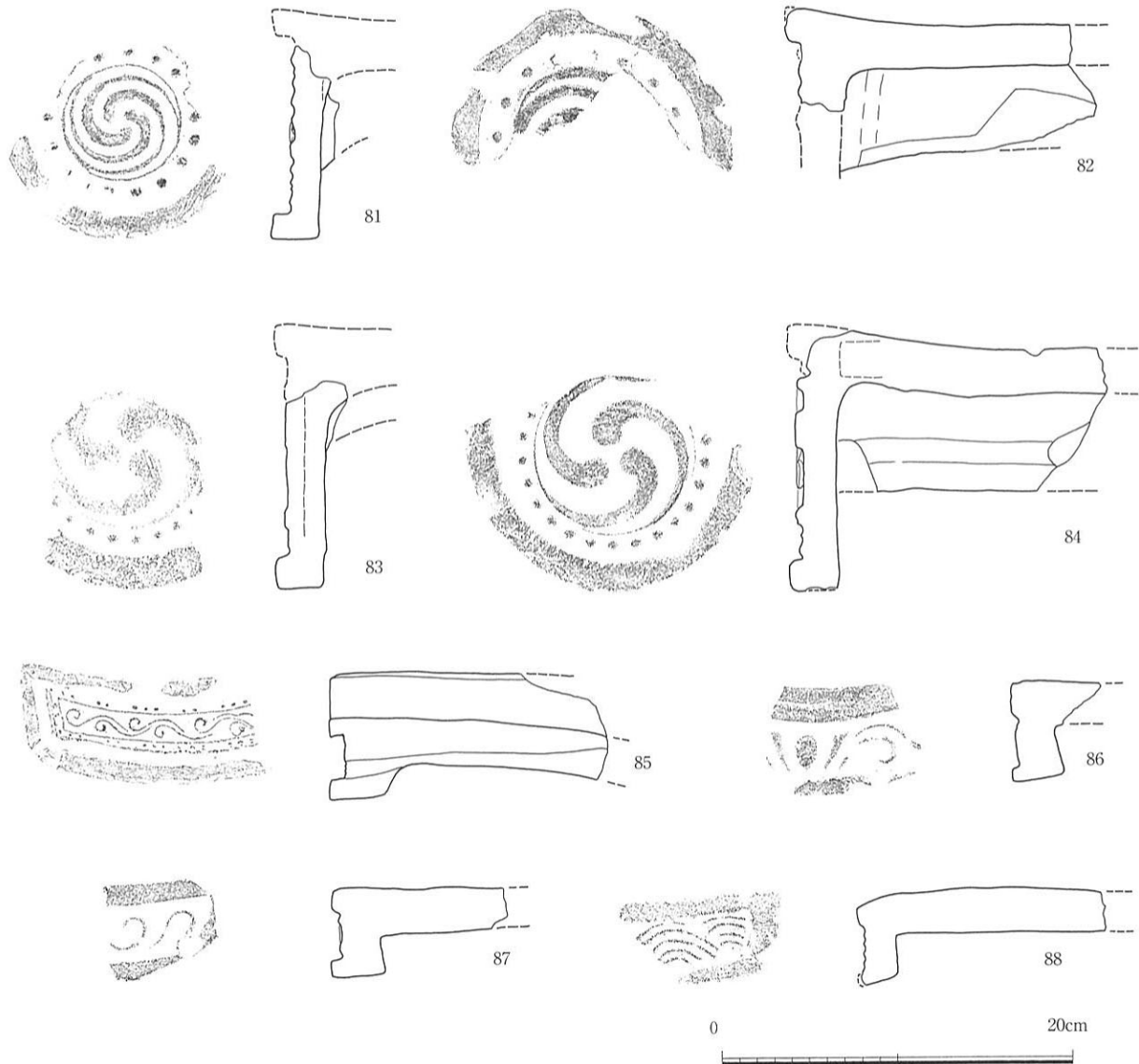


図54 H調査区出土遺物図(2)

H 8 土坑は長径 1 m、短径約 0.88 m、深さは約 0.1 m で、子供の頭大位の石や瓦片が集中して出土している他、竜泉窯系青磁碗片も出土している。

H 9 溝は、幅約 0.25 m、深さ約 0.07 m で、検出長は約 1.1 m である。溝内には丸瓦（136）が伏せられた状態で 1 点出土していることから、樋の可能性が考えられる。H 8 土坑内からは、前述した竜泉窯系青磁碗片の他、土師器片、瓦が出土しており、図化したものに 137 軒平瓦、138 玉縁式丸瓦がある。

H 10 土坑は、H 1 溝の南側で検出した平面形が楕円形を呈する土坑で、さらに調査区北東外へと広がっている。検出できた長径は 2.3 m 以上、短径は 1.5 m で、深さは約 0.3 m である。土坑内からは雁振瓦（139）が 1 点出土している。

H 11 凹みは、H 4 溝に先行する遺構である。平面形が不定形であり底面も凹凸が激しく、H 4 溝や他の溝などの遺構が掘削される以前の自然地形であろう。平坦化するために人為的に埋めたものだと考えられる。凹み内からは、遺物が若干出土している。

H 5 道路状遺構の南西側には、円形や楕円形、隅丸方形の平面形の土坑を 11 基検出した。いずれの土坑からも遺物は出土しておらず、時期は不明である。他の調査区の様相から、これらの土坑は中世以

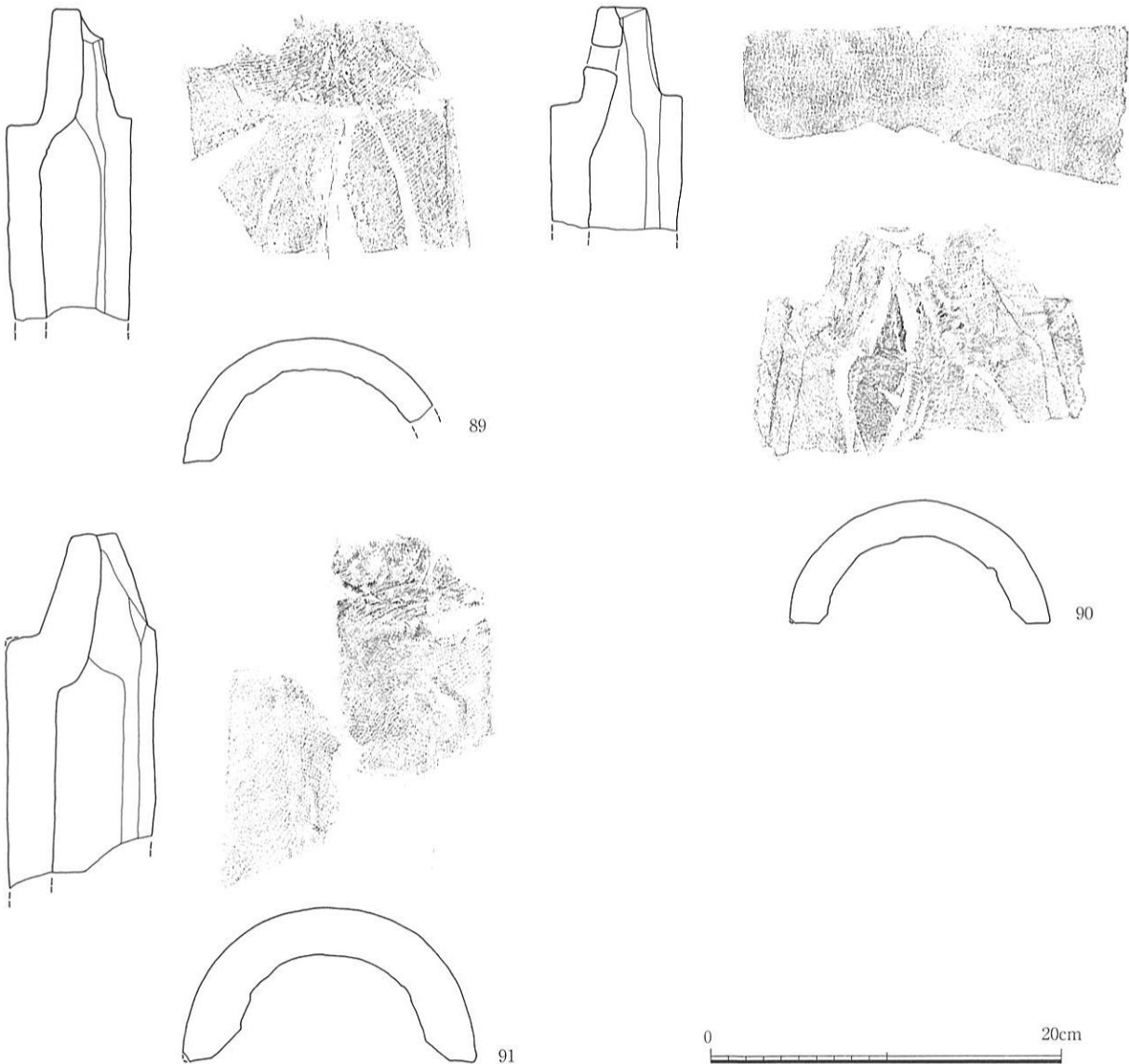


図55 H調査区出土遺物図（3）

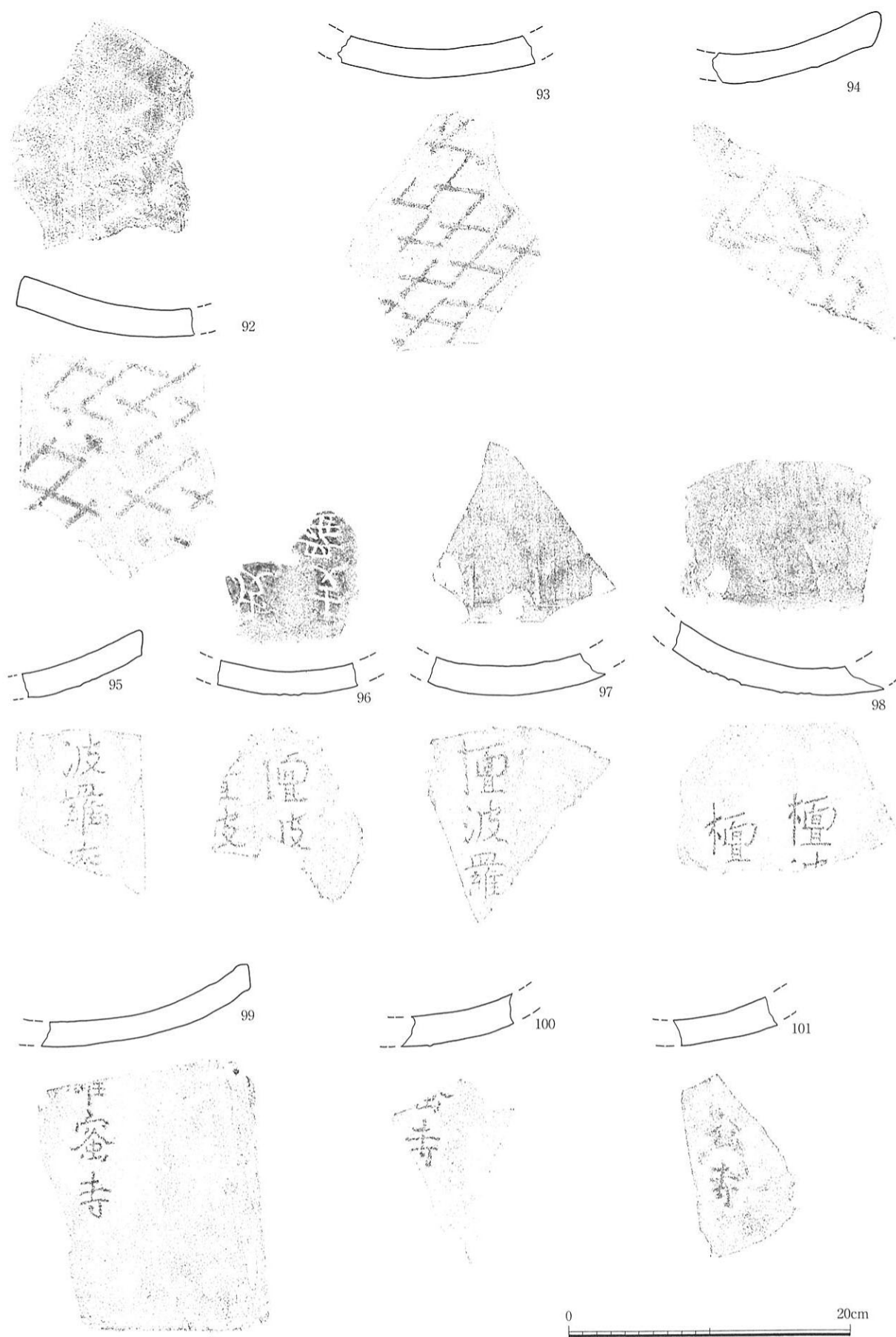


図56 H調査区出土遺物図(4)

降の墓壙の可能性が考えられる。

H 5 道路状遺構から南西側では、北東から南西方向の畦畔を検出した。いずれの畦畔も基盤層を削り出されたもので、本来はこの上に耕作層が存在しているが、近現代の耕作や造成に伴う削平のため、上記の状況で検出した畦畔である。

H 12 畦畔は延長 24.5 m を検出しており、水口が 2 カ所設けられている。

H 13 畦畔は、H 12 畦畔の南側で並行して延びる畦畔で、H 12 畦畔と H 13 畦畔の間隔は、約 6 m である。H 13 畦畔には水口が 2 カ所設けられている他、H 14 溝が畦畔に沿って掘削されている。

H 14 溝は、H 13 畦畔の北側を検出延長で約 8.5 m 延びた後、H 13 畦畔を横断して南東へ延びる。途中、南西方向へ分岐する溝も検出している。

H 12・H 13 畦畔・H 14 溝は、耕作に伴う遺構であり、一帯が耕作地化された中世以降のものである。

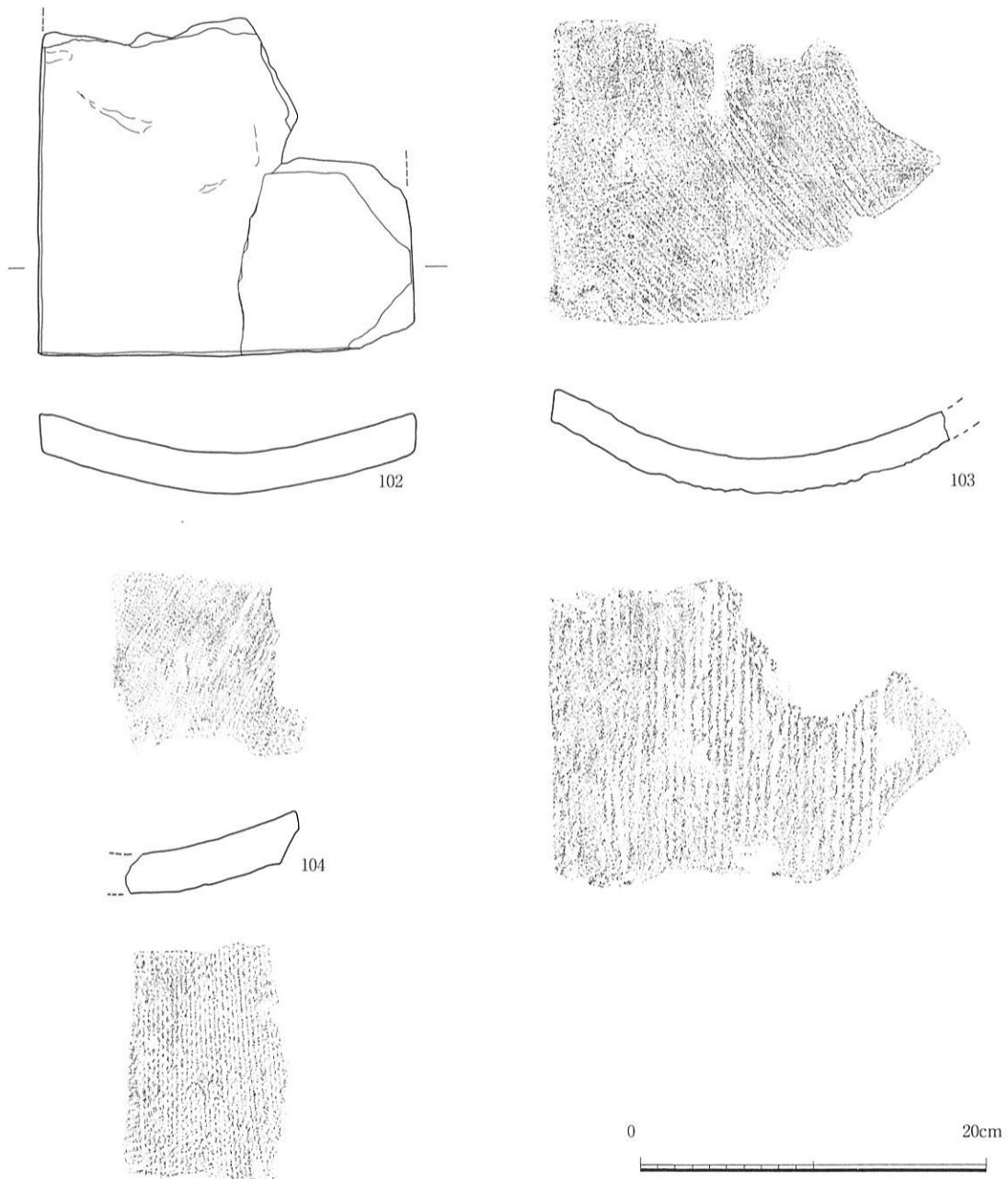


図57 H調査区出土遺物図(5)

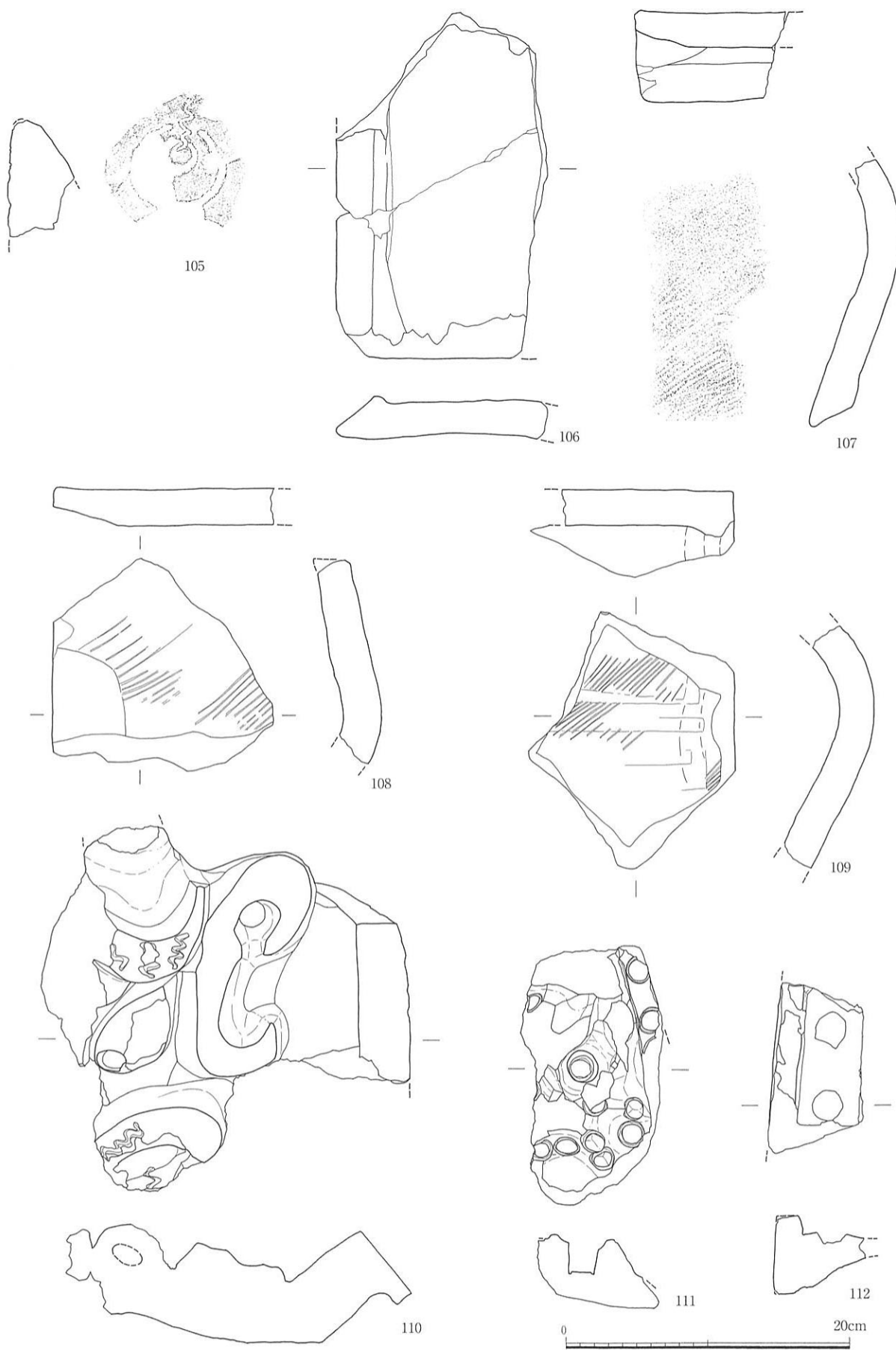


図58 H調査区出土遺物図(6)

ろう。H 14 溝内からは、149 瓦質土器が出土している。

H 15 土坑は、H 13 畦畔の南側で検出した土坑である。平面形は長径約 2 m、短径約 1.5 m の楕円形を呈する。深さは約 0.45 m である。土坑内からは、141 ~ 143 土師器小皿、144 土師皿、14 世紀の 145 瓦器碗が出土している。

H 16 井戸は、平面形が長径約 3.3 m、短径約 2.3 m の楕円形を呈し、深さは約 1 m 以上の素掘りの井戸である。井戸内からは、染め付けなどが出土していることから近世以降の井戸と考えられる。

この他、浅い凹みを数カ所検出しているが、これらは耕作に伴う攪拌によるものである。また、H 16 井戸の西には、高低差 0.15 m 前後の段差が畦畔にはほぼ直交するように検出されており、おそらくこの段差で耕作面が 1 段低くなってさらに西へ広がると考えられる。

H 17 ピット・H 18 ピットは、攪乱溝によって大部分が削平されている遺構である。H 17 ピットからは、14 世紀代と考えられる 146・147 土師器小皿が出土している。H 18 ピットからは、反りが無く、身幅も薄い短刀が 1 点出土している。この短刀は、14 世紀頃と考えられる。

以上、H 地区で検出した遺構と出土した遺物を記述したが、概ね 13 世紀後半から 14 世紀前半に収まる時期と考えられる。

この他、遺構検出を行うために人力で掘削を行った層（第 1 層）からは、瓦類や土器、土製品、石製品が出土している。これらの遺物で図化したものに 150・151 三巴文軒丸瓦、153 鬼板瓦、152 の凸面に粗い斜格子叩きが施されている平瓦がある。

H 地区では、上述のような遺構を検出したが、土地利用に大きく 2 つの形態が見られた。1 つは多量の瓦や焼土、土器が出土した L 字の溝や、土坑、小穴、溝が集中して検出される部分、もう 1 つは畦畔や、溝など耕作に伴う遺構が検出される部分である。この 2 つの土地利用の違いの境には、H 5 道路状遺構が位置している。仮にこの道路状遺構を里道と想定するならば、この里道を境に西には、L 字の溝から多量に出土している瓦を使用するような建物の存在とその区画の溝があり、東には耕作地が広がっている景観が想起できる。出土遺物を見ると、『檀波羅蜜寺』のスタンプが押された平瓦片が 23 点出土しており、檀波羅蜜寺と関係のある寺の存在が推測できよう。

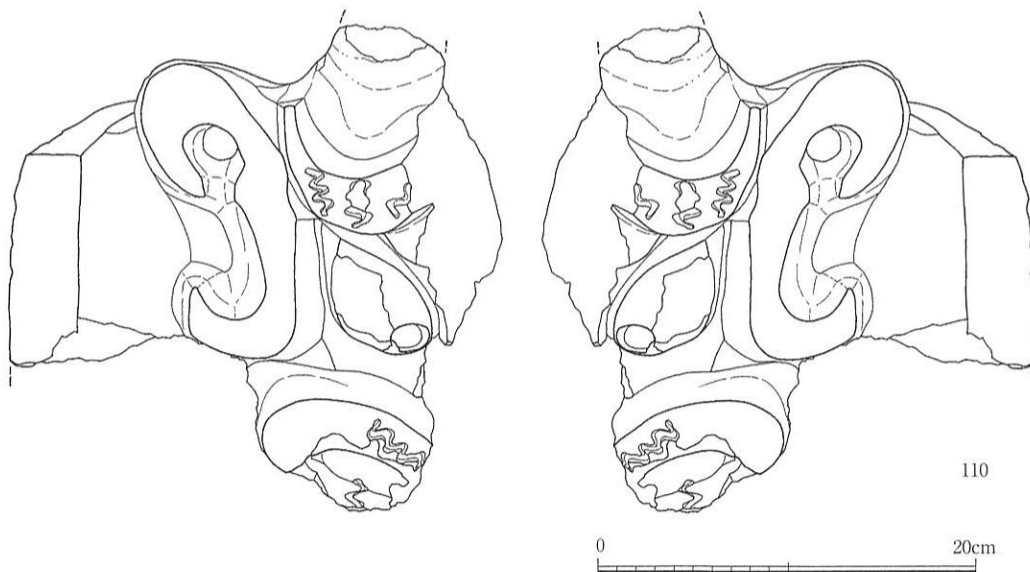


図59 H 2 調査区出土鬼瓦推定復元図

また、L字形の溝やその他の溝、畦畔や段差などは全て同一方向を指向しており地割り方向は、座標北から東へ約50°ふれた、北東から南西方向を基準としている。この地割り方向は、出土遺物等から少なくとも鎌倉時代に遡るもので、以来踏襲されていると考えられる。

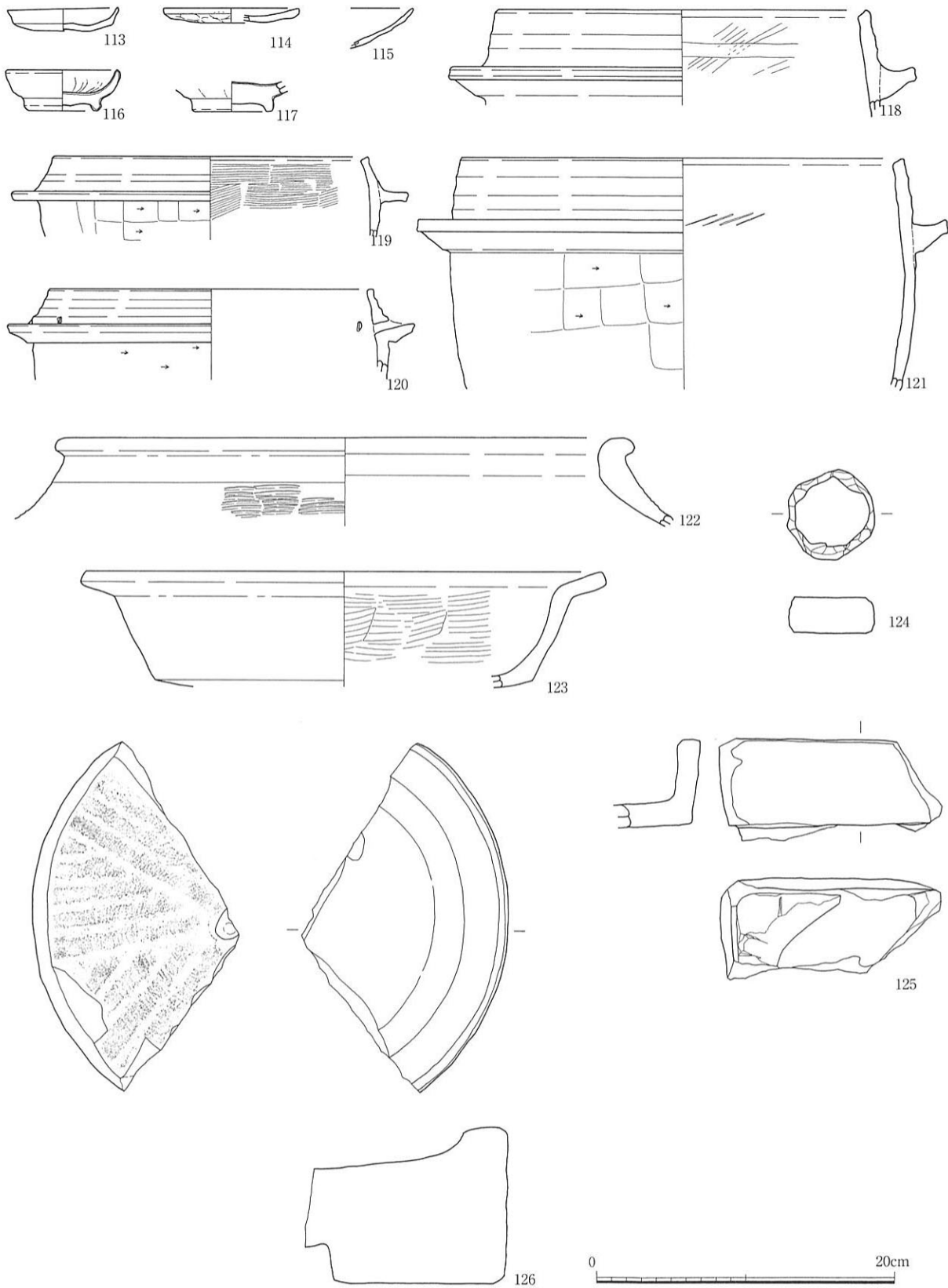


図60 H調査区出土遺物図(7)

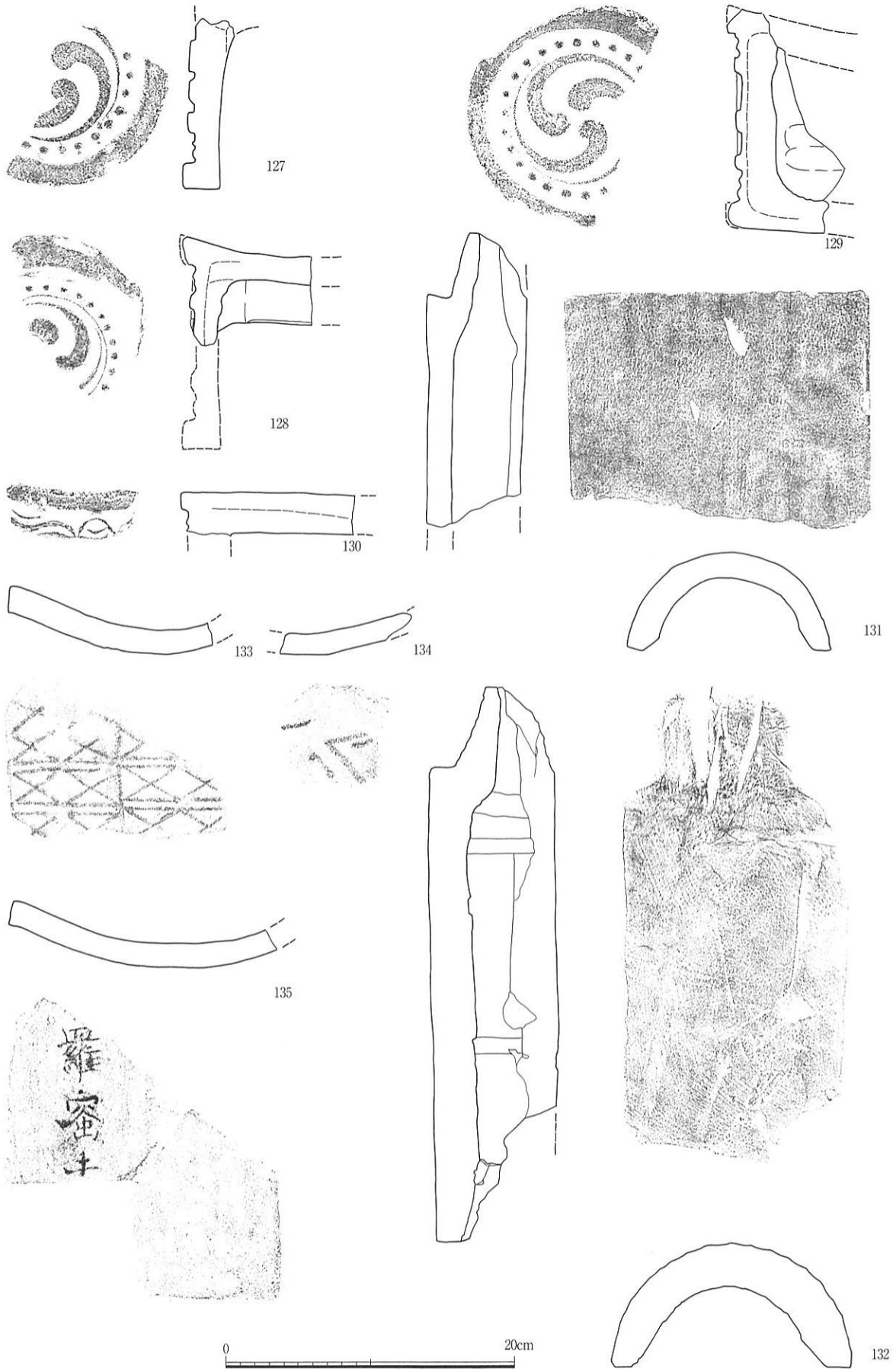


图61 H調査区出土遺物图(8)

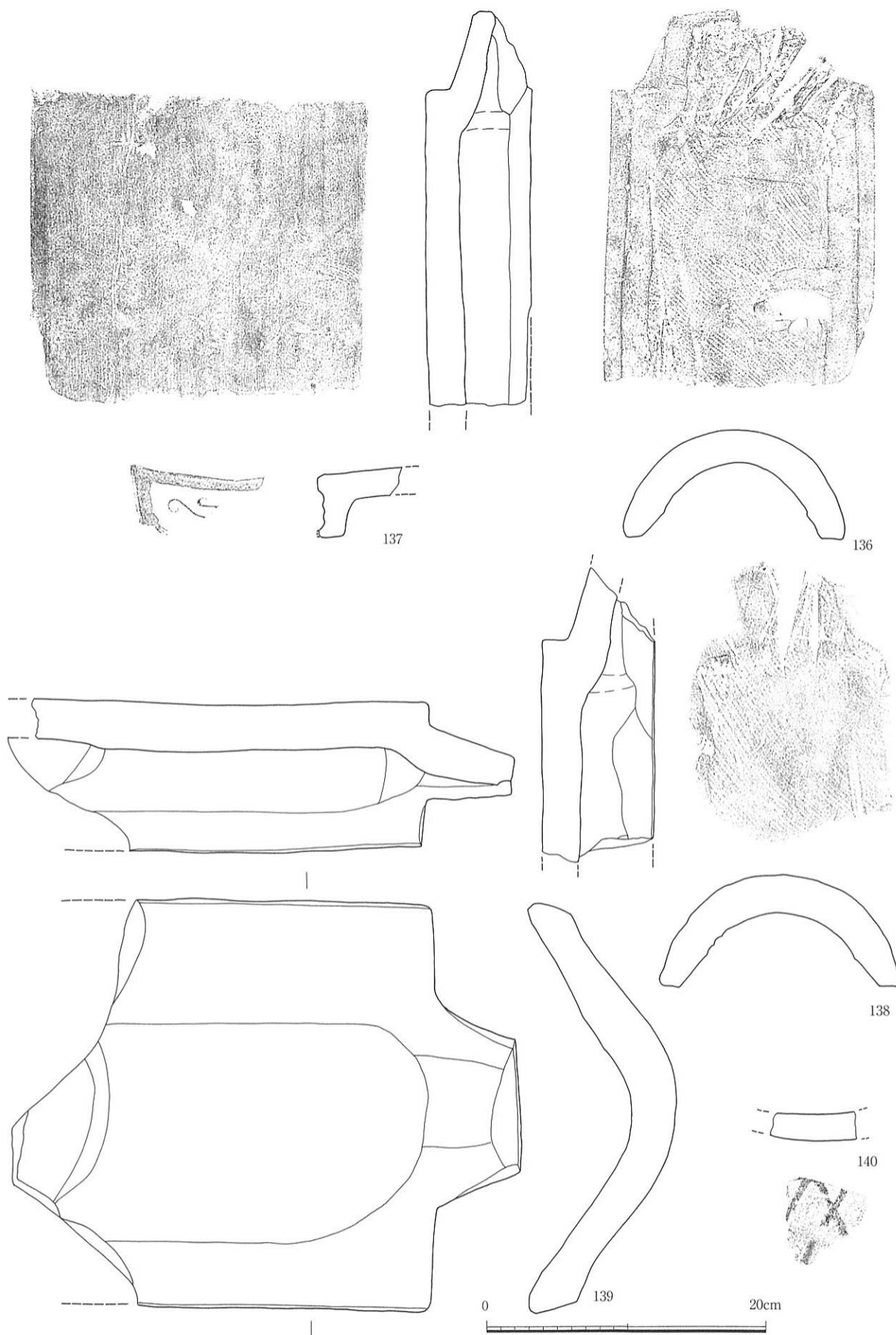


图62 H調査区出土遺物图(9)

2 I 調査区

当調査区では、I 1～I 5の南海線の難波側から和歌山側に向かってI 1～5調査区の5箇所の特レンチを設けて調査を行った。発掘調査の過程では、特レンチ毎に遺構番号を付けて調査を行ったが、本書では、I 調査区全体を通して遺構番号を付け直した。

I 調査区は、円田川の左岸に広がる段丘平坦面上に位置しており、標高は8.7～9.0 mを測る。なかでもI 3調査区の中央南辺部が一番高く、そこから東西方向および北方向に下がっていく。しかし、その比高はI 1調査区やI 5調査区と比べても0.3 mとその差はあまりなく、概ね平坦であるといえる。これは、後世の耕作による削平によるものと考えられる。当調査区はI 1～I 5調査区まではほぼ同様の堆積状況がみられた。線路盛土および旧耕作土を重機で除去した後、中世以降の包含層を人力で除去して基盤層を検出した。検出した主な遺構は、土坑、溝、井戸、ピット、土壙墓などであるが、検出された遺構の年代は中世後半代のものでそれ以降のものが認められたが、これは当調査区周辺が中世後半代より近世にかけて墓域として使用されてきたためである。土壙墓の分布範囲はI 1～3調査区の間で集中する。土壙墓と確認できた遺構は41基である。多くは径1.0～1.5 mの円形のプランをもつタイプで座棺による埋葬と考えられるが、一部には長方形や長楕円形のプランをもつものもみられる。

検出された遺構は、地割りに則った溝が10条、井戸1基、土坑5基、落ち込み1基、土壙墓41基以

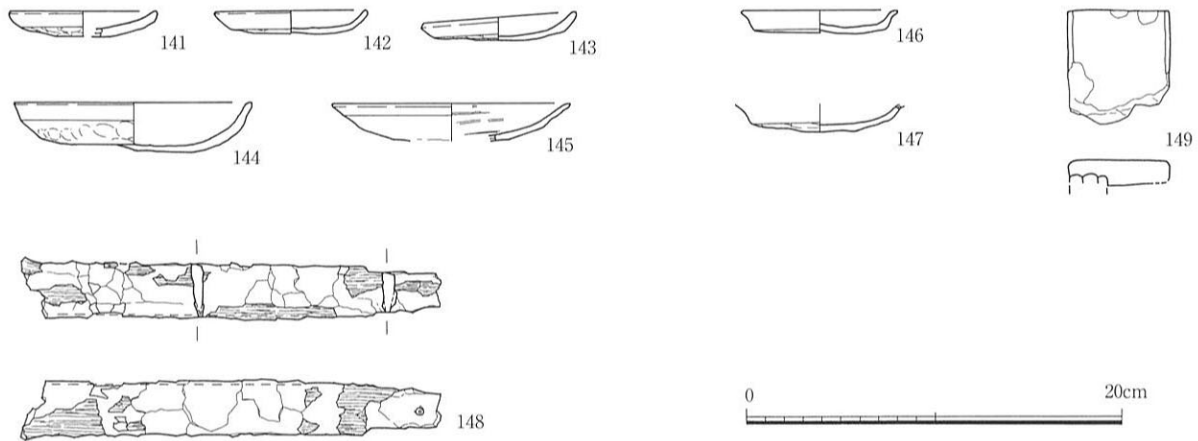


図63 H調査区出土遺物図 (10)

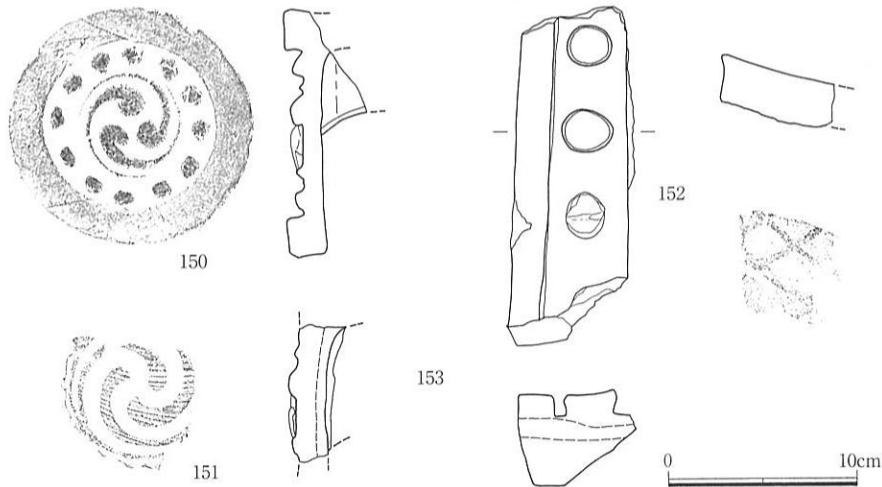


図64 H調査区出土遺物図 (11)

第4章 調査成果

上で、これらの遺構はI1～I3調査区において検出された。I1・I6・I7・I8・I9・I10溝は北西-南東方向に長軸をもち、I2・I3・I4・I5溝はそれらの溝に直交する。

I1溝はI3調査区の西端に位置し、北西-南東方向に長軸をもつ。断面台形を呈し、規模は上幅

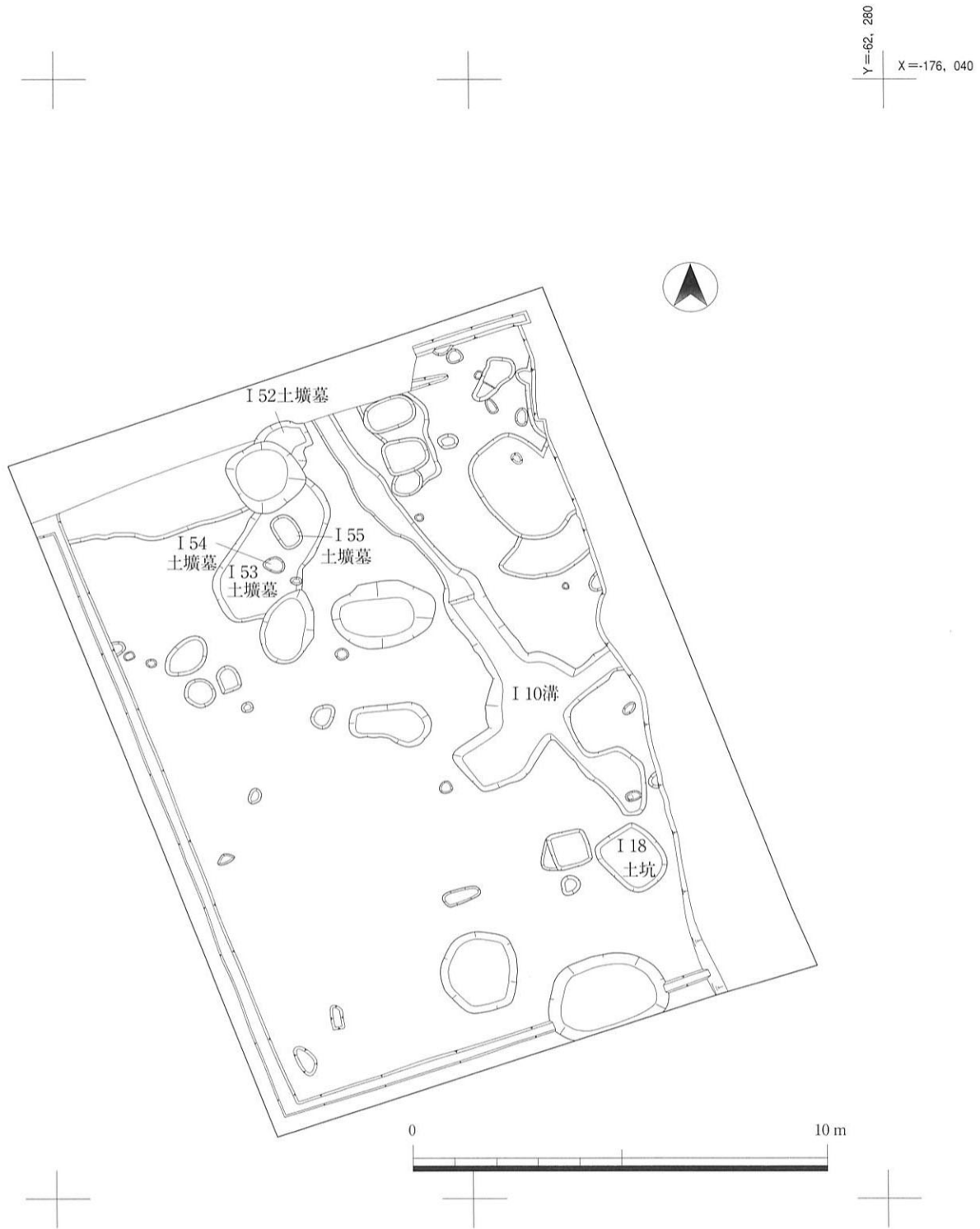


図65 I1調査区第1面平面図

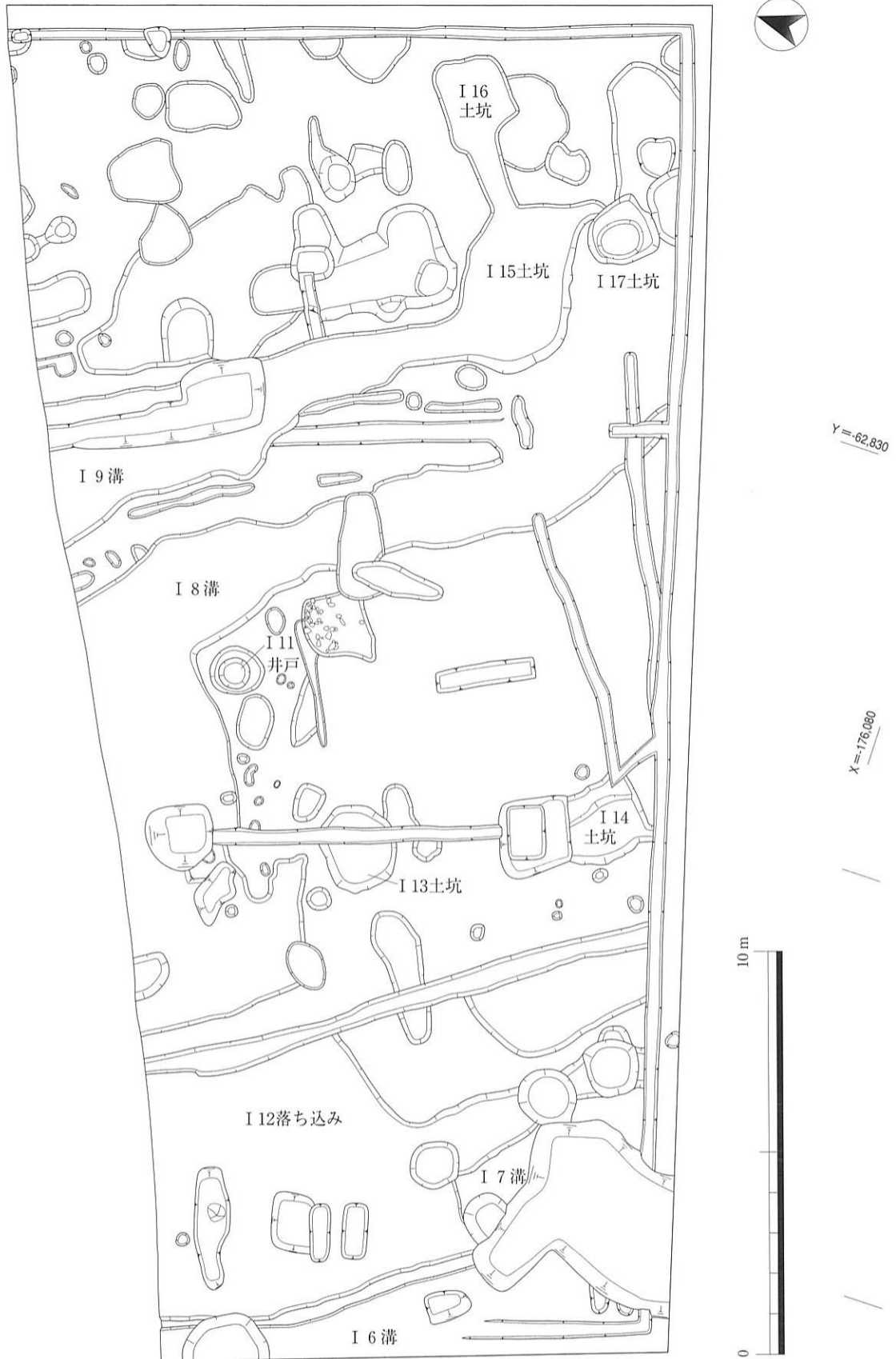


図66 I2調査区第1面平面図

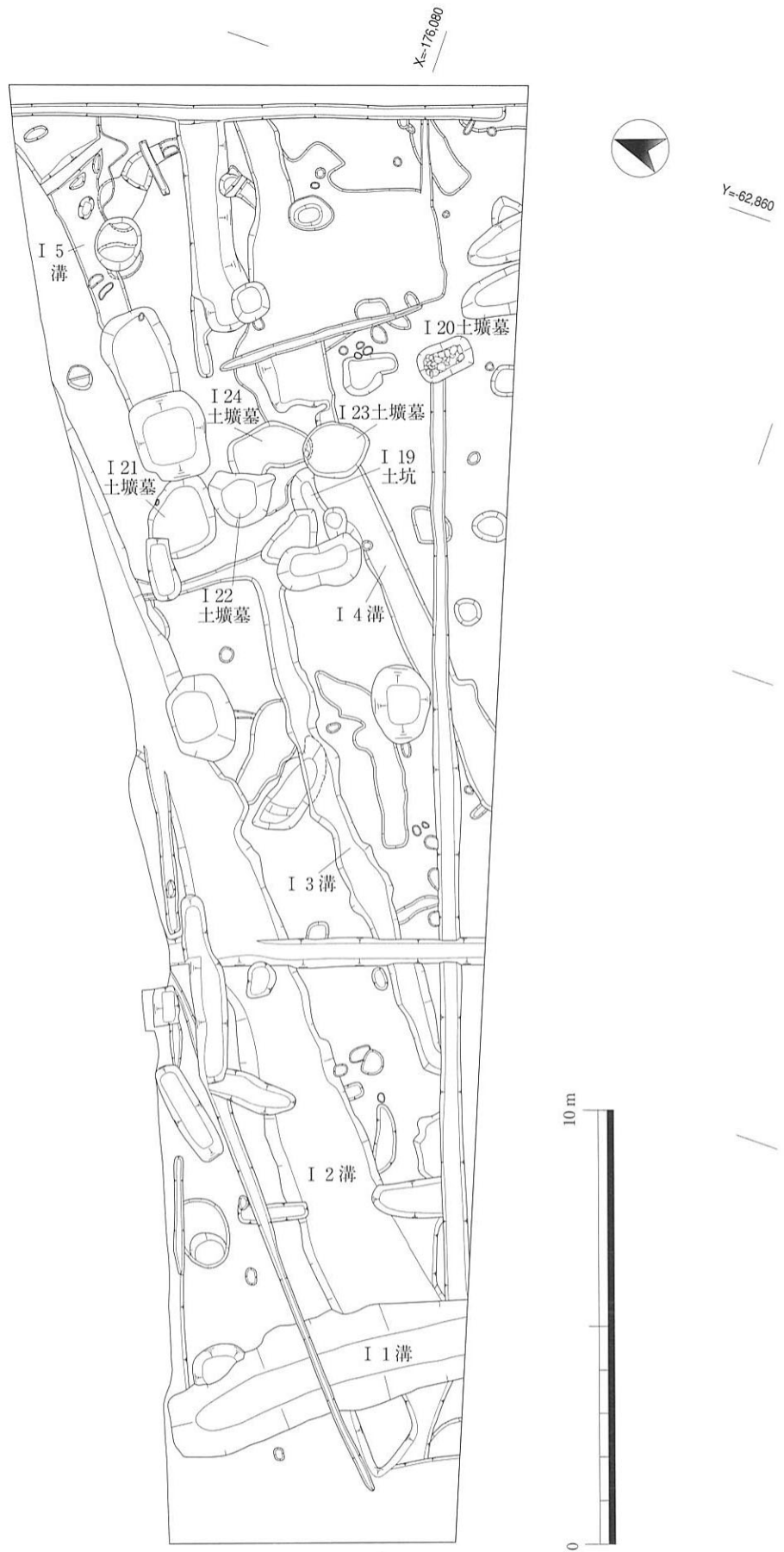


図67 I3調査区第1面平面図

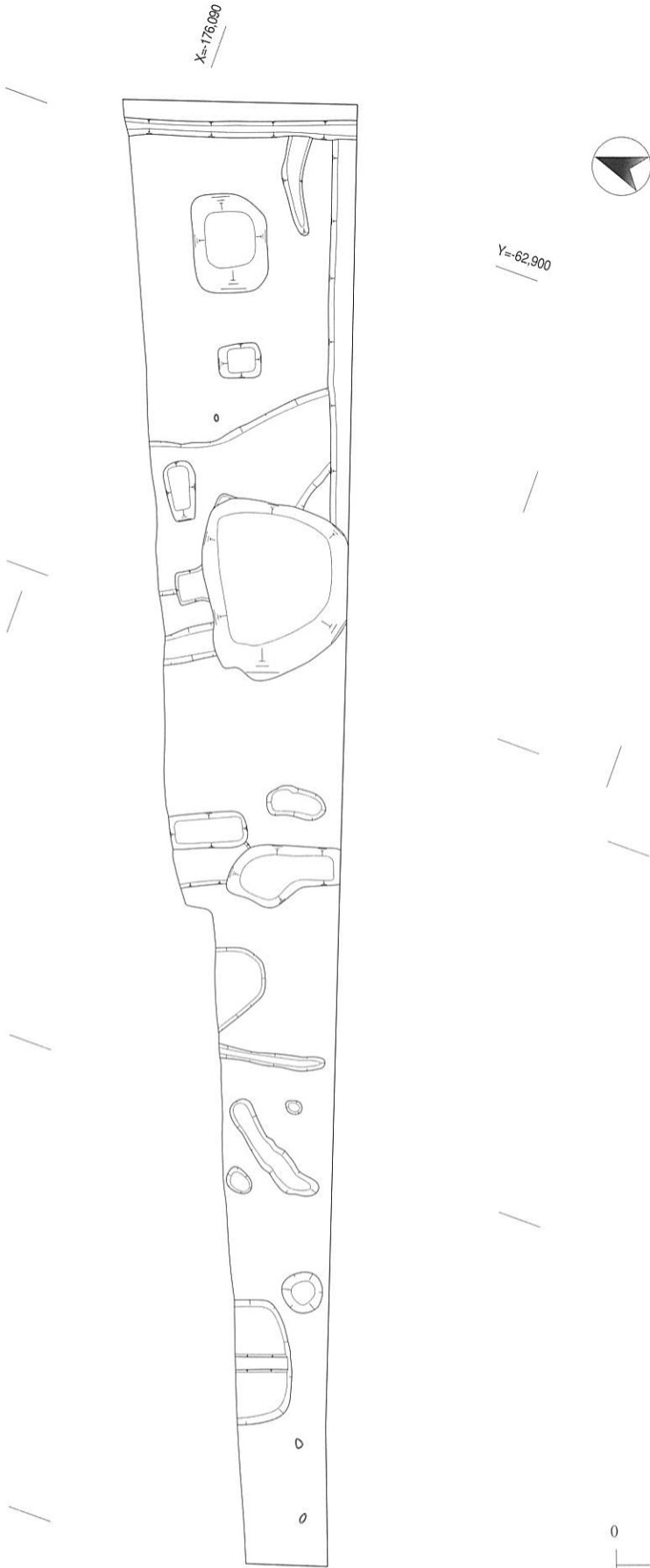


図68 14調査区第1面平面図

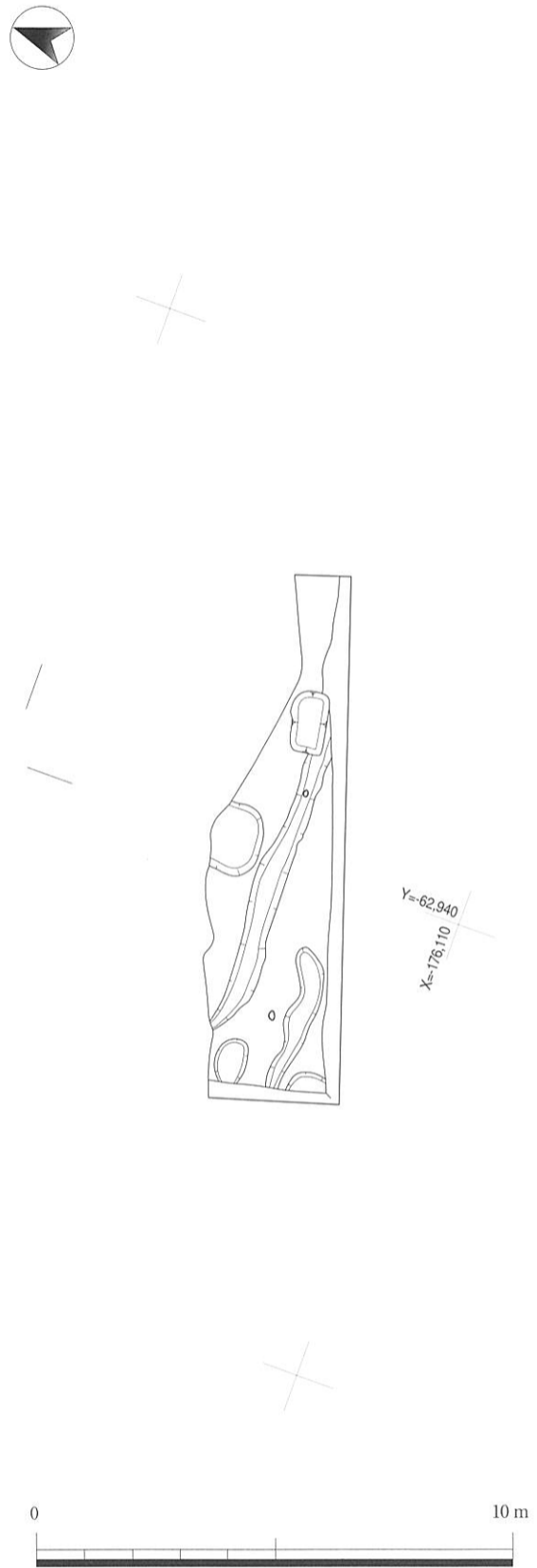


図69 15調査区第1面平面図

2.2 m、下幅 0.7 m、深さ 1.15 mを測り、I 1 溝は調査区の北端で収束する。断面観察を行った結果、滞水していたのではなく、空堀状態であったものが人為的に埋められたと考えられる。そして、溝の西側では遺構が希薄になることや、I 1 溝の位置が、H調査区とI調査区の間が存在したと考えられる坪境から約 100 mの地点にあたることなどから、掘割状を呈した区画溝であったと考えられる。出土した遺物は、須恵器、瓦質土器、土師器小皿、青白磁などである。154 は土師器小皿である。155 は土師器皿である。156・157 は青磁碗の底部である。158 は白磁碗の底部である。159 は瓦質の鏝付き鍋である。160 は瓦質の甕である。161 は須恵器甕である。

I 2 溝はI 3 調査区に位置し、I 1 溝に直交してはしる。規模は幅 1.8 m、深さ 0.25 mを測る。I 1 溝に取りつくため、何らかの区画溝であったと考えられる。出土した遺物は、土師器、瓦質すり鉢、土師質マダコ壺などであるが、図示できたものは 196 の土師器小皿のみである。

I 3 溝は、I 2 溝の南約 2 mに位置し、東端で北に曲がる。規模は幅 0.8～1.0 m、深さ 0.15 mを測

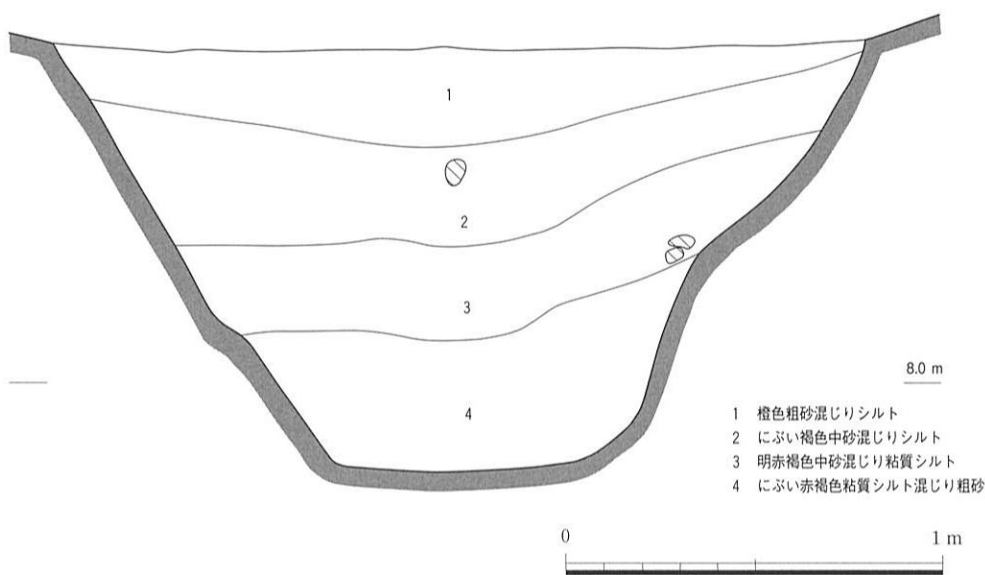


図70 I3 調査区第1面 I1 溝断面図

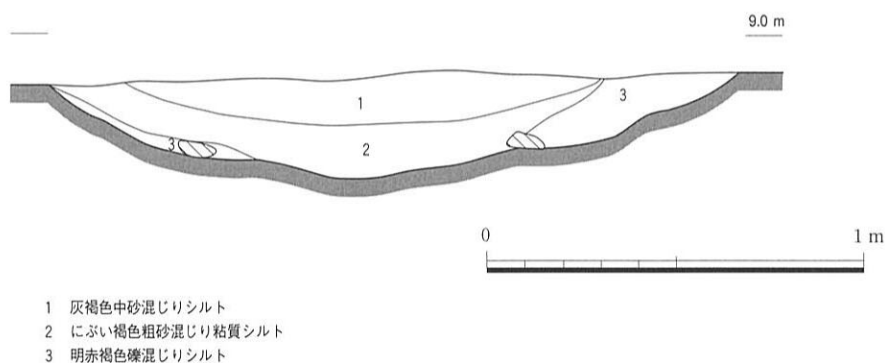


図71 I3 調査区第1面 I2 溝断面図

る。溝内からは、土師器小皿が0.5 × 0.4 mの範囲内に集中して検出された。小皿は数枚が重なった状態で出土した。小皿は完形に近く、図示できたものだけでも34点(162～195)を数えるが、細片も合わせると40点以上になる。小皿は、直径10cm前後のもの(162～180)と12cm前後のもの(181～

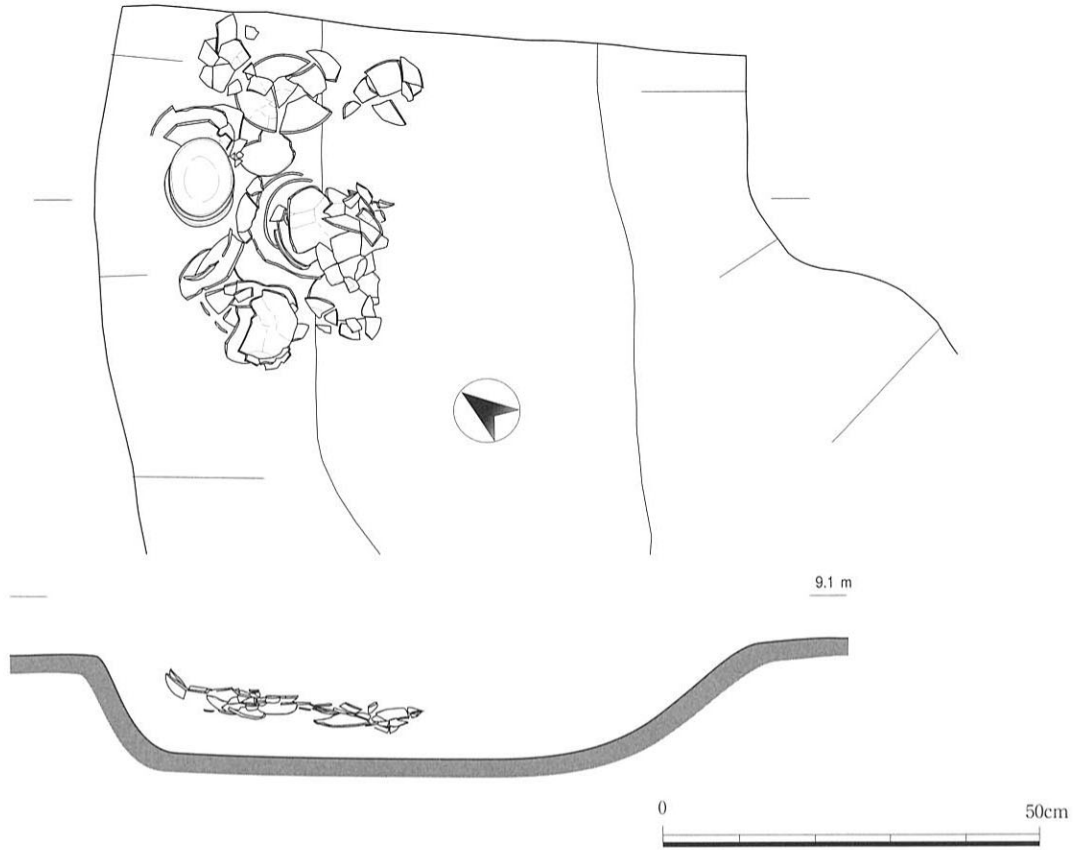


図72 13調査区第1面 13溝遺物出土状況図・立面図

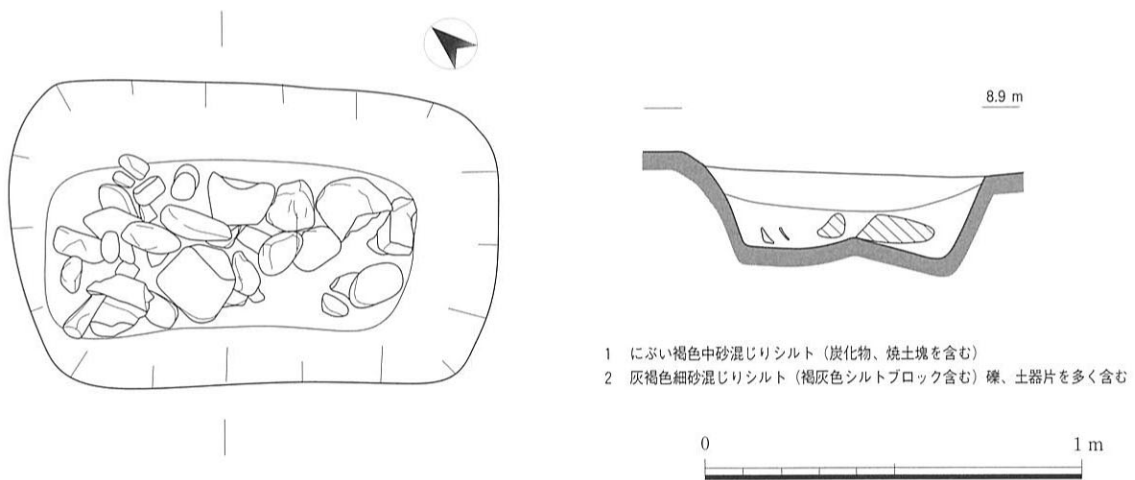


図73 13調査区第1面 120土壌墓平面図・断面図

195) との2種に大別できた。

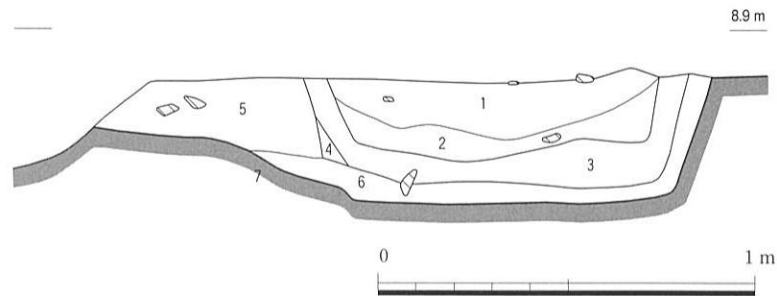
I 4 溝は、I 3 溝の南約 2 m に位置する。規模は幅 0.8 ～ 2.1 m、深さ 0.1 m を測る。

I 5 溝は、I 3 溝の東約 6 m の地点を I 3 溝に並行してはしる。規模は幅 0.8 ～ 2.0 m、深さ 0.1 ～ 0.2 m を測る。溝内より陶器 (197・198) が出土した。

I 6 溝は I 2 調査区の西端で、I 7 溝の西に隣接してはしる幅広の溝である。深さは 0.1 m を測る。

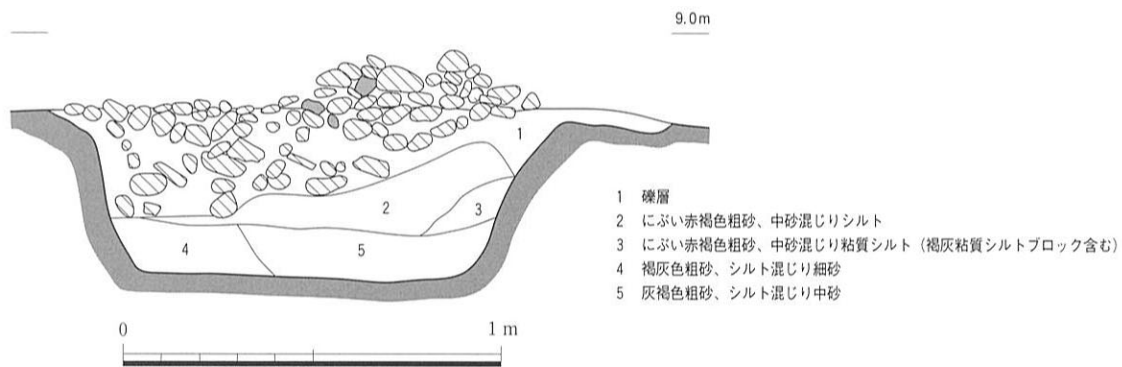
I 7 溝は I 1 溝の東約 37 m に位置する。調査区の南側では幅 1.5 m と狭いが、屈曲して幅 3.4 m に広がる。深さは 0.1 m を測る。出土した遺物は、東播系須恵器や瓦質土器などである (199 ～ 204)。

I 8 溝は幅 0.6 ～ 0.9 m、深さ 0.1 m を測る。I 1 溝や I 7 溝に並行してはしるが、調査区の北端で屈曲部をもち、幅 10.8 m に広がる。須恵器、土師器、瓦質土器、瓦などが出土した。210 は瓦質鋳け鍋



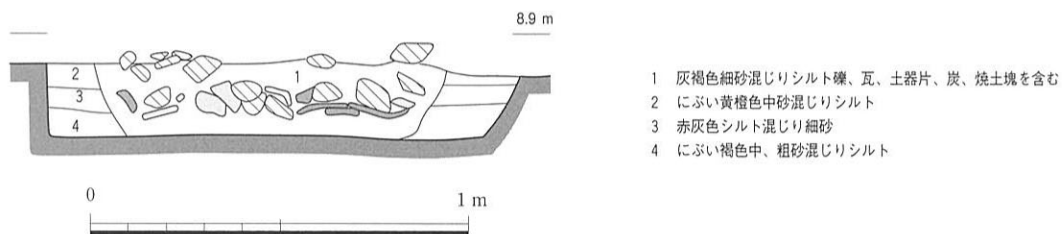
- 1 明褐色粗砂混じり粘質シルト (礫 5 ～ 10 cm、焼土塊、炭化物を含む)
- 2 にぶい褐色中砂混じりシルト
- 3 にぶい黄褐色中砂 (3 cm 基盤層ブロック土を含む)
- 4 にぶい黄褐色シルト混じり中砂
- 5 灰褐色粗砂混じりシルト (0.5 ～ 1 cm 礫を含む)
- 6 灰黄褐色シルト混じり粗、中砂
- 7 にぶい赤褐色粘質シルト (1 ～ 5 cm の礫含む) [基盤層]

図74 13 調査区第1面 I21 土壌墓断面図



- 1 礫層
- 2 にぶい赤褐色粗砂、中砂混じりシルト
- 3 にぶい赤褐色粗砂、中砂混じり粘質シルト (褐灰粘質シルトブロック含む)
- 4 褐灰色粗砂、シルト混じり細砂
- 5 灰褐色粗砂、シルト混じり中砂

図75 13 調査区第1面 I22 土壌墓断面図



- 1 灰褐色細砂混じりシルト礫、瓦、土器片、炭、焼土塊を含む
- 2 にぶい黄褐色中砂混じりシルト
- 3 赤灰色シルト混じり細砂
- 4 にぶい褐色中、粗砂混じりシルト

図76 13 調査区第1面 I23 土壌墓断面図

である。211は平瓦で、凸面には斜格子の陽刻が残る。

I 9溝はI 8溝の東1~2mに位置する。幅1.0~3.5m、深さ0.1mを測り、南端部はI 15土坑に取りつく。出土遺物は、陶器、瓦などである(205~209)。なお、このI 8溝とI 9溝の間は道であった可能性も考えられる。

I 10溝はI 1調査区で検出し、I 9溝の東約23mに位置する。幅0.5~1.0m、深さ0.1~0.3mを測るが、南端部は直交する溝をもち、収束する。陶器、瓦などが出土した。215は唐津窯の皿である。216は瓦で、凹面に布目痕、凸面に斜格子の陽刻が残る。

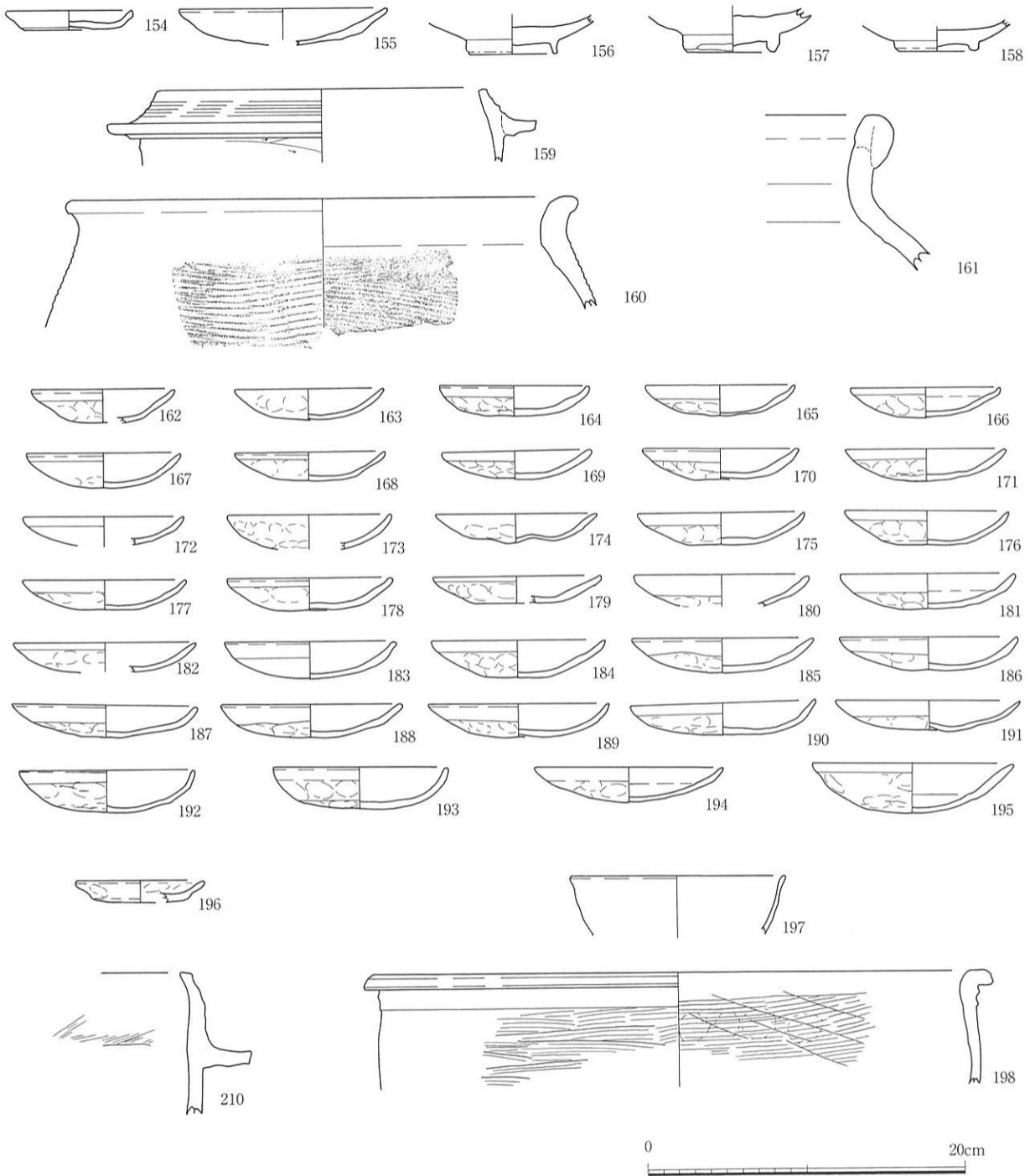


図77 I調査区出土遺物図(1)

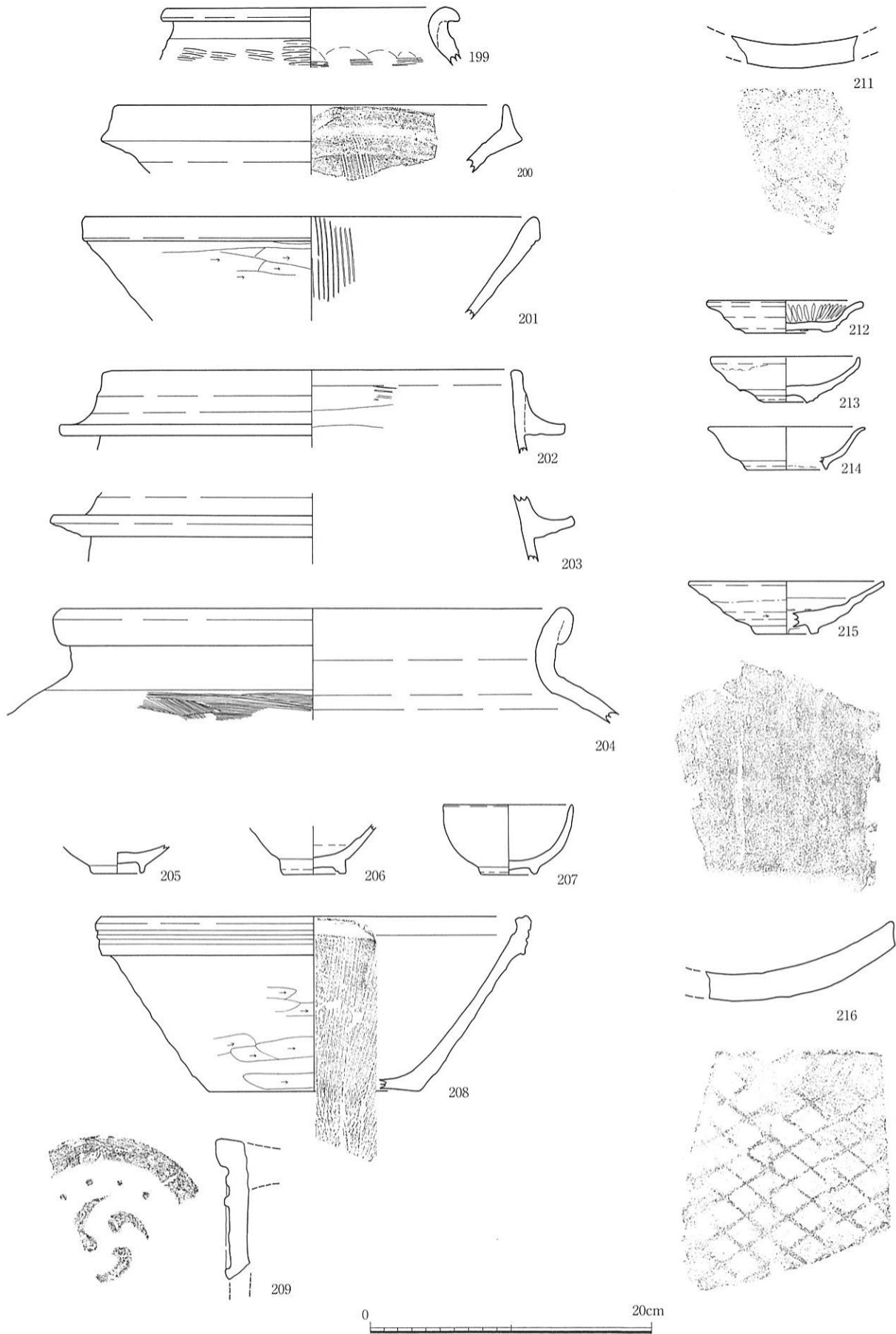


図78 I調査区出土遺物図(2)

I 11 井戸は I 8 溝の屈曲部に隣接する。径 1.2 ~ 1.4 m、深さ 3 m 以上を測る。遺物は図示できなかったが、瓦器碗の細片などが出土した。

I 12 落ち込みは I 7 溝の北に隣接する。I 8 溝の拡張部と同様の性格と考えられる。溝内からは陶磁器が出土した。212 は瀬戸・美濃窯の灰釉皿である。213 は唐津窯の皿である。214 は白磁皿である。

I 13 土坑は、I 14 土坑の北 4 m に位置する。径 2 × 1.5 m、深さ 0.1 m の楕円形の土坑である。土師質マダコ壺 (219) などが出土した。

I 14 土坑は長径 2.2 m、短径 1.5 m、深さ 0.3 m の楕円形を呈す。土師質甕 (221) が出土した。

I 15 土坑は I 9 溝の南に位置する不定形土坑である。深さは 0.2 m を測る。唐津窯の皿 (217) や土

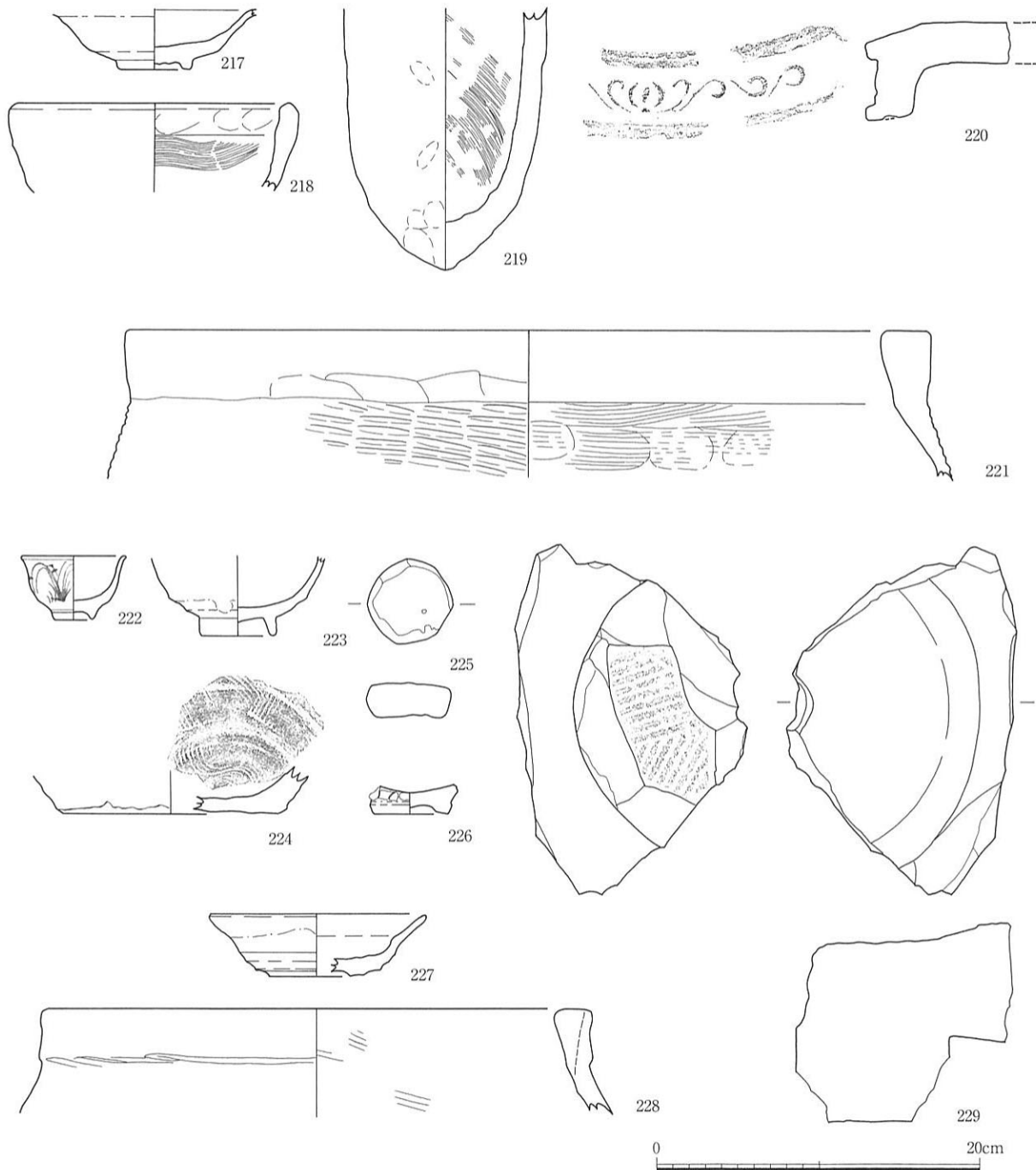


図79 I 調査区出土遺物図 (3)

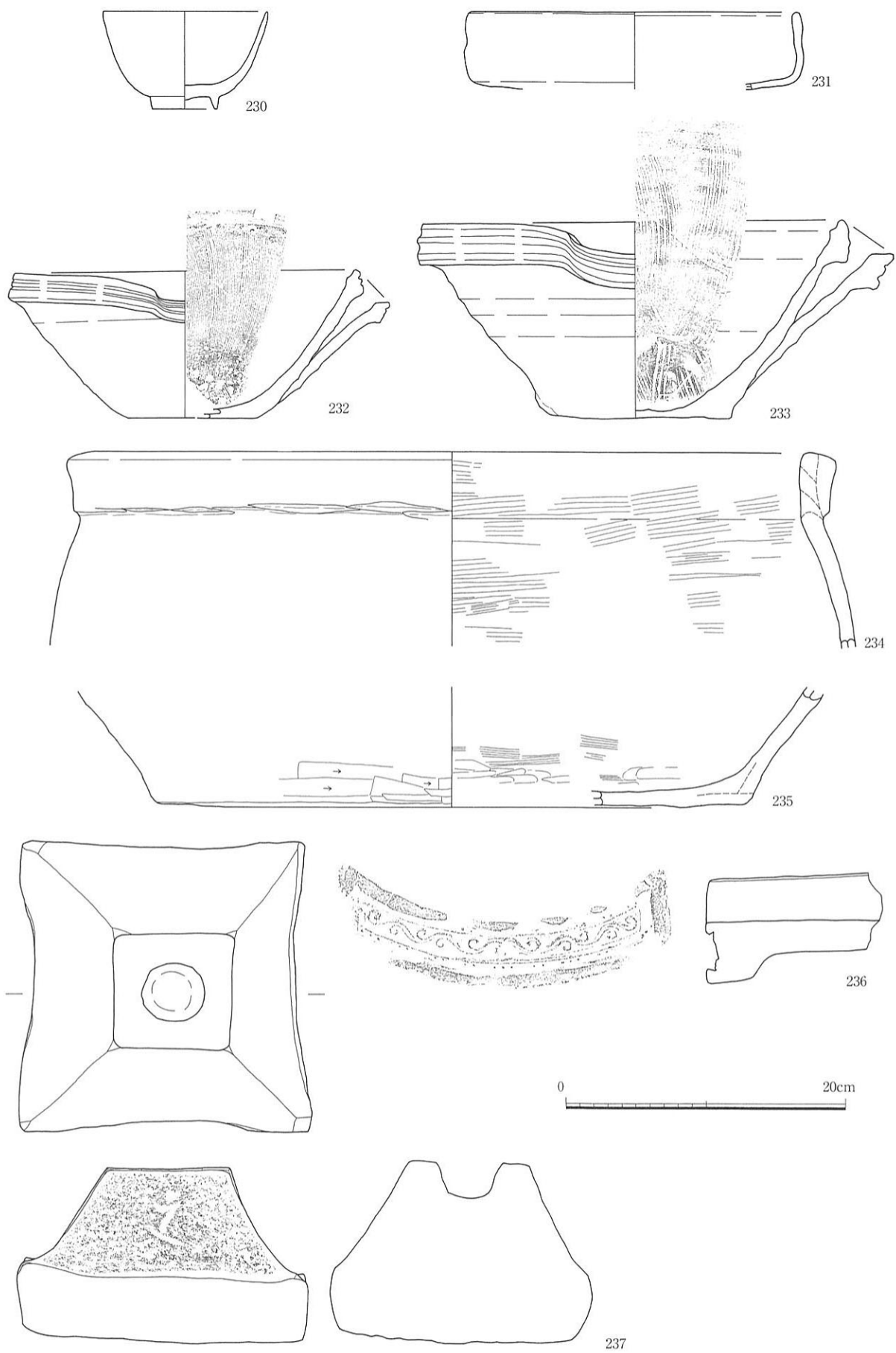


図80 I調査区出土遺物図(4)

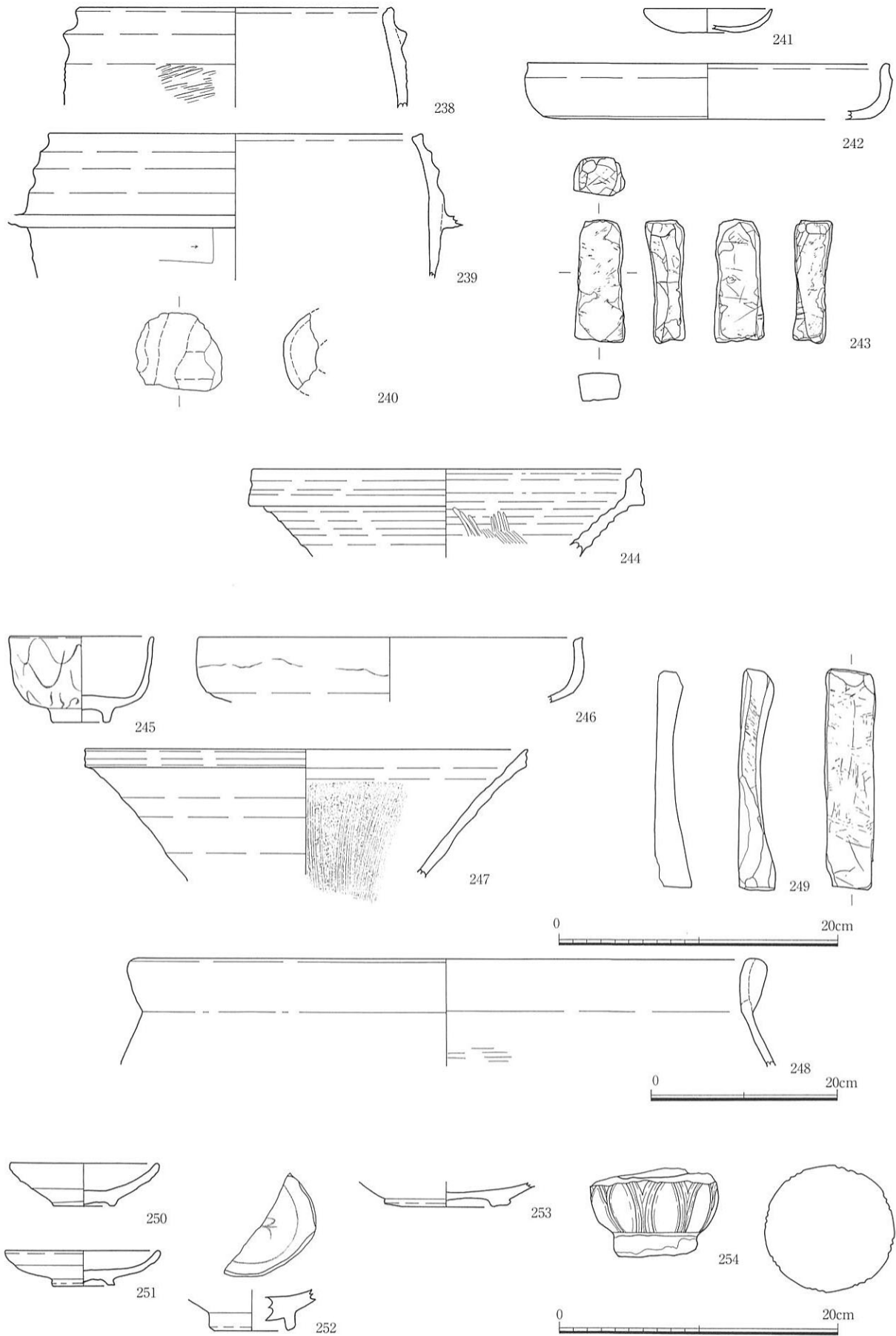


図81 I 調査区出土遺物図 (5)

師質マダコ壺 (218) などが出土した。

I 16 土坑は I 15 土坑の東約 2 m に位置し、長辺 2.0 m、短辺 1.7 m の平面長方形を呈し、溝で I 15 土坑と繋がる。

I 17 土坑は I 15 土坑の南に隣接する。平面は長方形を呈し、長辺 3.5 m、短辺 3.0 m、深さ 1.3 m を測る。


I 18 土坑は I 1 調査区の南東部に位置する。長辺 1.7 m、短辺 1.4 m、深さ 0.1 m を測る。埋土内より備前窯すり鉢 (244) が出土した。

I 19 土坑は I 4 溝の北側に位置するが、周囲が中世以降の土坑によって削平を受ける。軒平瓦 (220) が出土した。

I 20 土壙墓は I 3 調査区の南東部に位置する。長方形のプランをもち、長辺 1.3 m、短辺 0.8 m、深さ 0.2 m を測り、北西-南東方向に長軸をもつ。土壙墓の底部には大人の拳大から人頭大の円礫を敷き並べてあり、棺台として利用したと考えられる。棺台の一部には、石臼の上臼部の破損品を転用しているのがみられた。土壙墓の中から土師質マダコ壺、瓦の細片が出土した。この I 20 土壙墓のもつ軸は、I 1 溝に並行するものであり、I 2、I 3、I 4 溝に直交する。

I 21 土壙墓は、I 3 調査区の中央やや東寄りに位置する。墓壙の径 1.7 m、深さ 0.3 m を測る。断面観察の結果、径 1.0 m の座棺を据えたことが看取できた。出土した遺物は陶磁器、土製品、瓦などである。222 は染付である。223、224 は陶器である。226 は底部のみで、体部を打ち欠く。224 は備前窯のすり鉢である。内面は使い込みによる摩滅が著しい。225 は瓦を転用した円板形土製品である。

I 22 土壙墓は I 21 土壙墓の南に隣接して検出した。規模は径 1.4 m、深さ 0.5 m を測る。土壙墓の上面には径 5～10cm の円礫を積み上げており、棺蓋の崩落とともに落ち込んだ様子が看取できた。陶器、土師器が出土した。227 は唐津窯皿である。228 は土師器甕である。外面頸部に成形時に粘土が外へ広がるのを防ぐために締めた縄痕跡が残る。

I 23 土壙墓は I 22 土壙墓の南約 1 m に位置する。墓壙の掘方の径は 1.25 m、棺の底径は 0.7 m、深さ 0.2 m を測る。棺内には棺の上面に積んだと考えられる土器、瓦、礫が落ち込む。出土した遺物は陶磁器、土師器、瓦、石製品などである。230 は磁器碗である。231 は土師質火鉢である。232・233 は備前窯すり鉢である。234、235 は土師器甕である。同一個体の可能性がある。236 は軒平瓦である。237 は石製五輪塔の火輪である。傘部に梵字「」を陰刻する。

I 24 土壙墓は I 22 土壙墓と I 23 土壙墓の間に位置する。長径 2.0 m、短径 1.0 m の平面が楕円形を呈する。深さは 0.3 m を測る。I 22・I 23 土壙墓と先後関係にある。瓦質の鑊付き鍋 (238、239) やふいごの羽口 (240) などが出土した。

I 52 土壙墓は I 1 調査区の北辺部に位置する。攪乱による削平が著しい。出土遺物は染付碗 (245)、土師質火鉢 (246)、備前窯すり鉢 (247)、土師器甕 (248)、砥石 (249) である。

I 53～55 土壙墓は I 52 土壙墓の南に位置する。検出長は、長径 4.0 m、短径 1.8 m の楕円形を呈する掘方をもつ。検出段階で径 5 cm 程の円礫の塊が 3 箇所認められたため、複数体埋葬した墓壙と考えられる。出土した遺物は土師器小皿 (241)、土師質火鉢 (242)、砥石 (243) などである。なお包含層中より唐津窯皿 (250、251)、青磁 (252、253)、宝篋院塔の請花 (254) などが出土した。

3 J 調査区

当調査区は、円田川左岸に広がる段丘平坦面上に立地する。標高は7.6～8.7 mを測り、和歌山側に向かって下がる。当調査区は堆積が薄く、線路盛土と旧耕作土層を除去した段階で基盤層が検出されたが、調査区の西端部は基盤層上面が下がっているため、中世以降の包含層も残っていた。基盤層上面には基盤層が削り残されて畔状の高まりとして検出されたが、これは耕作時につくられた畦畔部分に擬似畦畔として残ったものである。また、当調査区内には近現代の攪乱が多く、遺構面の遺存状態は悪かった。出土した遺物もほとんどなく、従来の遺構面がかなり削られたものと考えられる。そんな状態の中で検出された遺構は、土坑12基、土壙墓1基、溝4条であった。

J 1 土坑は、調査区の東端部に位置する。攪乱により半分を失うが、径0.5 m、深さ0.3 mを測る。遺物の出土はなかった。

J 2 土坑は、J 1 土坑の0.4 m南に位置し、調査区外に延びる。検出した規模は長辺3.5 m、短辺1.6 m以上、深さ0.45 mを測り、方形のプランをもつ。床面はほぼ平坦である。遺物の出土はなかった。

J 3 土坑は、J 2 土坑の0.7 m西側に位置する。長径1.0 m、短径0.8 m、深さ0.3 mを測る楕円形の土坑である。遺物の出土はなかった。

J 4 土坑は、J 3 土坑の西約6 mに位置する。長径1.6 m以上、短径1.0 m、深さ0.4 mを測る楕円形を呈し、調査区外に延びる。遺物の出土はなかった。

J 5 土坑は、J 4 土坑の西約1.5 mに位置する。長さ1.4 m以上、幅0.6 m、深さ0.2 mの溝状の土坑である。遺物の出土はなかった。

J 12 土坑は、調査区の西端部でJ 13 溝の南に位置する。長径0.4 m、短径0.2 m、深さ0.3 mを測る楕円形の土坑で、上層には5～15 cmの礫を並べるものの、遺物の出土はなかった。

J 8 土壙墓は、調査区のほぼ中央部に位置する。径1.0 m、深さ0.07 mを測る。遺物は土師器小皿5点(255～259)、短刀1振り(260)が出土した。短刀は折れ曲がった状態で出土したが、全長33.2 cm(約1尺)、刀身部21.2 cm(約7寸)、刀身幅2.4 cmを測る。刀身には鞘の一部と思われる木質が残る。刀身の反りがないことなどから14世紀頃のものと考えられる。

J 13、J 14、J 15、J 17、J 18 溝は調査区の西端部で検出した。

J 13 溝は東西方向にはしり、J 18 溝はJ 13 溝に直交して取り付く。J 13 溝の規模は幅0.9 m、深さ0.4 mを測る。

J 18 溝の規模は幅0.9 m、深さ0.2 mを測る。

J 17 溝はJ 18 溝の東約4 mに位置し、ほぼ並行してはしる。幅1.0 m、深さ0.4 mを測り、J 13 溝と先後関係にある。遺物の出土はなかった。

4 K 調査区

当調査区は円田川左岸に広がる段丘平坦面上に立地する。標高は概ね7.4 mであるが、調査区の中央部はやや高くなっており、7.8 mを測る。調査区西端部は0.2 mの段になっており、西に向かって下がる。当調査区は攪乱が著しく、遺構面の残りは悪かった。線路盛土および旧耕作土層を重機で除去した後、中世以降の包含層を掘削して基盤層上面を検出した。検出した遺構は土坑が12基であった。いずれの土坑も深さ0.1 m以下と浅く、遺物の出土もなかった。また、包含層中からも遺物の出土がなかったことなどから、後世に相当削平を受けたものと考えられる。

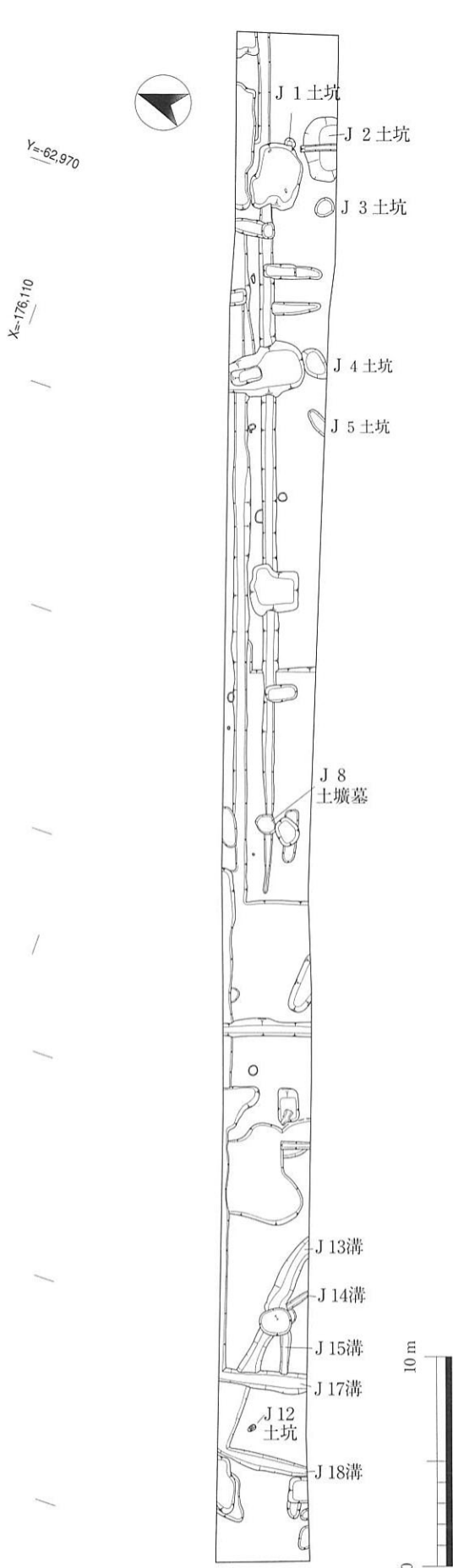


図82 J調査区第1面平面図

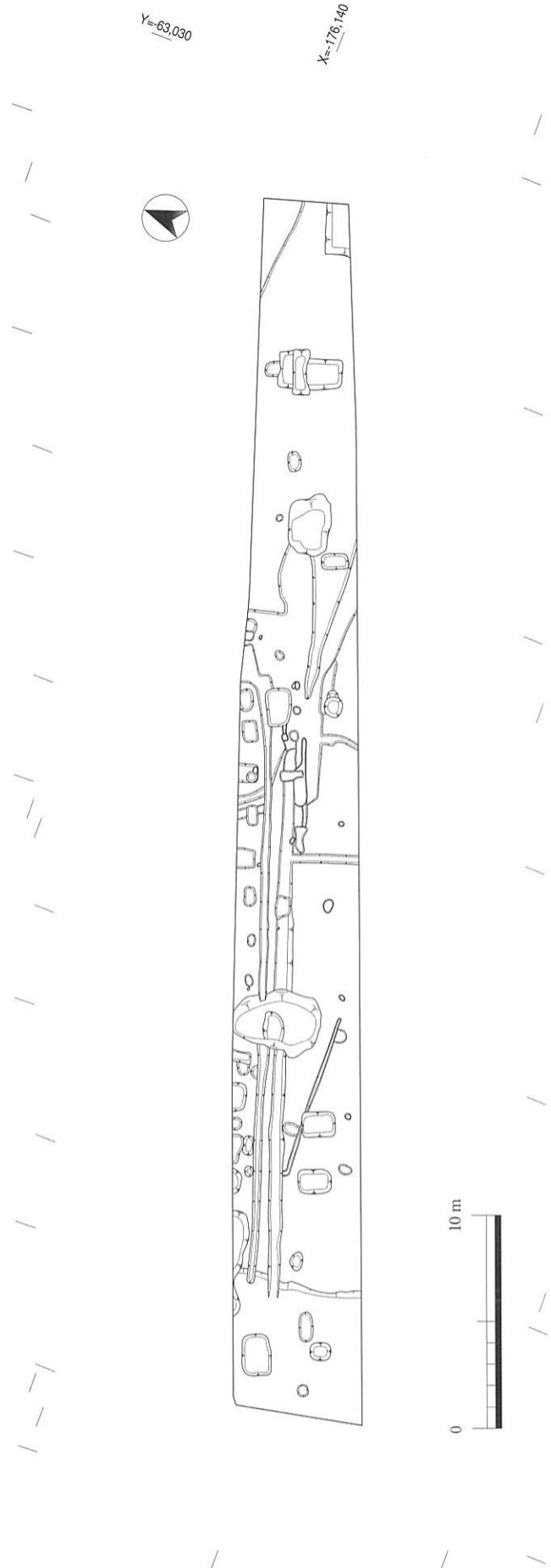
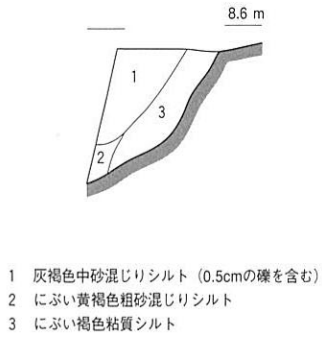
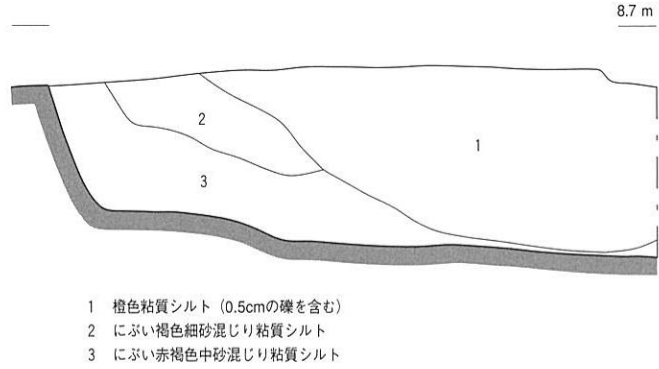


図83 K調査区第1面平面図



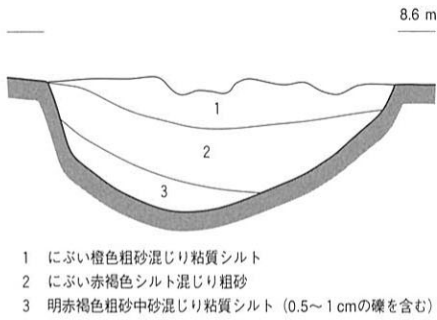
- 1 灰褐色中砂混じりシルト (0.5cmの礫を含む)
- 2 にぶい黄褐色粗砂混じりシルト
- 3 にぶい褐色粘質シルト

図84 J調査区第1面 J 1土坑断面図



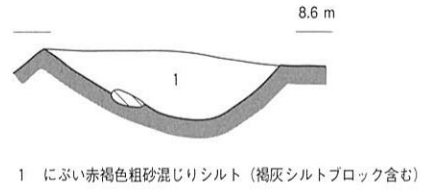
- 1 橙色粘質シルト (0.5cmの礫を含む)
- 2 にぶい褐色細砂混じり粘質シルト
- 3 にぶい赤褐色中砂混じり粘質シルト

図85 J調査区第1面 J 2土坑断面図



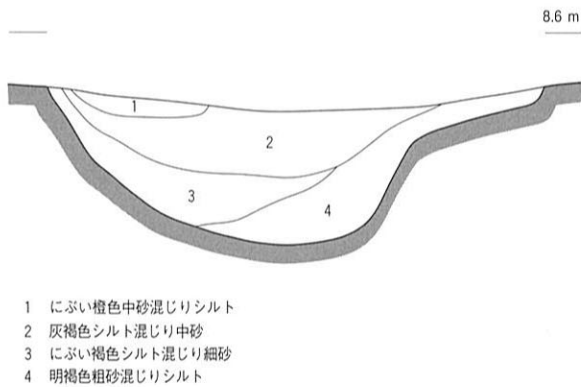
- 1 にぶい橙色粗砂混じり粘質シルト
- 2 にぶい赤褐色シルト混じり粗砂
- 3 明赤褐色粗砂中砂混じり粘質シルト (0.5~1cmの礫を含む)

図86 J調査区第1面 J 3土坑断面図



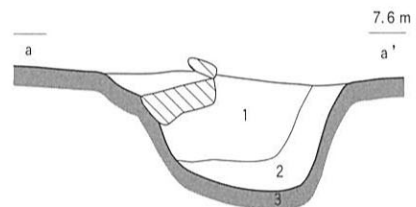
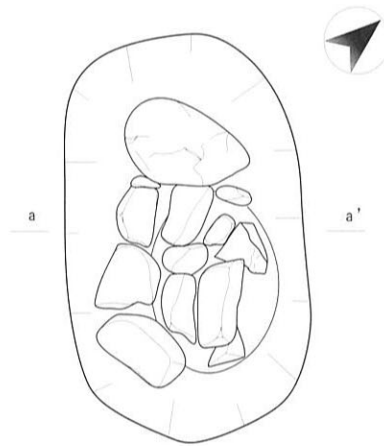
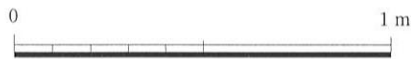
- 1 にぶい赤褐色粗砂混じりシルト (褐灰シルトブロック含む)

図88 J調査区第1面 J 5土坑断面図



- 1 にぶい橙色中砂混じりシルト
- 2 灰褐色シルト混じり中砂
- 3 にぶい褐色シルト混じり細砂
- 4 明褐色粗砂混じりシルト

図87 J調査区第1面 J 4土坑断面図



- 1 赤褐色粘質シルト混じり細砂 (礫を含む)
- 2 にぶい黄色粘質シルト混じり極細砂
- 3 明黄褐色中砂混じり粘質シルト (基盤層)

図89 J調査区第1面 J 12土坑平面図・断面図

第5節 大西遺跡

1 L調査区

当調査区も円田川左岸に広がる段丘平坦面上に立地するが、大西遺跡に属する。標高は概ね7.7 mを測る。線路盛土および旧耕作土層を重機で除去した後、中世以降の包含層を掘削して基盤層上面を検出した。当調査区も調査区の北半部は攪乱が著しく、遺構面の残りは悪かった。検出した遺構は土坑、溝、

ピットなどである。ピットは調査区の東半部で10基検出したが、今回の調査で建物を特定するには到らなかった。しかし、当調査区周辺に建物が建てられていた可能性は残る。調査区の中央部では、円形もしくは楕円形の土坑を6基検出した。

L 7 土坑は、長径 0.8 m、短径 0.5 m、深さ 0.2 m を測る。

L 8 土坑は、L 7 土坑の南に近接し、長径 1.1 m、短径 0.9 m、深さ 0.3 m を測る。

L 9 土坑は、L 8 土坑の西約 1 m に位置し、長径 1.2 m、短径 0.7 m、深さ 0.3 m を測る。L 10 土坑は、L 9 土坑の南約 0.8 m に位置し、長径 0.9 m、短径 0.6 m、深さ 0.2 m を測る。なお、

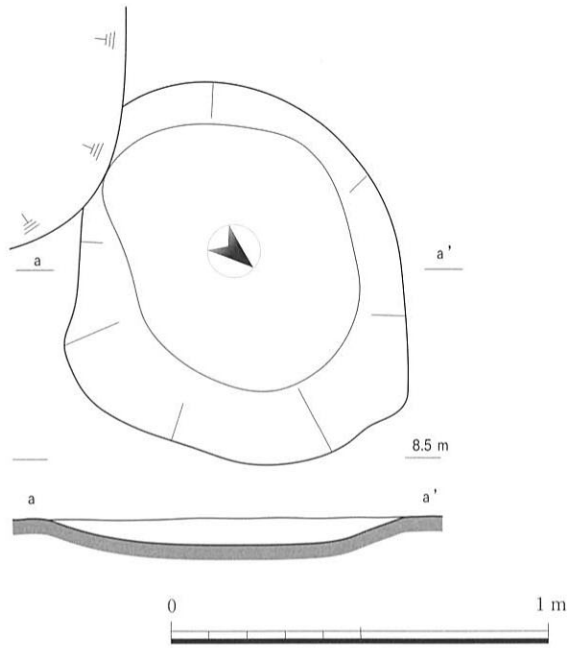


図90 J調査区第1面 J 8土坑墓平面図・断面図

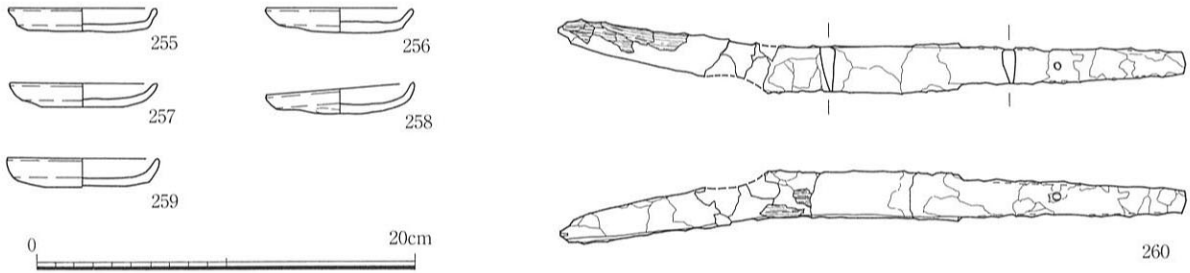
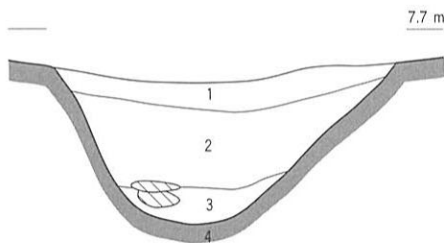
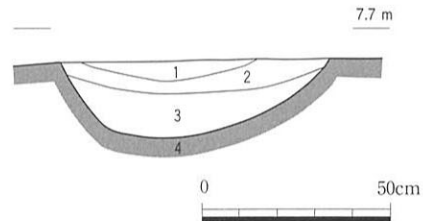


図91 J調査区第1面 J 8土坑墓出土遺物図



- 1 淡赤橙色中砂混じり極細砂（焼土塊を少量含む）
- 2 にぶい黄橙色中砂混じりシルト（焼土塊を多く含む）
- 3 にぶい黄橙色粗砂混じりシルト（10cm大の礫を含む）
- 4 黄橙色粗砂、極細砂混じりシルト〔基盤層〕

図92 J調査区第1面 J 13溝断面図



- 1 にぶい褐色粗砂
- 2 浅黄色粗砂混じり極細砂
- 3 にぶい黄橙色粗砂混じりシルト
- 4 にぶい黄橙色粗砂混じりシルト（0.5～1cmの礫含む）〔基盤層〕

図93 J調査区第1面 J 18溝断面図

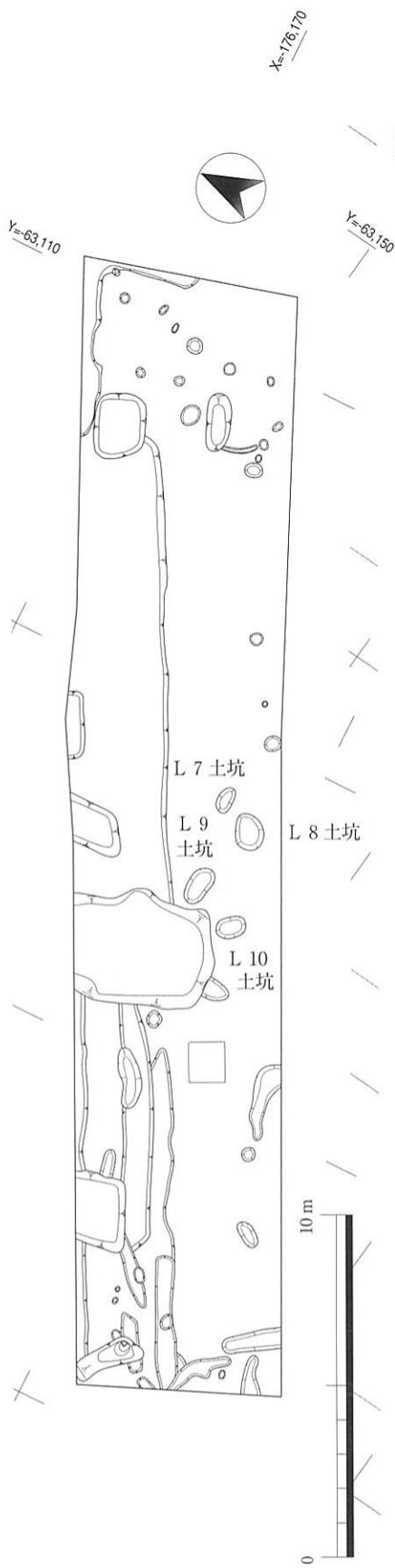


図94 L調査区第1面平面図

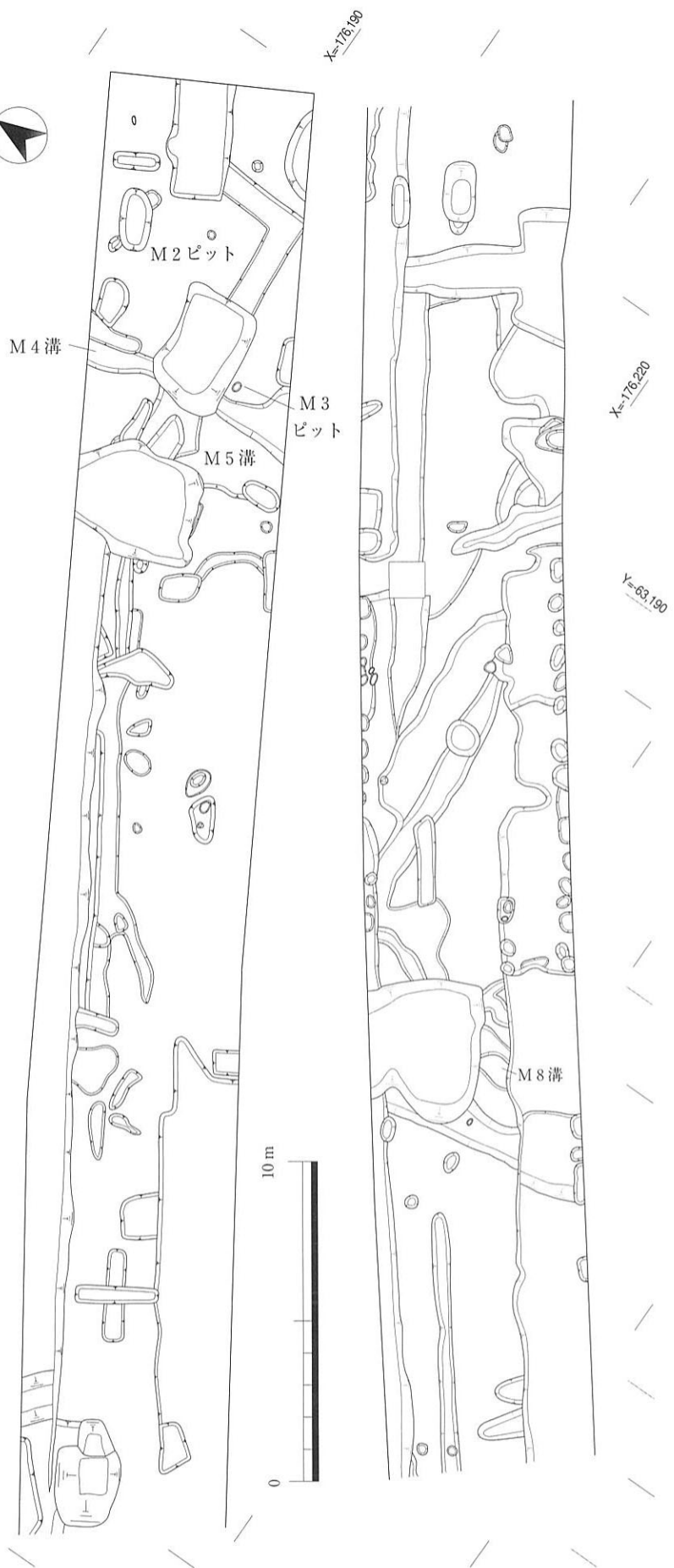
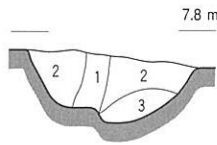


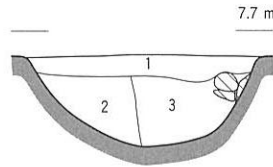
図95 M調査区第1面平面図

第4章 調査成果



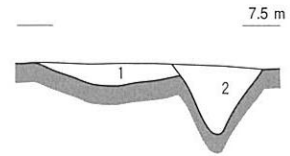
- 1 褐灰色シルト
- 2 にぶい赤褐色中砂混じりシルト
- 3 にぶい赤褐色粗砂混じり粘質シルト

図96 L7土坑断面図



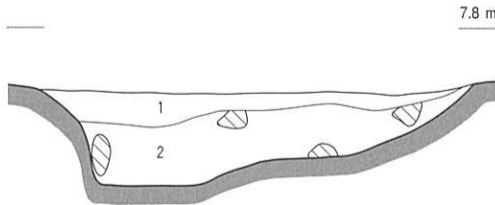
- 1 灰褐色粗砂混じりシルト
- 2 にぶい褐色粗砂混じり粘質シルト
- 3 灰黄褐色礫（1～3cm）混じりシルト

図98 L9土坑断面図



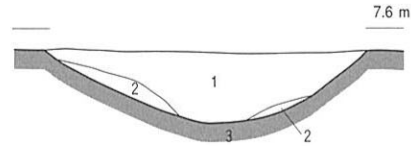
- 1 褐灰色礫（1～3cm）シルト混じり細砂
- 2 灰褐色礫（3～5cm）混じりシルト

図99 L10土坑断面図



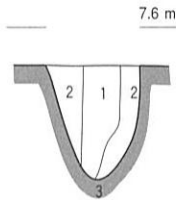
- 1 にぶい赤褐色粗砂混じり粘質シルト
- 2 にぶい赤褐色中砂混じり粘質シルト（3～5cm礫を含む）

図97 L8土坑断面図



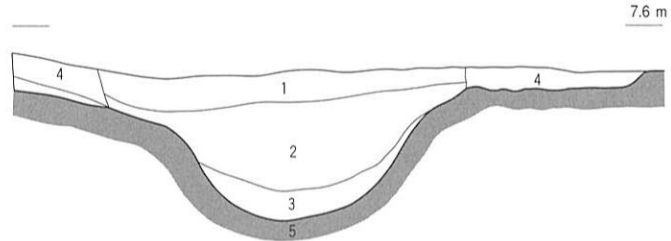
- 1 褐灰色中砂混じりシルト
- 2 にぶい赤褐色粗砂シルト混じり細砂
- 3 明赤褐色粗砂混じり粘質シルト（0.1～0.5cmの礫）〔基盤層〕

図101 M4土坑断面図



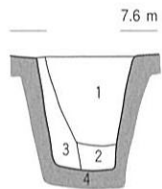
- 1 褐灰色粘質シルト
- 2 明黄褐色粗砂混じり粘質シルト
- 3 明黄褐色粗砂混じり粘質シルト〔基盤層〕

図100 M2土坑断面図



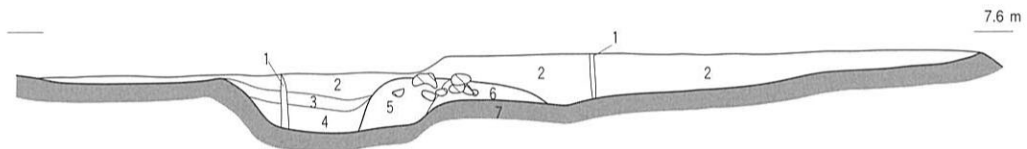
- 1 にぶい褐色粘質シルト
- 2 にぶい黄褐色粗砂シルト混じり細砂
- 3 褐色粗砂、粘質シルト混じり細砂
- 4 にぶい赤褐色粗砂混じり粘質シルト（0.1～0.5cmの礫を含む）
- 5 明赤褐色細砂混じり粘質シルト〔基盤層〕

図102 M5土坑断面図



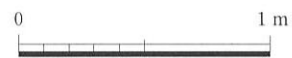
- 1 灰黄色粘質シルト
- 2 灰黄色褐粗砂、粘質シルト混じり細砂
- 3 明黄褐色粗砂混じり粘質シルト〔基盤層〕
- 4 明赤褐色粗砂混じり粘質シルト（0.1～0.5cmの礫）〔基盤層〕

図103 M3土坑断面図



- 1 灰色中砂（杭）
- 2 にぶい黄褐色粗砂混じりシルト
- 3 橙色粘質シルト
- 4 灰黄褐色粗砂混じり粘質シルト
- 5 にぶい黄褐色微砂混じり粘質シルト
- 6 にぶい橙色微砂、細砂混じり粘質シルト（礫を含む）
- 7 橙色礫混じり粘質シルト〔基盤層〕

図104 M8溝断面図



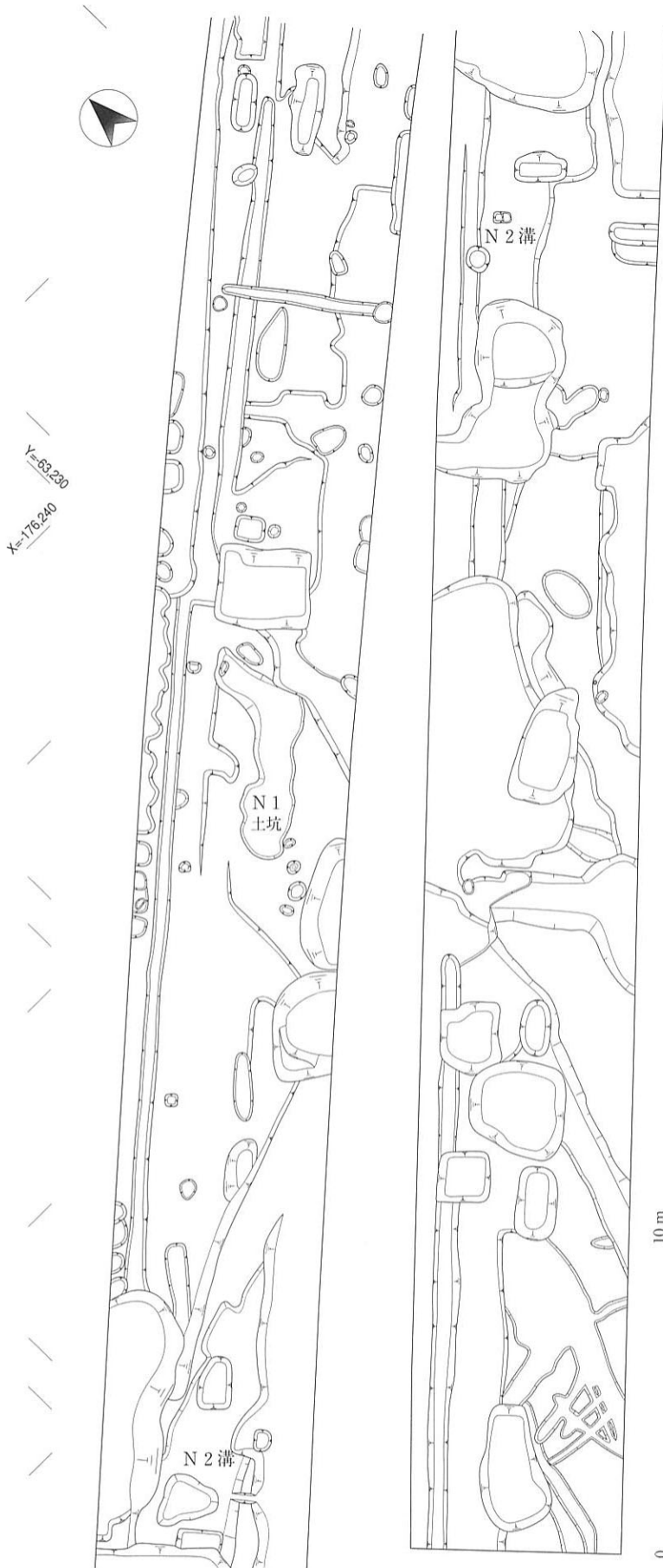


図105 N調査区第1面平面図

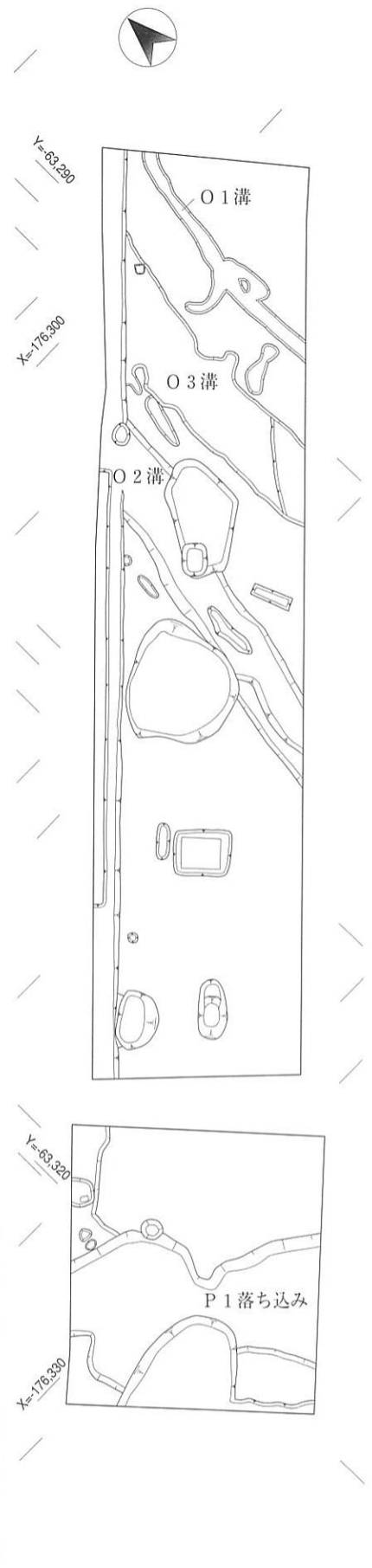


図106 O・P調査区第1面平面図

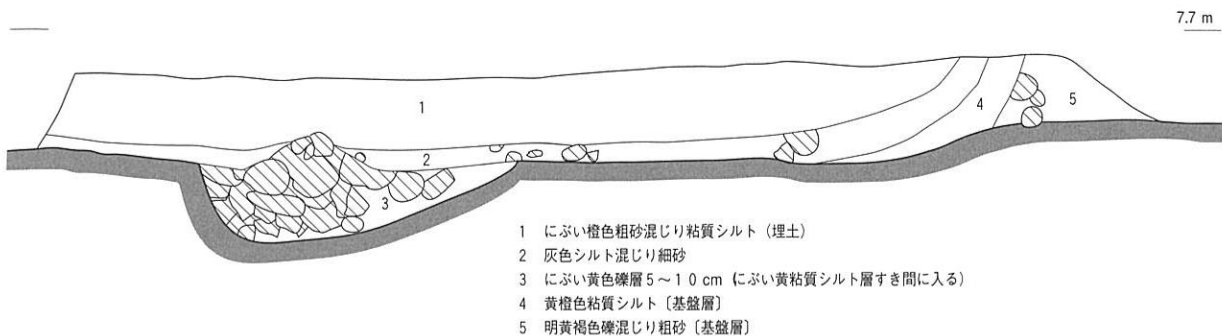


図107 N調査区第1面 N2溝断面図

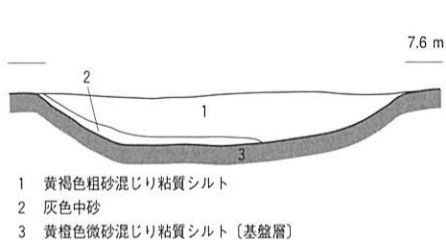


図108 N調査区第1面 N1土坑断面図

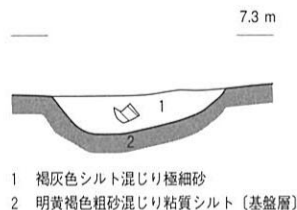


図109 O調査区第1面 O1溝断面図

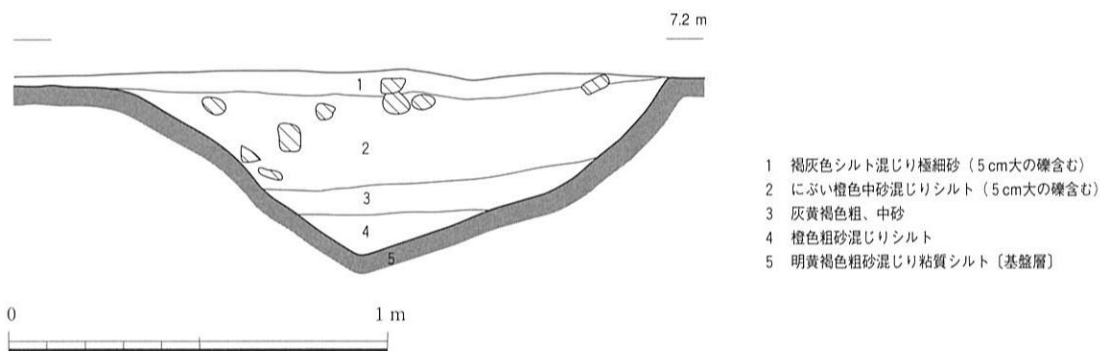


図110 O調査区第1面 O2溝断面図

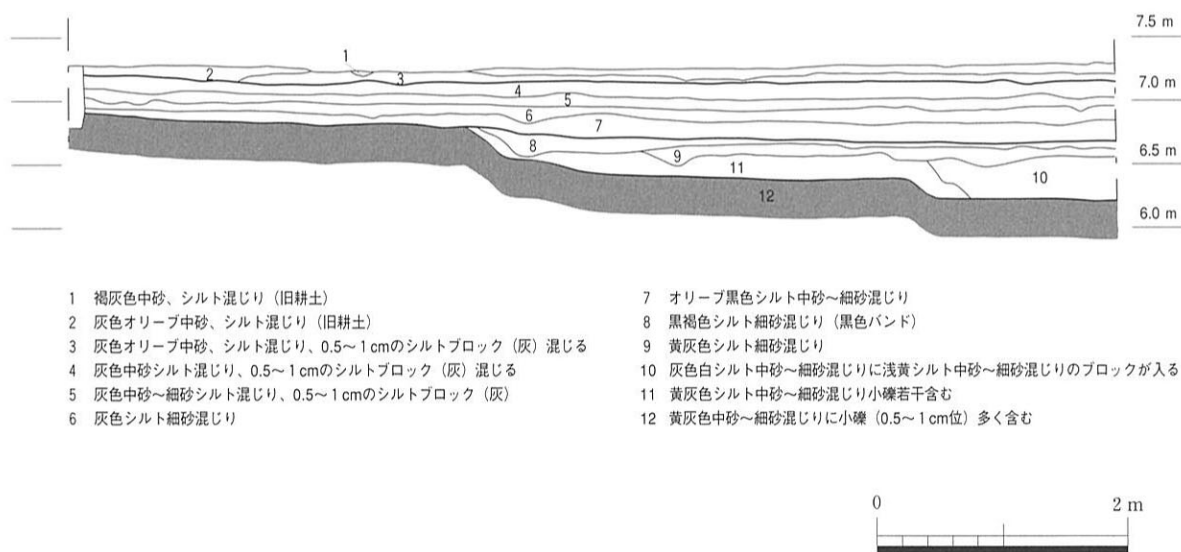


図111 P調査区第1面 P1落ち断面図

いずれの遺構からも遺物は出土しなかったが、包含層中より中世以降の陶磁器の細片が若干出土した。

2 M調査区

M調査区とN調査区は一連の鋼矢板で囲まれた調査区であるが、全長が約180mと長いため、作業の進捗上東側をM調査区、西側をN調査区と二分して調査を行った。

当調査区も円田川左岸からのびる段丘平坦面上に立地する。標高は7.6～7.8mと概ね平坦である。後世の攪乱により中世以降の包含層がほとんど残っていなかったため、線路盛土および旧耕作土層を重機で除去した後、中世以降の包含層を掘削して基盤層上面を検出した。当調査区も調査区の北半部は攪乱が著しく、遺構面の残りは悪かった。検出した遺構は土坑、溝、ピットなどである。

M2ピットは調査区の東端部に位置し、径0.5m、深さ0.2mを測る。

M3ピットはM2ピットの西約5mに位置し、径0.3m、深さ0.3mを測る。これらのピットを検出したものの、掘立柱建物を確定できず、建物が存在した可能性を指摘するにとどまった。

M4溝は南北方向に軸をもつ。幅0.9m、深さ0.2mを測る。

M5溝はM4溝に直交して取りつく溝で、船底状に二段掘りを行う。幅1.7m、深さは最深部で0.4mを測る。

また、調査区の西半部では、南北方向にはしり、東に屈曲するM8溝を検出した。M8溝は緩やかな落ちの中に掘削されており、東側の肩部には畦畔状の盛土を行う。埋土中から東播系須恵器甕(261)、瓦質甕(262)のほかには瓦質すり鉢、土師質マダコ壺の細片などが出土した。

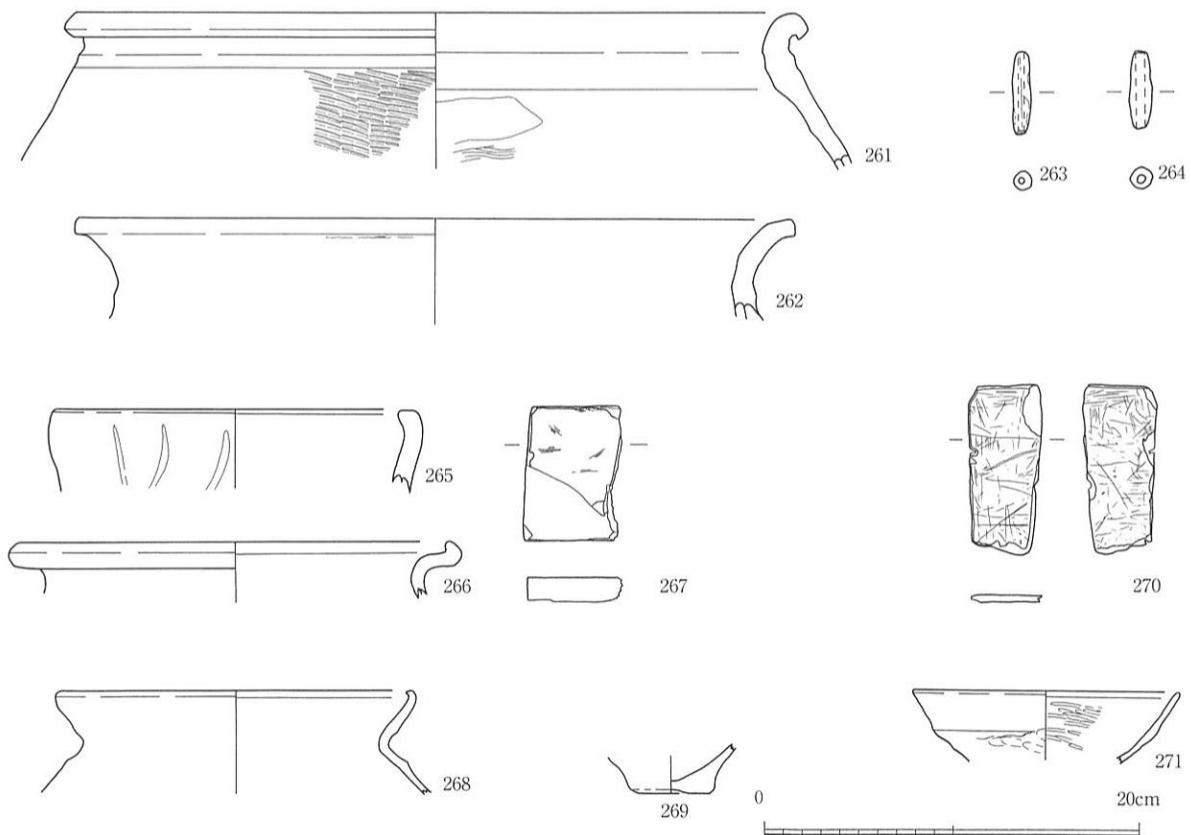


図112 M・N・O・P調査区出土遺物図

なお、包含層中より土錘（263, 264）などが出土した。

3 N 調査区

当調査区は円田川左岸から続く段丘平坦面上および縁辺部にあたるため、調査区の大部分は標高 7.6～7.8 m と概ね平坦であるが、段丘の縁辺部にあたる西端部は、標高 7.1 m と低くなっていくのが看取できる。線路盛土および旧耕作土層を重機で除去した後、中世以降の包含層を掘削して基盤層上面を検出した。当調査区も調査区の北半部は攪乱が著しく、遺構面の残りは悪かった。検出した遺構は土坑、溝、ピットなどである。

N 1 土坑は調査区の東部に位置する。鍵の手状に屈曲する溝状の土坑で、幅 1.2～2.2 m、深さ 0.1 m を測る。

N 2 溝は調査区のほぼ中央部を東北東－西南西方向にはしる。規模は、幅 2.6 m、深さ 0.2 m を測るが、一部土坑状の落ちがみられる。この落ちは一辺 1.5 × 1.8 m、深さ 0.3 m の平面不定形を呈し、埋土中には 5～15cm 大の礫が多量に入る。遺物は瓦質土器、瓦などが出土した。調査区の西端部では北北東－南南西方向とそれに直交する軸をもつ溝群を検出した。耕作に伴う溝と考えられる。

なお、包含層中より瓦質火鉢（265）、土師質羽釜（266）、土師器甕（267）などが出土した。

4 O 調査区

当調査区は円田川左岸から続く段丘平坦面の縁辺部にあたるため、標高 7.0～7.1 m を測る。線路盛土および旧耕作土層を重機で除去し、中世およびそれ以降の包含層を掘削して基盤層上面を検出した。遺構面は後世の攪乱が残るものの、3 条の溝などを検出した。溝はいずれも調査区中央部より東側で検出した。

O 1 溝は調査区の東端部で検出した。幅 0.5 m、深さ 0.1 m を測る。溝はほぼ南北方向に軸をもつ。溝埋土内より中世の土師器小皿の細片と土師質羽釜（268）が出土した。

O 2 溝は O 1 溝の西約 7 m に位置する。規模は幅 1.5～2.1 m、深さ 0.4 m を測る。溝は北北東－南南西方向に軸をもつ。遺物は弥生土器の細片が数点出土したが、図示できたのは弥生時代後期の甕底部（269）1 点だけである。

O 3 溝は、O 1 溝の西 2 m の位置にあり、O 1 溝と並行する。規模は幅 2.2 m、深さ 0.05 m を測る。出土した遺物は須恵器、土師器の細片のみであった。なお、包含層中より粘板岩製の砥石（270）が出土した。

5 P 調査区

当調査区は今回の調査の最南端に位置する。円田川左岸から続く段丘平坦面の縁辺部にあたり、標高は 6.7～6.9 m を測り、南西方向に向かって下がる。線路盛土および旧耕作土層を重機で除去し、中世およびそれ以降の包含層を掘削して基盤層上面を検出した。遺構は P 1 落ち込みを検出した。

P 1 落ち込みは調査区の南西半部を占める。落ち込みの底は平坦であるが、2 段落ちになっており、深さ 0.6 m を測る。P 1 落ち込みから遺物の出土はなかったが、基盤層上面に貼りついた状態で瓦器椀片（271）が出土した。

第5章 まとめ

今回の調査は、和泉山地から派生した中位段丘とその間をはしる開析谷を横断する形で総延長約 1.6 km にわたっており、湊遺跡、上町東遺跡、若宮遺跡、大西遺跡の 4 遺跡に跨って行くことができた。そこで、今回の調査成果を各遺跡の立地を踏まえながらまとめとする。

まず、湊遺跡であるが、中位段丘面の間にある開析谷を流れる佐野川が形成する沖積地に立地する。昭和 56・57 年に泉佐野市教育委員会が行った調査では、開析谷の埋土中から弥生時代末から古墳時代初頭にかけての製塩土器が多量に出土した。当センターが平成 10～12 年に行った調査でも、脚台 2 式の完形で未使用の製塩土器などが出土している。今回の調査でも、開析谷の続きと谷の肩部を D 調査区の南端部で検出した。開析谷は B 調査区で基盤層の高まりが確認でき、2 本に分かれることが確認できたが、前回の調査によるとこの 2 本の谷は海側で結合することがわかっている。しかし、この谷は調査掘削限界である標高 4.0 m まで掘り下げたが、底を検出するには至らなかった。また、部分的にはあるが、谷を南海本線敷設時の盛土で埋めており、今回の調査でも、この盛土が調査掘削限界を越えて存在している箇所も認められたため、谷の全容を解明するには至らなかった。但し、A 調査区の北端部においては、弥生時代末から古墳時代初頭にかけての遺構面を検出した。遺構面の土壌化はあまり顕著ではなく、検出した遺構も不定形の土坑や自然流路などで、開析谷が埋没する過程の中で、一時的に安定した段階に、人々が活動を行った痕跡であったと考えられる。不定形土坑や自然流路の中から、脚台 2 式の製塩土器片や弥生土器片などが出土した。

次に、上町東遺跡であるが、湊遺跡の立地する開析谷は、D 調査区の南端部で検出した約 4 m の比高差をもつ段丘崖によって収束する。その南側には中位段丘面が広がっており、その中位段丘平坦面上に上町東遺跡は展開する。この中位段丘平坦面は、約 500 m 南西をはしる円田川が形成する開析谷まで広がっており、上町東遺跡の実質的な範囲も同じ範囲を示す。上町東遺跡は平安時代末から鎌倉時代にかけての集落跡で、既往の調査においても、掘立柱建物群や屋敷地を区画する溝などが検出されている。今回の調査においても、ピット、溝、土壙墓、土坑などを検出した。まず、ピットについては、既往の調査で検出した掘立柱建物を構成するピットが含まれる。次に溝であるが、既往の調査成果から考えて、屋敷地を区画する溝であったと考えられる。これらの溝の中からは、瓦器、土師器、須恵器、白磁等の細片が出土した。そして、今回の調査における大きな成果として、土壙墓を 3 基検出したことが挙げられる。土壙墓は、いずれも隅丸長方形の掘方をもつもので、うち 2 基には完形の白磁碗が副葬されていた。これらの土壙墓は、約 120 m の間に 3 基しか分布していないことから考えて、いわゆる墓地のように限られた空間の中につくられたものではなく、屋敷墓としての性格が強いと考えられる。このように区画溝で囲まれた敷地内に掘立柱建物と屋敷墓がつくられる集落は、当遺跡より 1 km 東に位置する上町遺跡にもみられるもので、興味深い。

若宮遺跡は、円田川の左岸に広がる中位段丘面上に立地する。南海本線泉佐野駅舎部分にあたるため、広い範囲で調査を行った。若宮遺跡の特徴は、東から西へと大きく 5 つに区切って述べることができる。まず、G 調査区にあたる遺跡の東端部は、円田川の開析谷および、その左岸から塩汲道に比定されている現在駅の東側を南北方向に通る道路までの幅約 30 m の区間である。円田川の開析谷には砂礫層が厚く堆積し、遺構、遺物の出土は見られなかった。また、左岸に広がる段丘平坦面上は、後世の削平が著しく遺構面の残りが悪かったが、井戸、不定形土坑、溝状遺構などを検出した。しかし、時期はいずれ

も中世以降のものである。次に、塩汲道から西へ約 150 m で検出した、塩汲道と併行して南北方向に通る道路状遺構までの、主に H 1～3 調査区にあたる区間で、2 条の区画溝を検出した。これらの区画溝は、幅約 2.5～3.5 m、深さ約 0.4～0.6 m を測るもので塩汲道に代表されるこの地域の地割りに則って掘削されている。この区画溝は、焼土や大量の瓦で埋められており、その堆積状況を観察する限り、区画溝の内側に建っていた建物が焼失した後、瓦や焼土などで一気に埋められて整地されたものと考えられる。出土した瓦は大量の丸瓦、平瓦のほか、軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦、道具瓦などの出土もみられた。しかし、特筆すべき点として、「檀波羅蜜寺」と陽刻もしくは陰刻された平瓦が出土したことが挙げられる。この刻印瓦は、若宮遺跡周辺でも出土がみられるが、多くの瓦と共に出土したのは稀で、この区画溝の内側に存在していた建物が、檀波羅蜜寺と密接な関係をもった寺院であった可能性が考えられる。3 番目の区画は H 4・5 調査区にあたる、道路状遺構から南海泉佐野駅の中心部付近までの約 180 m である。この駅の中心部分は地下連絡通路が通っているため、正確な範囲は不明であるが、この連絡道を挟んで、遺構面の様相が異なることから、何らかの区画境が存在したものと考えられる。この区画では道路状遺構の西側に土壙墓と考えられる円形の土坑が 7 基検出された。これらの土坑は道路状遺構に併行して等間隔に並んで掘られており、道路に沿って造られた墓地であった可能性がある。いずれの土坑からも遺物の出土はなかったが、中世もしくはそれ以降のものと考えられる。その土坑群の西側には、中世以降の水田が広がる。水田は、周辺の地割りに則って畦畔を構築する。4 番目の区画としては、南海泉佐野駅の中心部付近から西に約 180 m に掘削された幅 2.1 m、深さ 1.1 m の掘割状の溝までの範囲に求められる。この区画では、中世後半代の溝群と、中世以降の土壙墓群を検出した。中世後半代の溝群は、幅約 1～3 m、深さ約 0.2 m のもので、やはり周囲の地割りに則って通っており、土師皿がまともって出土した溝もみられた。溝は約 4 m 間隔で併行にはしっており、いずれの溝も西端は、直交する掘割状の溝に規制される。中世以降の土壙墓群は確実なものだけでも 41 基を数える。円形の平面プランを呈するいわゆる座棺を埋葬主体とするタイプのものがほとんどであった。ただ、1 基のみ長方形の平面プランをもつものを検出した。この土壙墓は、棺床に礫を敷き詰めて棺台としていたが、その棺台には石臼の破損品の転用もみられた。これらの土壙墓群の分布範囲も、掘割状の溝付近までに収まっており、それより西側へは広がらない。I 4～K 調査区にかけての範囲は、若宮遺跡の西端部にあたり、大西遺跡と接しているが、考古学的な遺跡の境目は不明であった。この部分は堆積も少なく、中世以降の耕作痕跡が基盤層にまで達しているなど、後世の攪乱が著しいことから、遺構の残りは悪かった。唯一、中世の土壙墓を 1 基検出したのみである。土壙墓は、径 1.0 m、深さ 0.07 m を測る、円形の平面プランを呈す。副葬品として短刀が一振り出土した。この土壙墓の位置付けに関しては、周囲の資料の蓄積を待つ必要がある。

大西遺跡は L～P 調査区にあたり、若宮遺跡から続く中位段丘平坦面上に立地し、遺跡の南西端は段丘の縁辺部に規制される。大西遺跡は中世の集落遺跡として認知されていたものだが、若宮遺跡の西端部と同様、後世の攪乱が著しく、遺構の残りは悪かった。ただ、調査区南西端で中世の落ち込みを、段丘縁辺部では弥生時代後期の溝を 2 条検出した。溝は段丘の縁辺部を巡るようにはしるが、性格に関してはデータの蓄積を待ちたい。但し、今回の調査では、結果的に 1.6 km もの長いトレンチを開けた形になったが、その調査区の両端、段丘の縁辺部に弥生時代後期の遺構や遺物が見つかったことは、今後この地域の弥生時代の古環境復原にとって、重要なデータとなりうると言える。

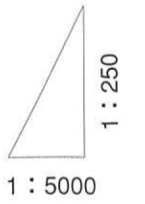
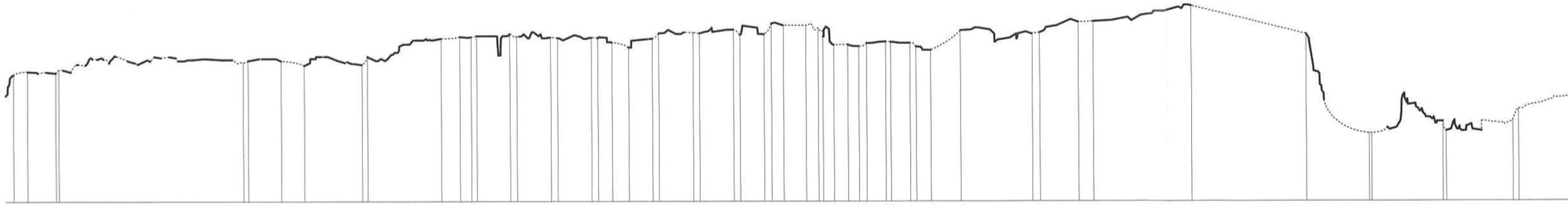
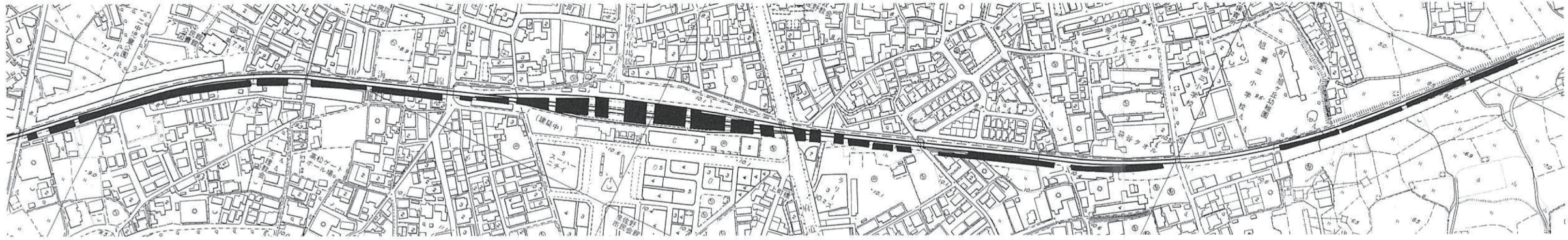


図113 調査区基盤層上面断面図 1 : 2,000

【参考文献】

- 『泉佐野市所在遺跡発掘調査概要Ⅰ - 湊遺跡・三軒屋遺跡・船岡山B地点遺跡-』1981 泉佐野市教育委員会
- 『上町東遺跡 - 97 - 3区の調査-』 1999 泉佐野市教育委員会
- 『上町東遺跡 - 98 - 1区の調査-』 1999 泉佐野市教育委員会
- 『若宮・上町東遺跡 - 南海本線（泉佐野市）連続立体交差事業に伴う発掘調査-』2001 泉佐野市教育委員会
- 『泉佐野市湊・旭町・大宮町所在 湊遺跡他』（財）大阪府文化財センター調査報告書 第87集 2003 財団法人 大阪府文化財センター

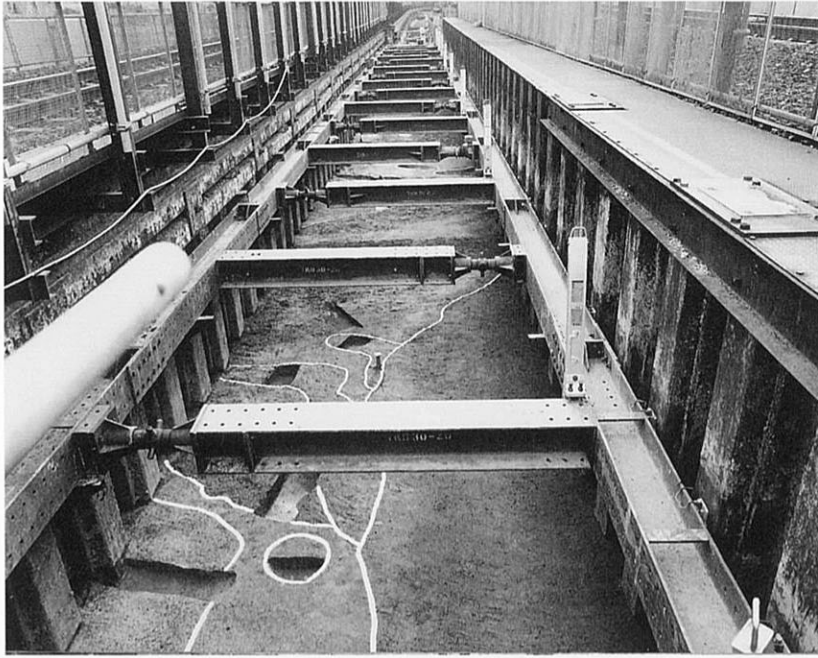
報 告 書 抄 録

ふりがな	いずみさのしみなと・あさひちよう・おおみやちよう・わかみやちよう・おおにしちようしょざい みなといせきほかに
書 名	泉佐野市湊・旭町・大宮町・若宮町・大西町所在 湊遺跡他Ⅱ
副書名	南海本線（泉佐野市）連続立体化事業（第1～3工区）に伴う発掘調査報告書
巻 次	
シリーズ名	（財） 大阪府文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第111集
編著者名	村上富喜子 後藤信義 佐伯博光
編集機関	（財） 大阪府文化財センター
所在地	〒590-0105 大阪府堺市竹城台3丁21番4号 Tel 072-299-8791 FAX 072-299-8905
発行年月日	2004年3月31日

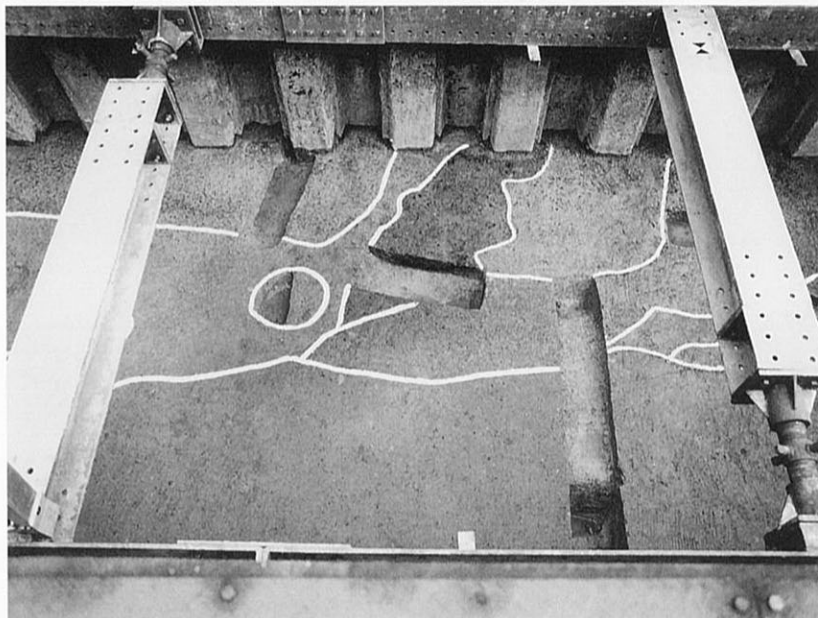
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° / ′	° / ′			
みなと 湊	おおさかふ 大阪府 いずみさのし 泉佐野市 みなと 湊	27213	38	34° 24′ 40″	135° 19′ 40″	2002年 9月 ～ 2004年 3月	7,200	南海本線連続立体化事業
うえまちひがし 上町東	おおさかふ 大阪府 いずみさのし 泉佐野市 あさひちよう・おおみやちよう 旭町・大宮町		85	34° 24′ 34″	135° 19′ 31″			
わかみや 若宮	おおさかふ 大阪府 いずみさのし 泉佐野市 おおみやちよう・わかみやちよう 大宮町・若宮町		83	34° 24′ 30″	135° 19′ 20″			
おおにし 大西	おおさかふ 大阪府 いずみさのし 泉佐野市 わかみやちよう・おおにしちよう 若宮町・大西町		91	34° 24′ 28″	135° 19′ 18″			

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
湊	集落	弥生時代～中世	溝、土坑	弥生土器	
上町東	集落	中世	溝、土坑、土墳墓	土師器、瓦器、輸入磁器	
若宮	集落	中世	溝、土坑	土師器、陶磁器、瓦	「檀波羅蜜寺」の刻印のある平瓦多数出土
大西	集落	古墳時代～中世	溝、土坑	土師器、陶磁器	

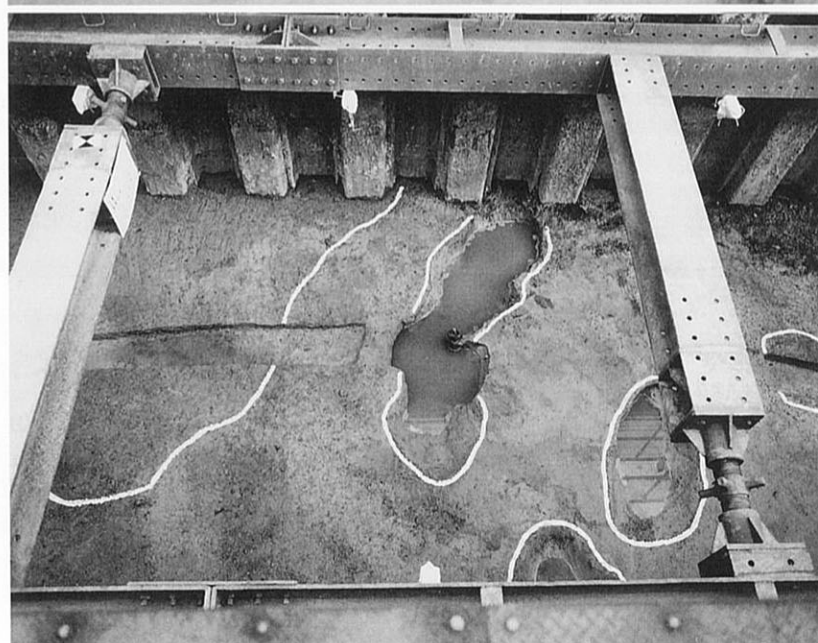
写真図版



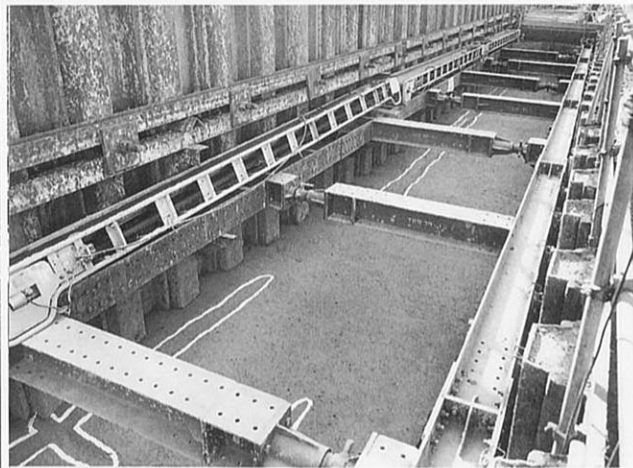
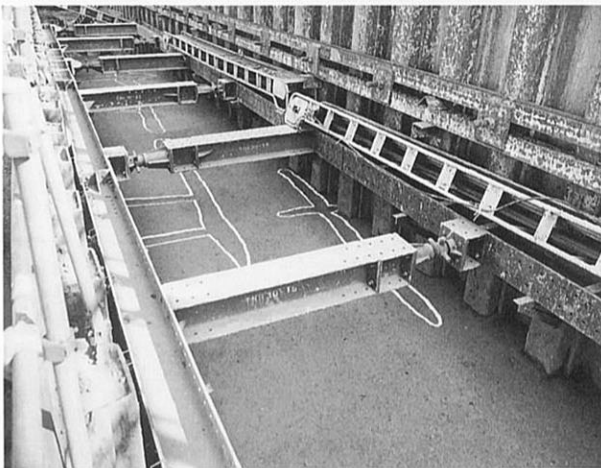
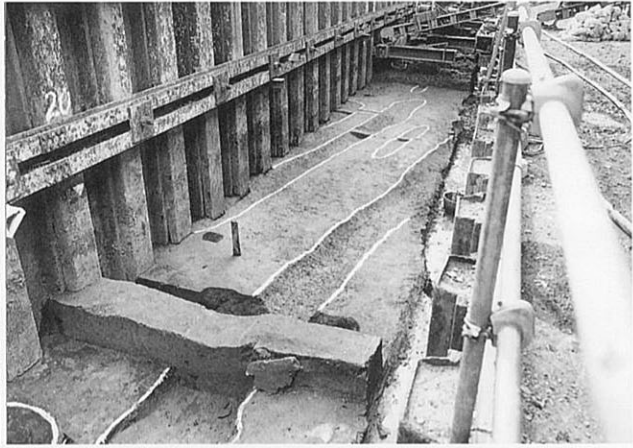
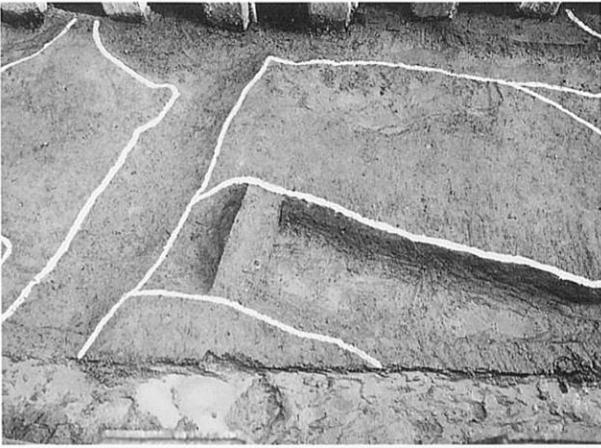
1 A調査区最終掘削面
全景（北東から）



2 A調査区最終掘削面
（北西から）



3 A調査区最終掘削面
（北西から）

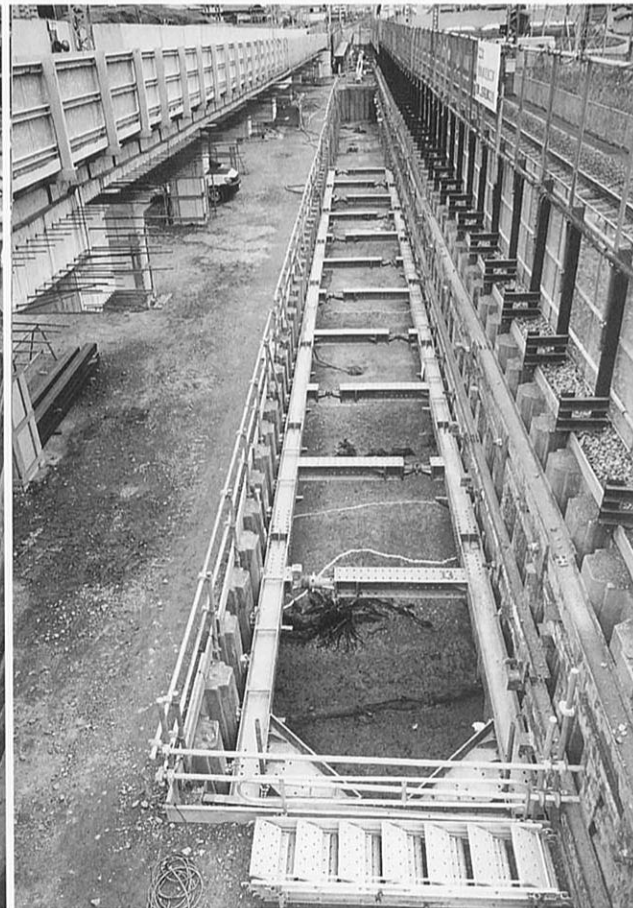


1 B調査区第1面 (北西から)

2 B調査区第1面全景 (北東から)

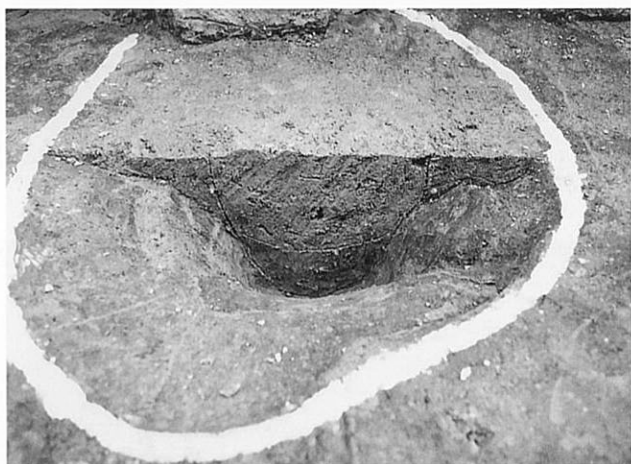
3 B調査区第1面全景 (南西から)

4 B調査区第1面全景 (北東から)



5 B調査区第2面全景 (北東から)

6 B調査区第2面全景 (南西から)



1 B調査区第1面B1土坑断面(北西から)

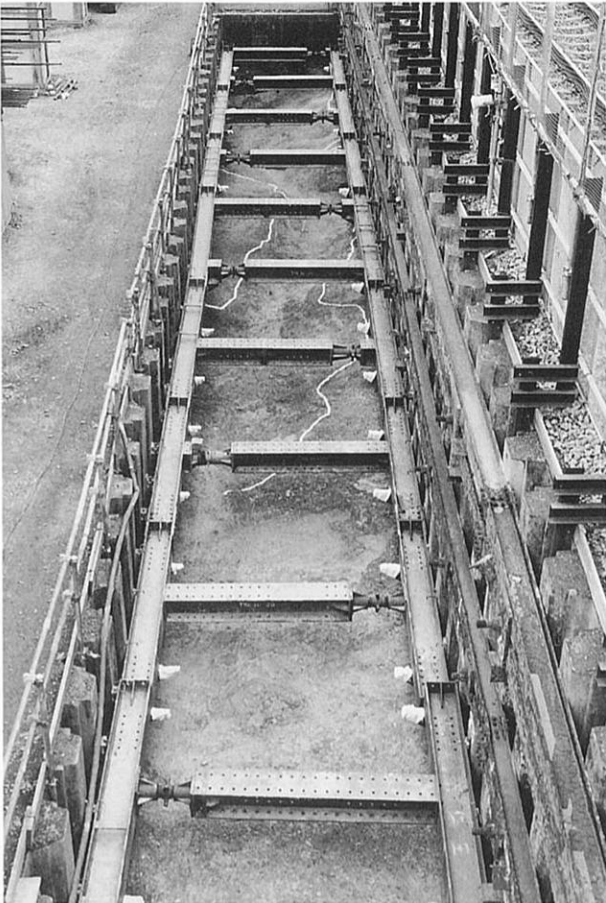
2 B調査区第1面B1土坑完掘状況(南西から)

3 B調査区第2面土器溜まり(南東から)

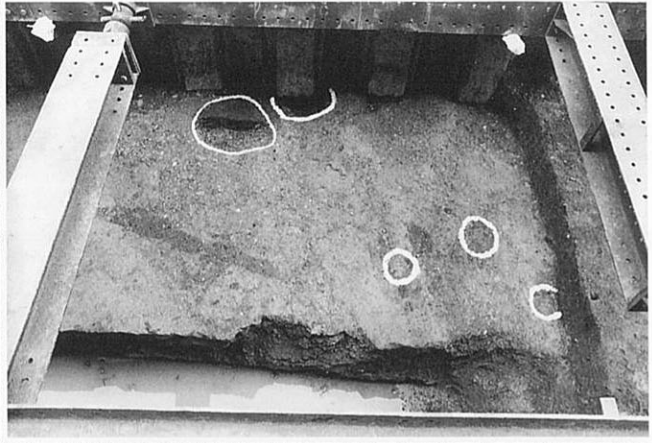
4 B調査区第2面風倒木検出状況(北西から)



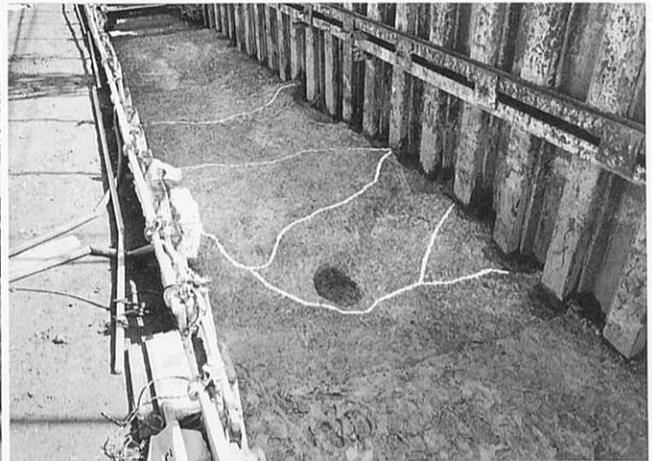
5 C・D調査区遠景(南西から)



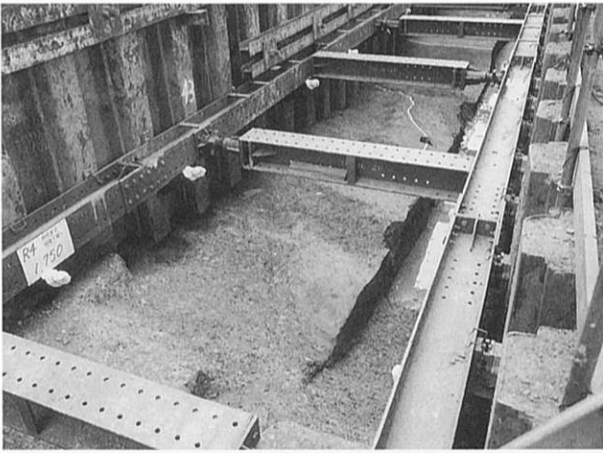
1 C調査区第1面全景（南西から）



2 C調査区第1面C1溝、C2土坑（北西から）



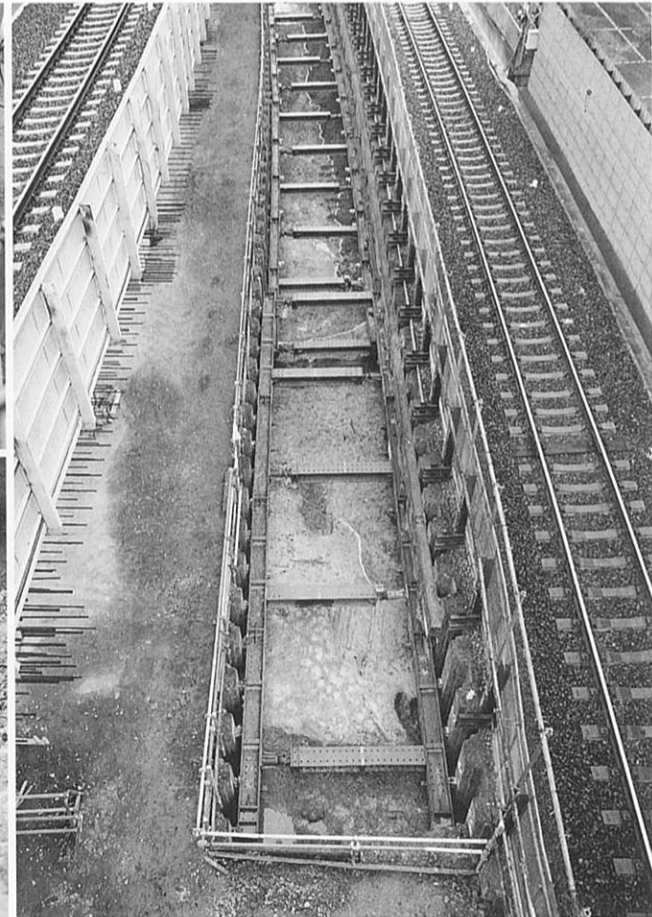
3 C調査区第1面道路状遺構（南西から）



4 C調査区第1面C1溝（北東から）



5 C調査区第1面C1溝断面（東から）



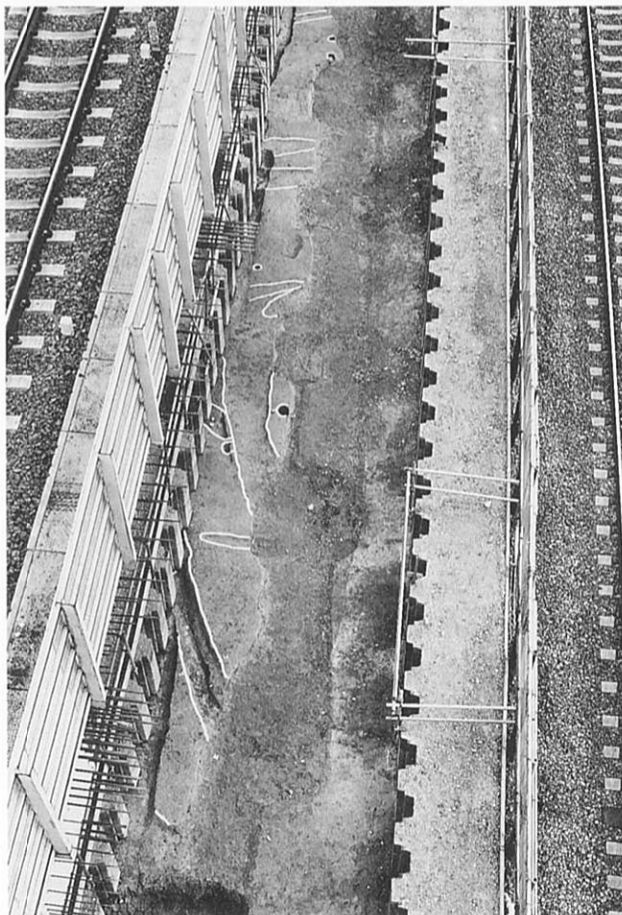
6 D調査区第1面全景（南西から）



1 E調査区第1面全景（北東から）



2 E調査区第1面全景（南西から）



3 E調査区第1面全景（南西から）



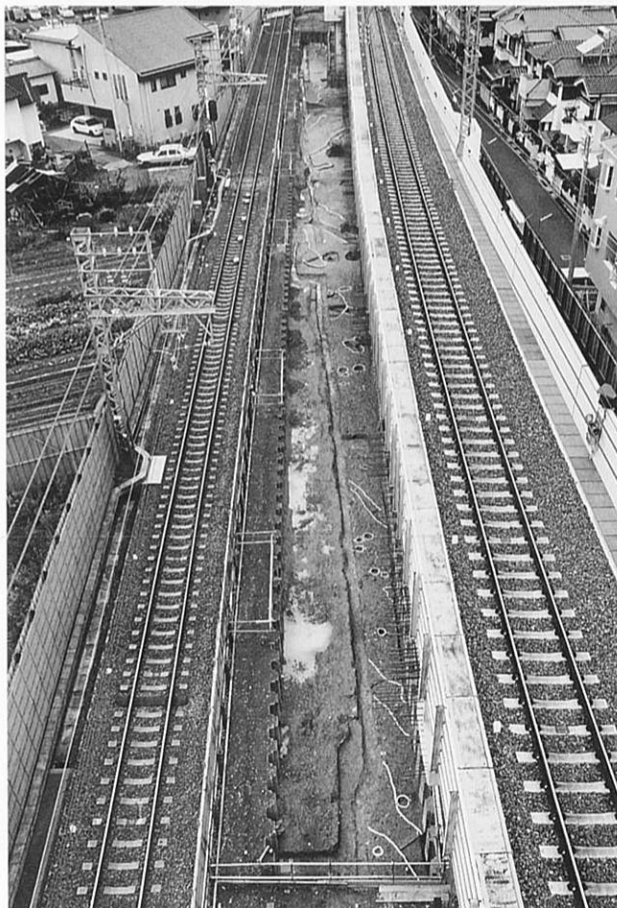
4 E調査区第1面E2溝遺物出土状況（北から）



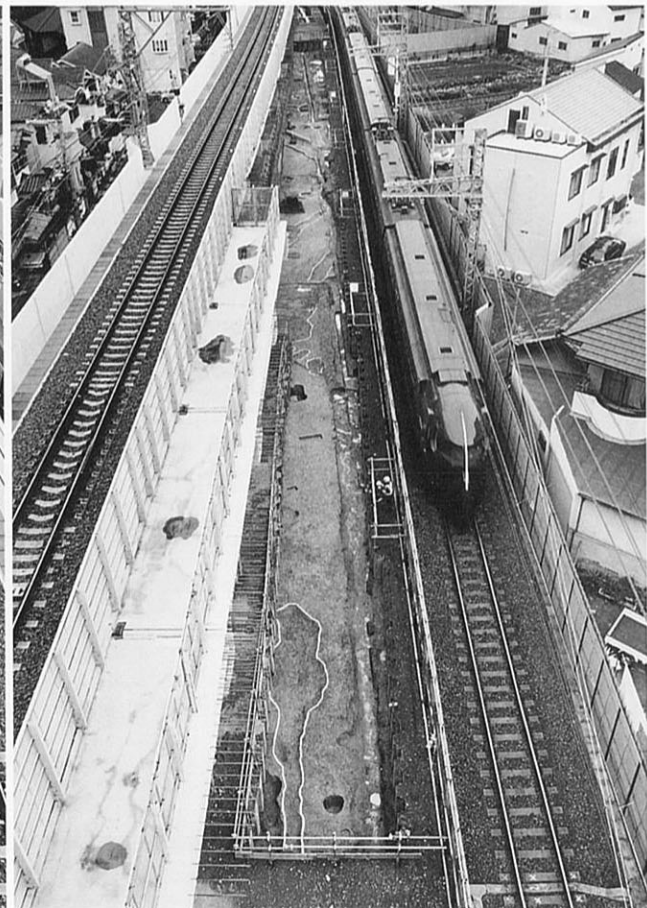
5 E調査区第1面E24土坑（北から）



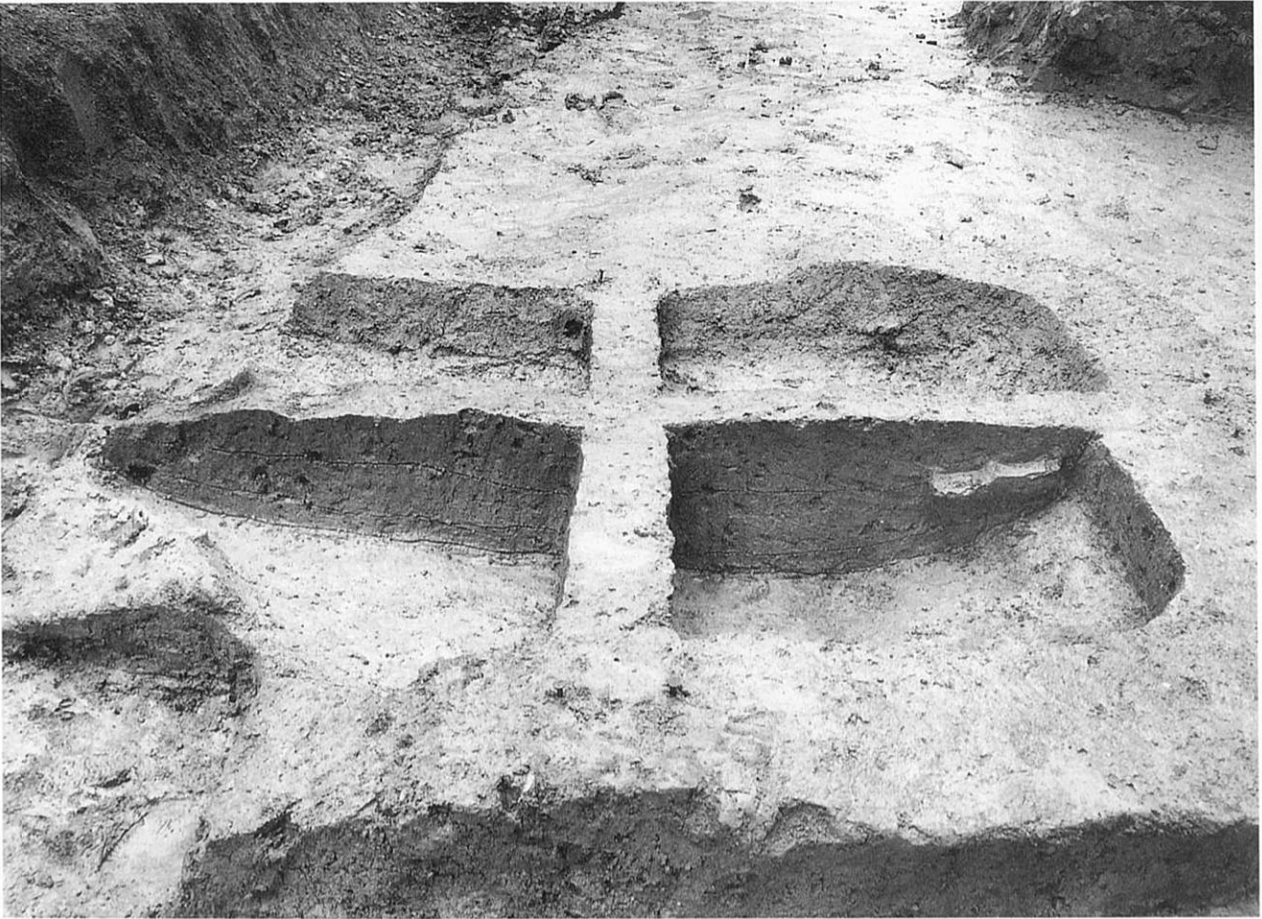
1 E調査区第1面E22溝遺物出土状況(東から)



2 F調査区第1面全景(東から)



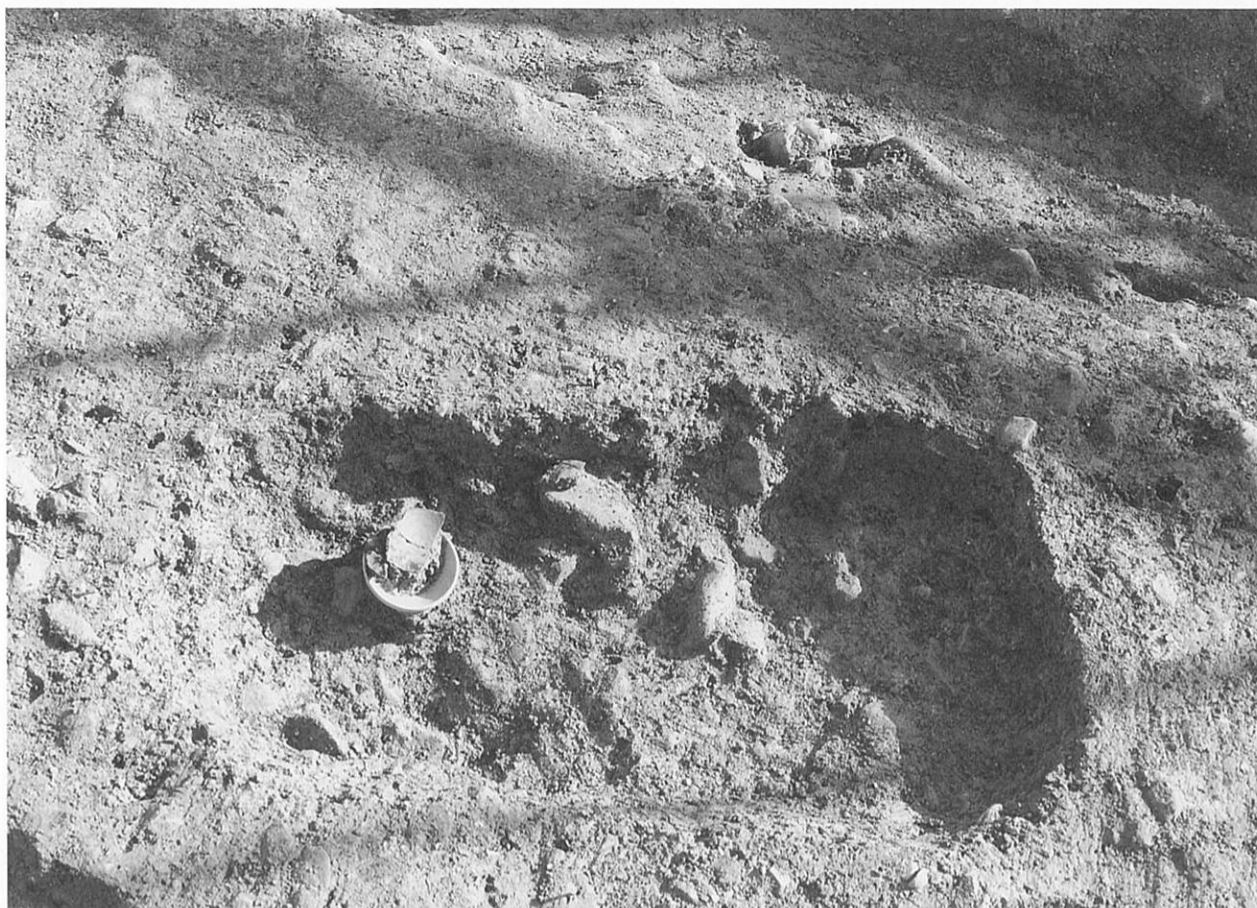
3 F調査区第1面全景(西から)



1 F調査区第1面F7土墳墓断面（北東から）



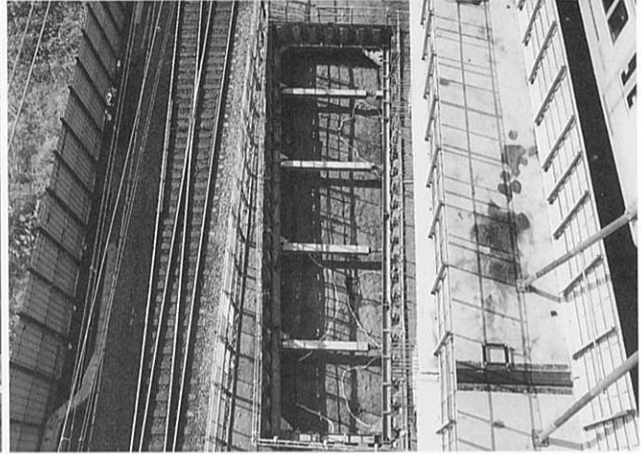
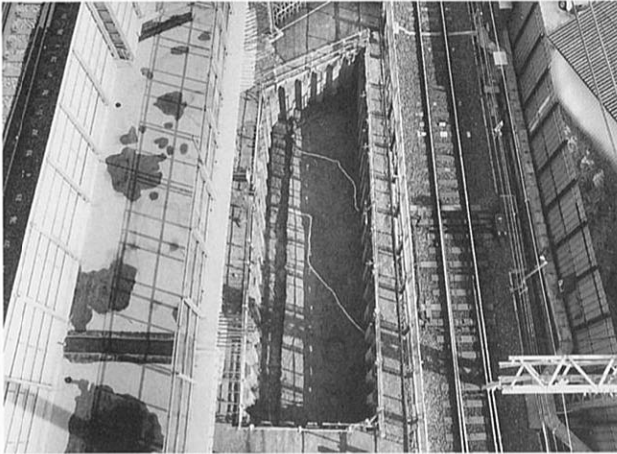
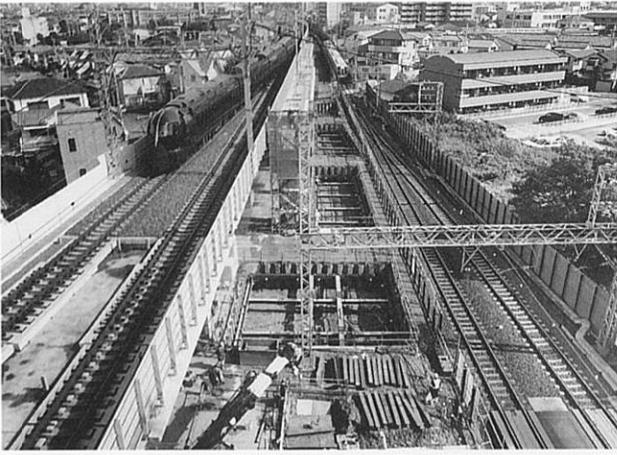
2 F調査区第1面F7土墳墓完掘状況（北東から）



1 F調査区第1面F31土墳墓完掘状況（東から）



2 F調査区第1面F31土墳墓土器出土状況（東から）

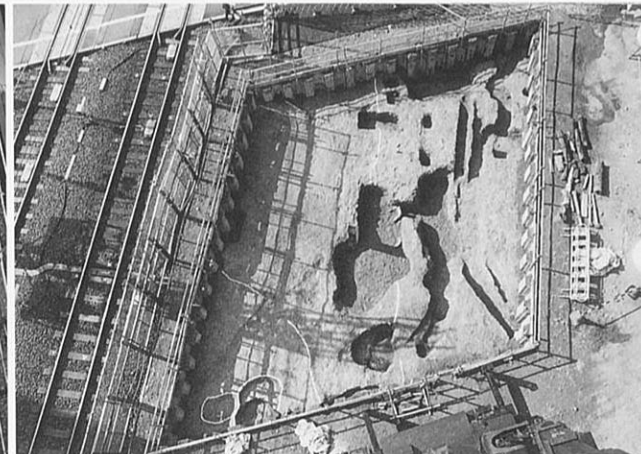
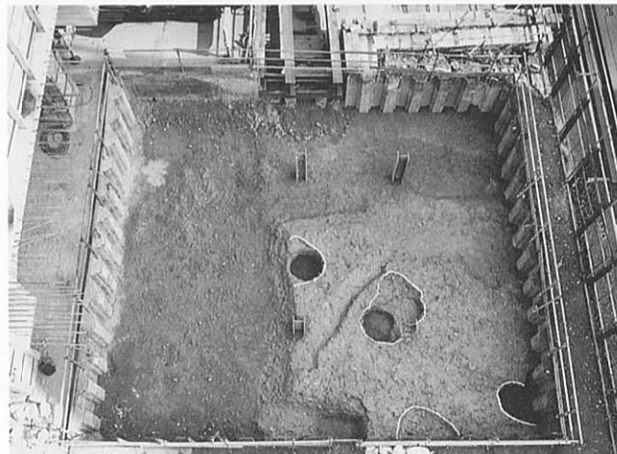
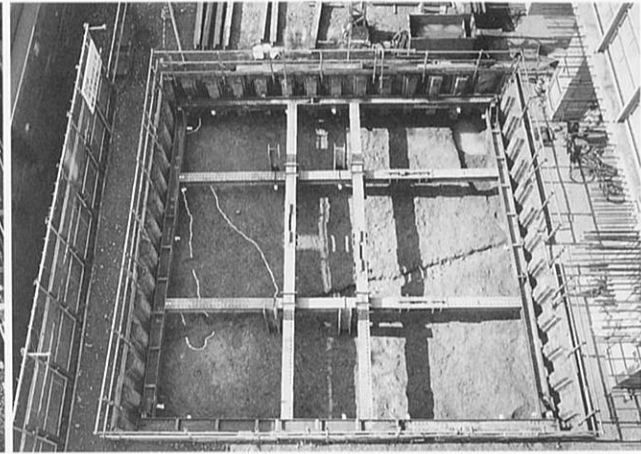
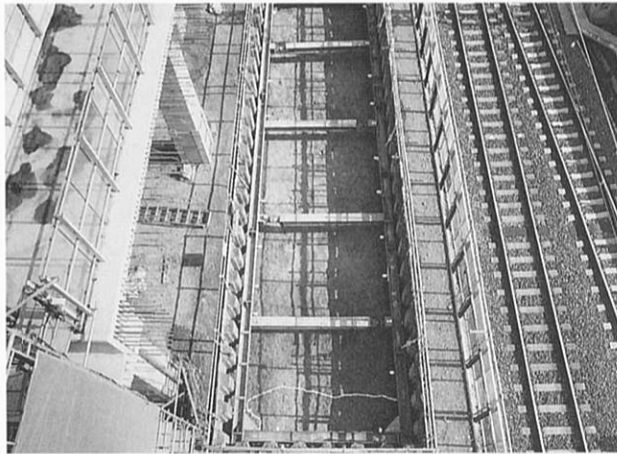


1 G1～4調査区遠景（西から）

2 G4～6調査区遠景（東から）

3 G1調査区第1面全景（西から）

4 G2調査区第1面全景（東から）



5 G3調査区第1面全景（西から）

6 G4調査区第1面全景（東から）

7 G5調査区第1面全景（西から）

8 G6調査区第1面全景（東から）



1 H1調査区第1面全景（西から）



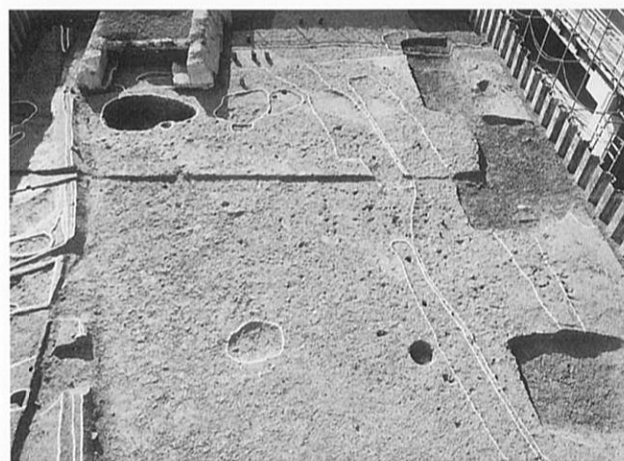
2 H2調査区第1面全景（西から）



1 H3調査区第1面全景（西から）



2 H4調査区第1面全景（東から）



3 H5調査区第1面全景（東から）



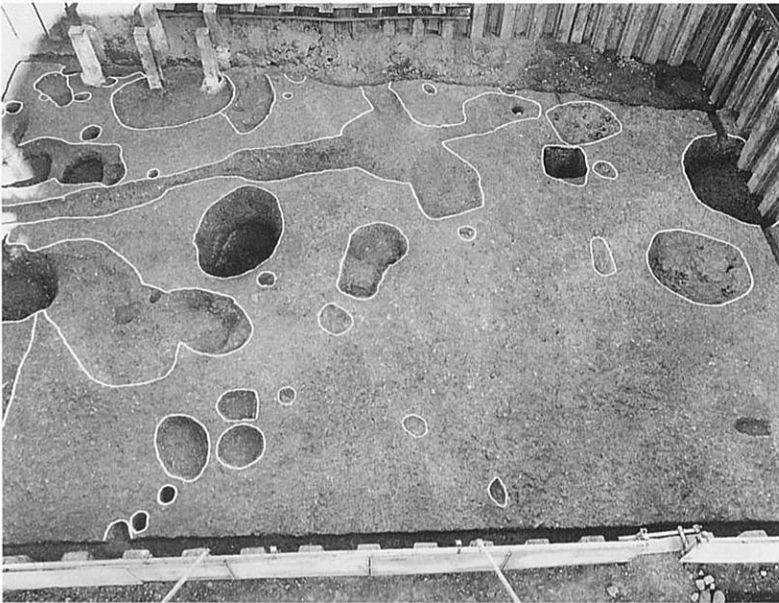
4 H5調査区第1面H15土坑（東から）



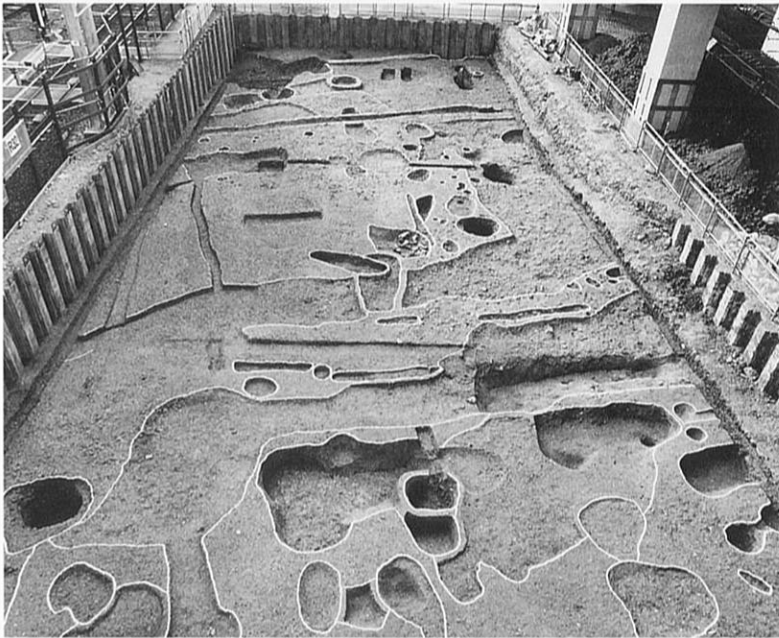
5 H5調査区第1面H15土坑遺物出土状況（北から）



6 H2調査区第1面H8土坑・H9溝（北から）



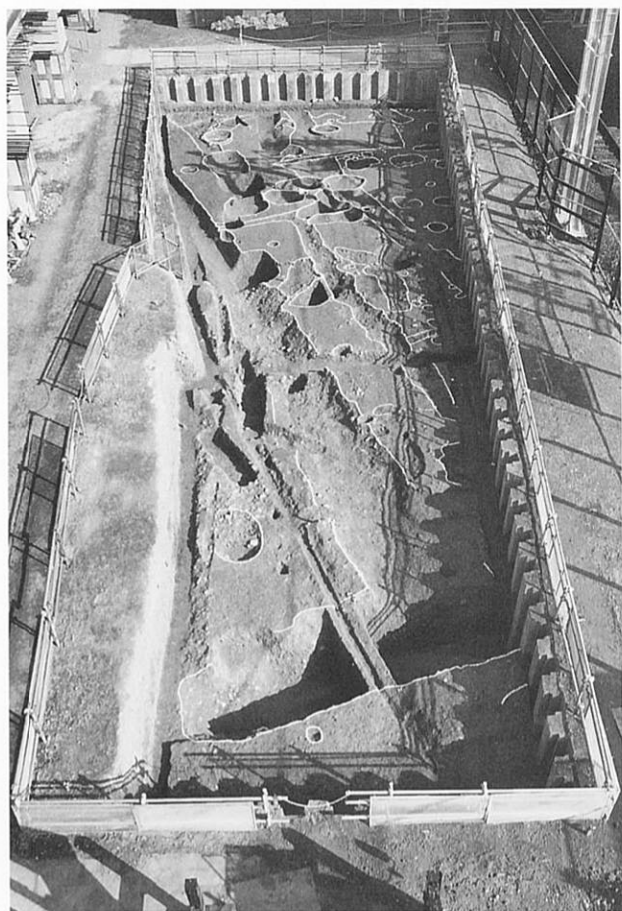
1 I 1 調査区第1面全景 (西から)



2 I 2 調査区第1面全景 (東から)



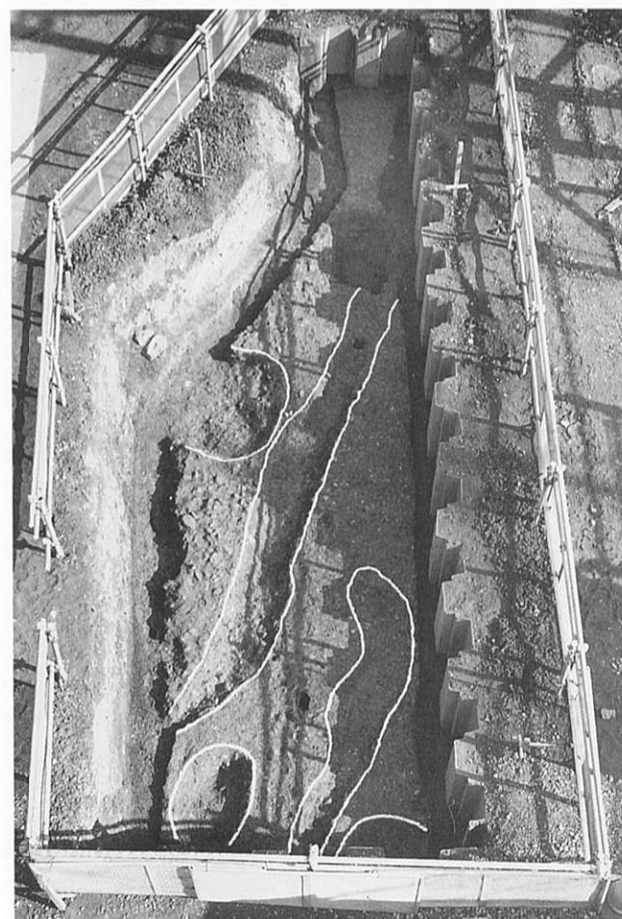
3 I 3 調査区第1面全景 (東から)



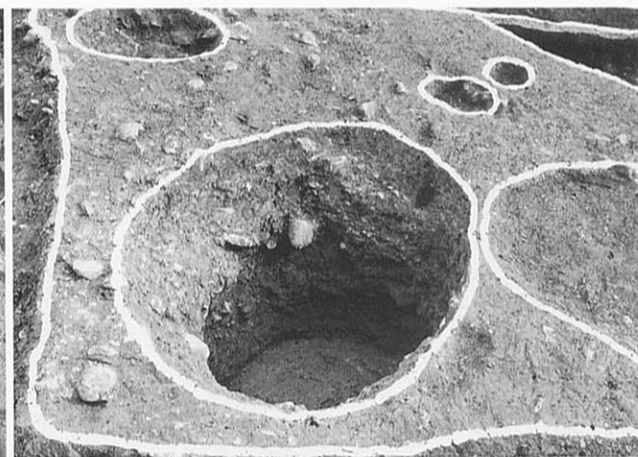
1 I 3 調査区第1面全景 (西から)



2 I 4 調査区第1面全景 (西から)



3 I 5 調査区第1面全景 (西から)



4 I 2 調査区第1面 I 11 井戸 (北西から)



5 I 3 調査区第1面 I 1 溝 (西から)



1 I-3調査区第1面I-3溝土器出土状況(西から)



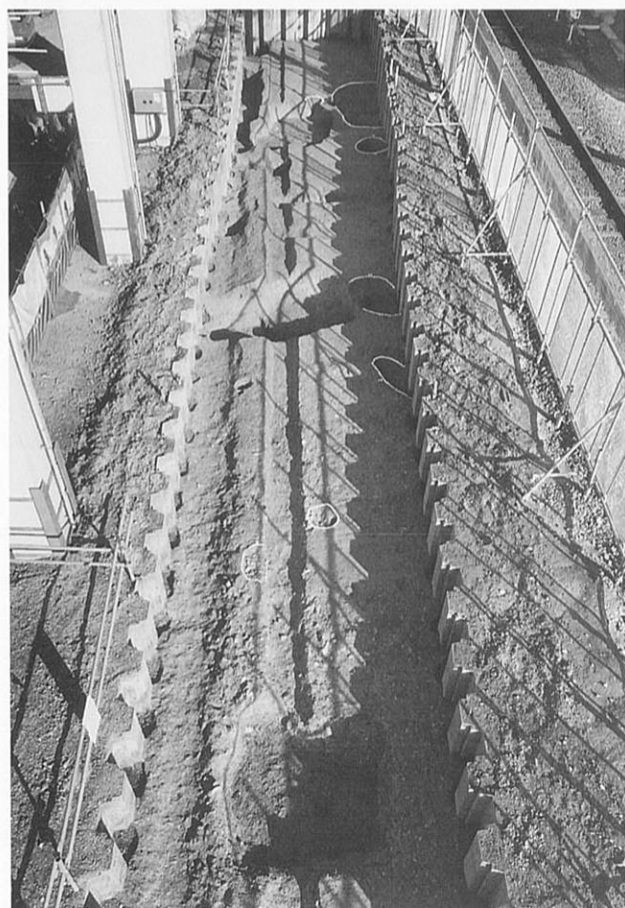
2 I-3調査区第1面I-3溝土器出土状況(南から)



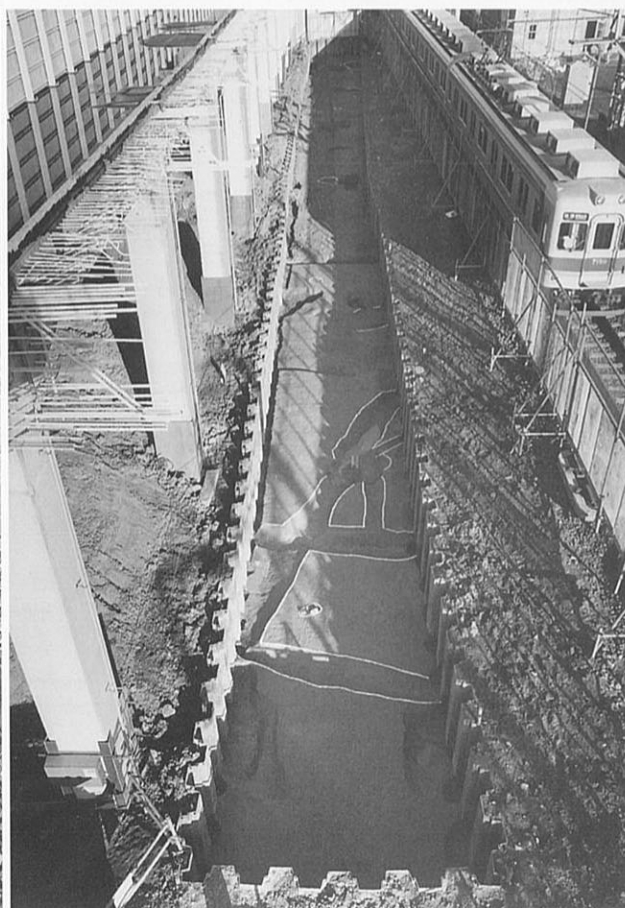
3 I-3調査区第1面I-20土坑墓(南西から)



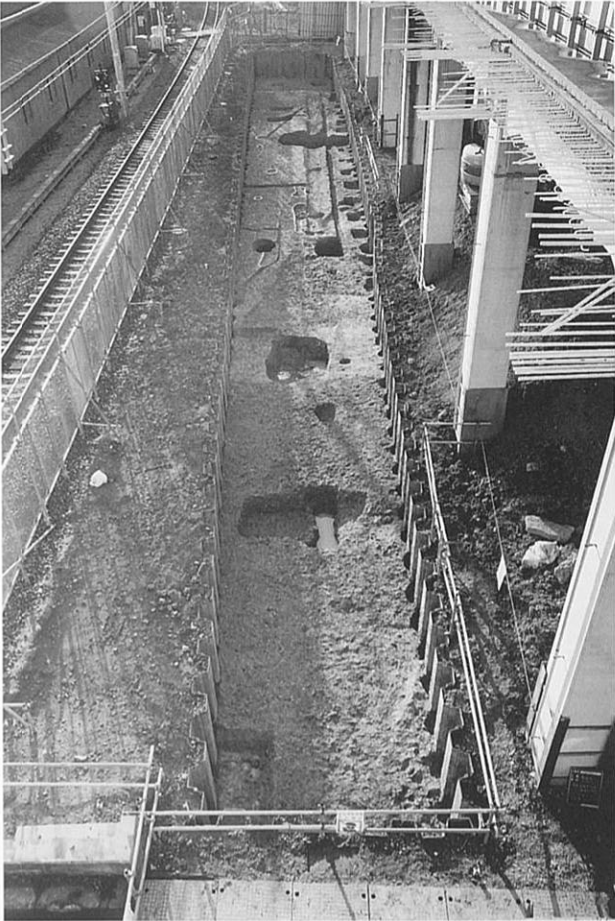
4 I-3調査区第1面I-22土坑墓(南から)



5 J調査区東半部第1面全景(西から)



6 J調査区西半部第1面全景(西から)



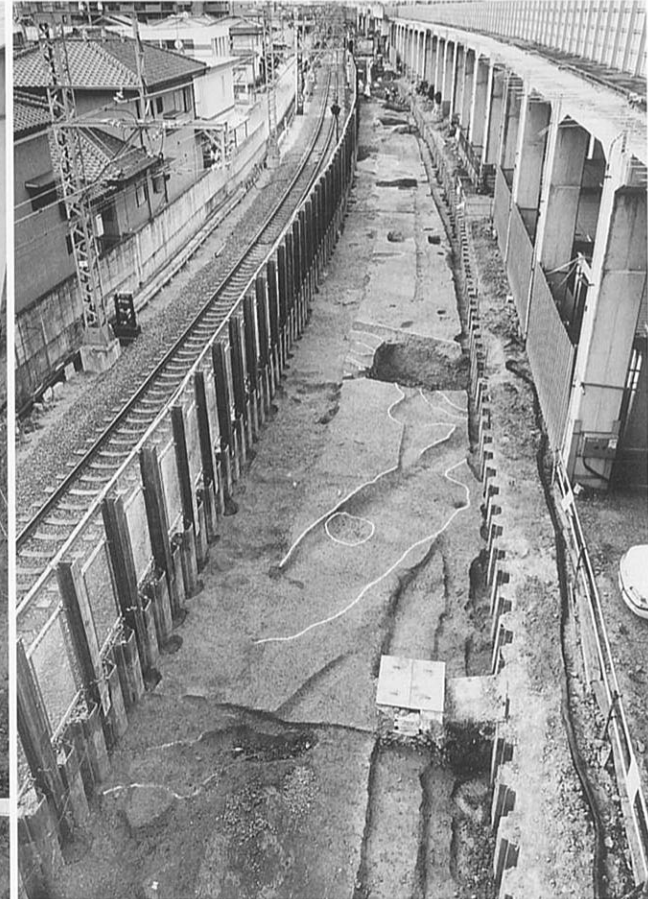
1 K調査区第1面全景（東から）



2 L調査区第1面全景（南西から）



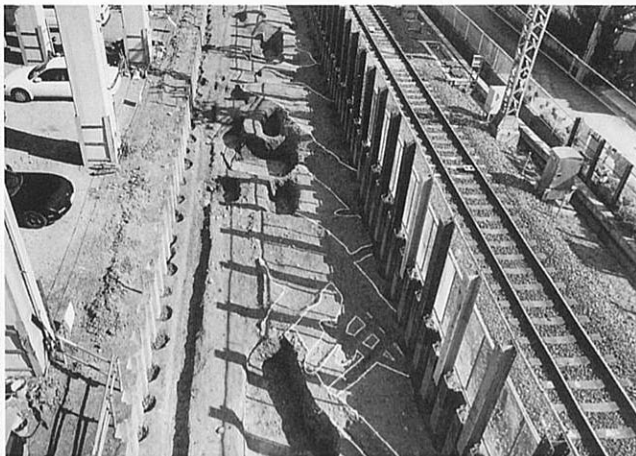
3 M調査区第1面全景（北東から）



4 M・N調査区第1面全景（北東から）



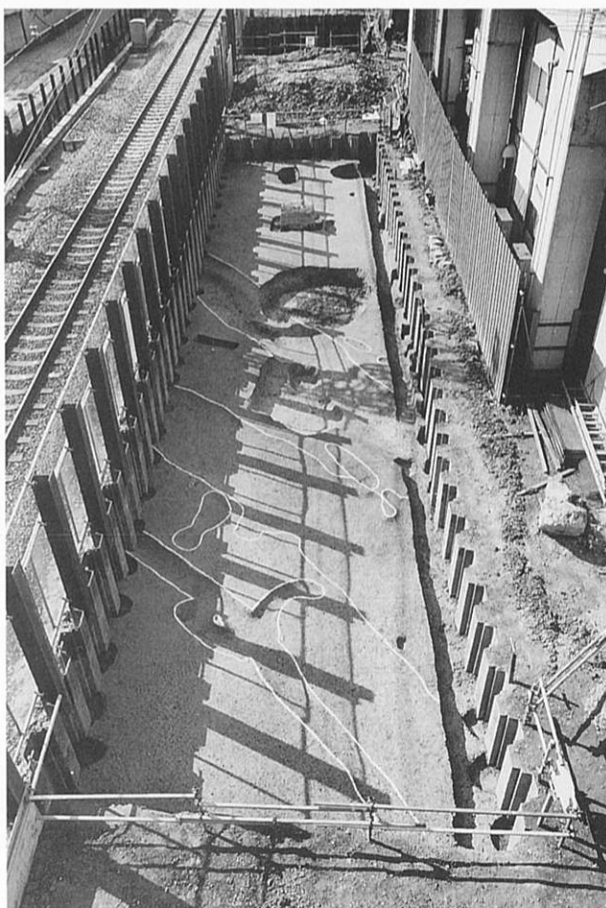
1 N調査区第1面全景（南西から）



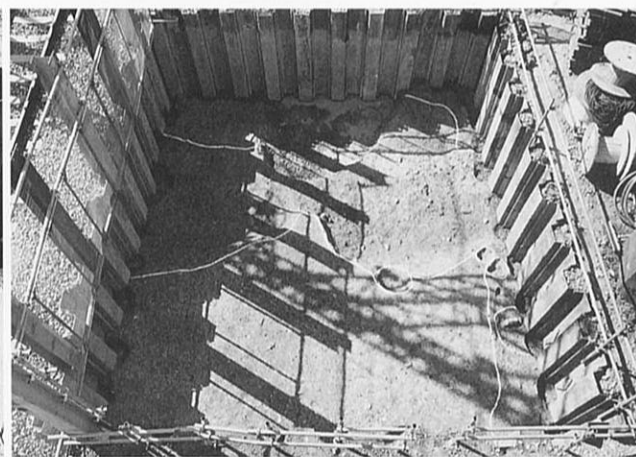
2 N調査区第1面全景（南西から）



3 O調査区第1面O2溝断面（南から）



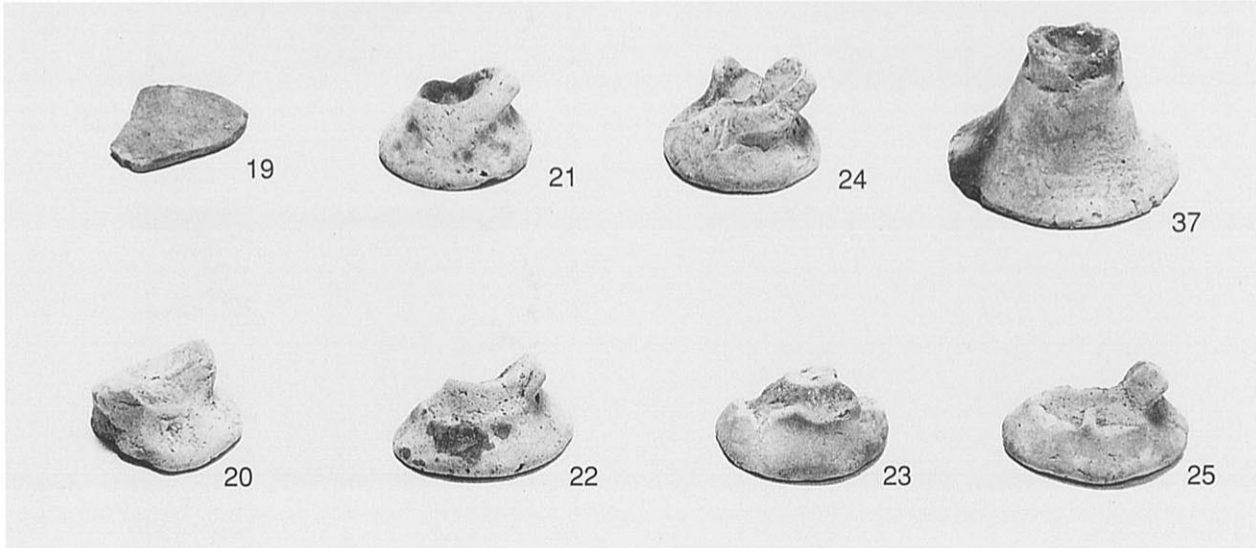
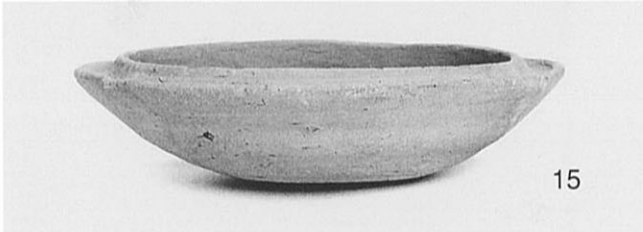
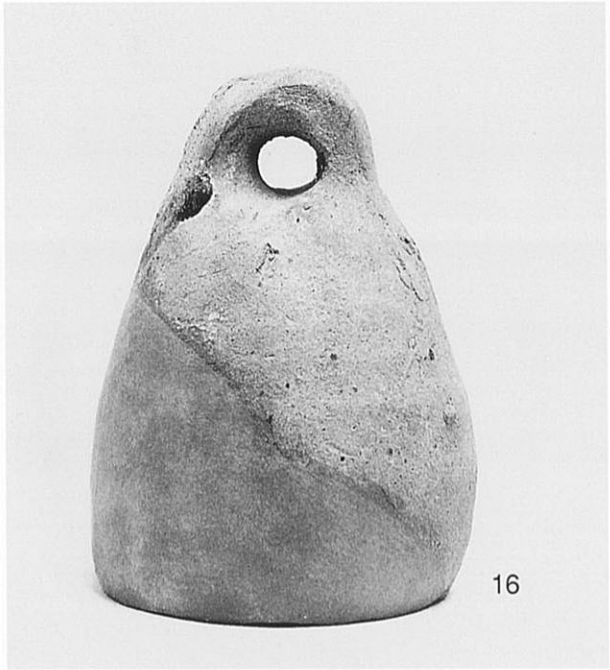
4 O調査区第1面全景（北東から）



5 P調査区第1面全景（北東から）



6 P調査区第1面落ち断面（北から）



図版 18
B 調査区出土遺物



27



31



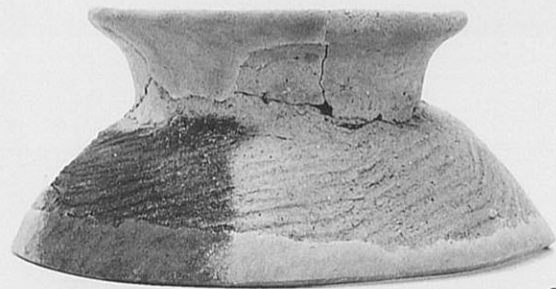
29



33



34



35





70



85



71



88



73



81



84



95



97



99



100



101



96



92



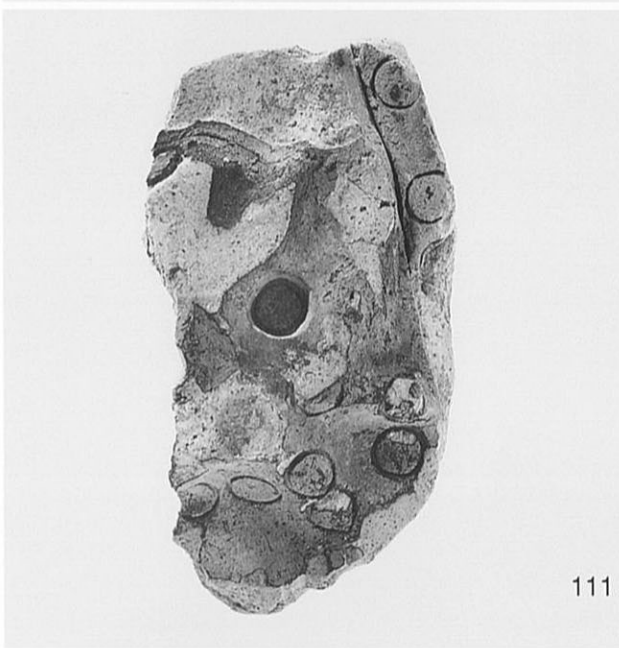
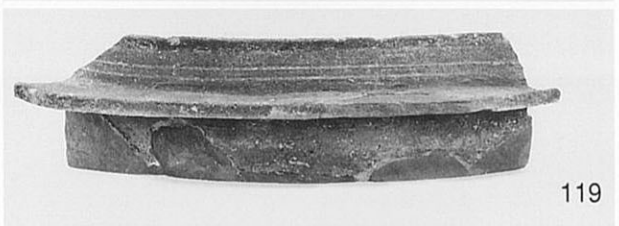
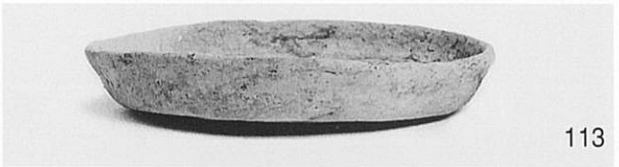
96'

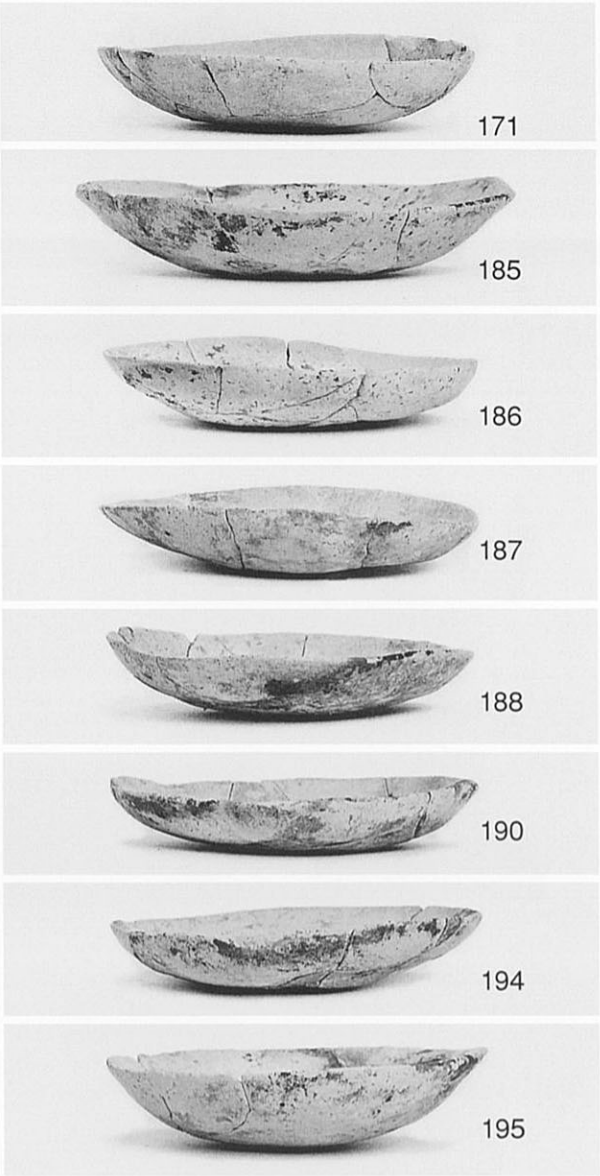
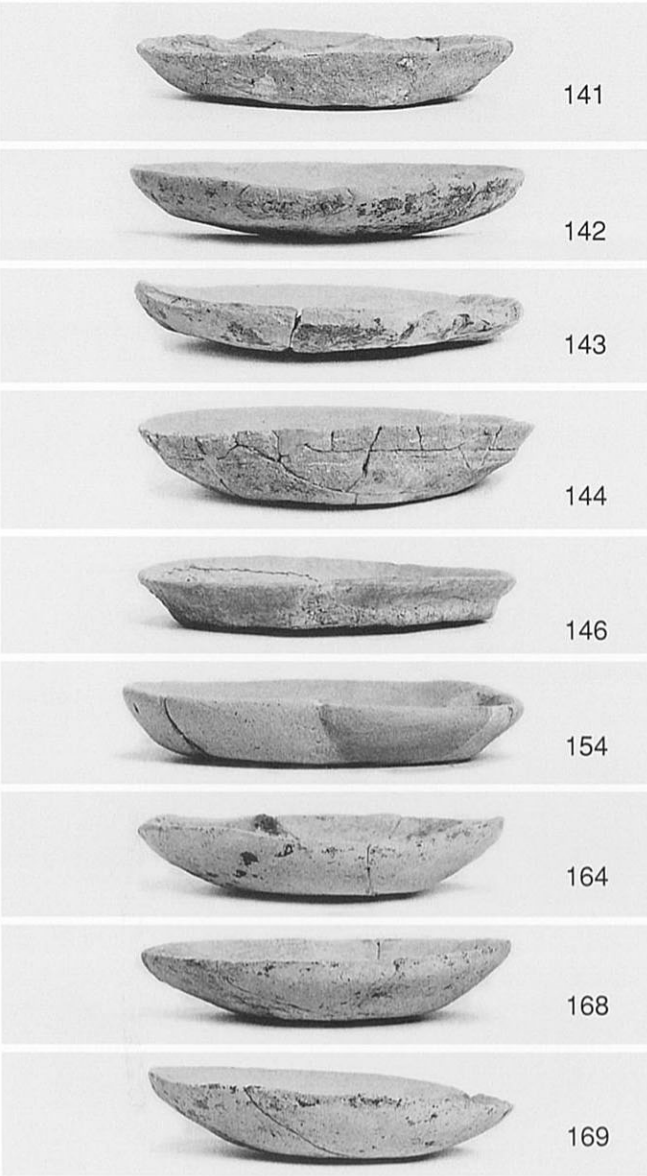


92'



110







150



151



148



148'



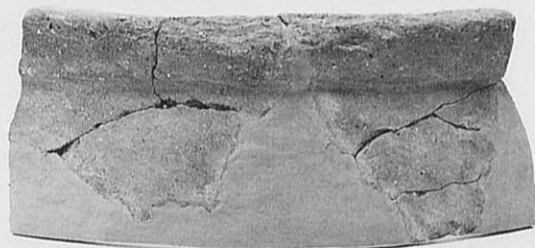
220



236



233



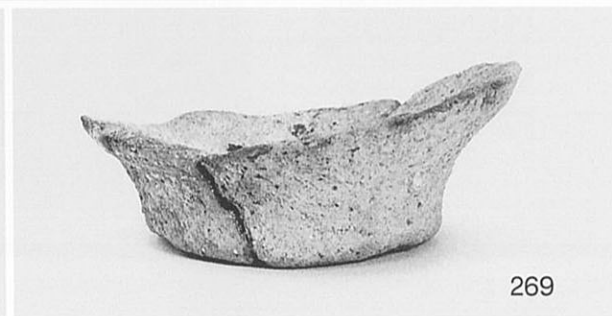
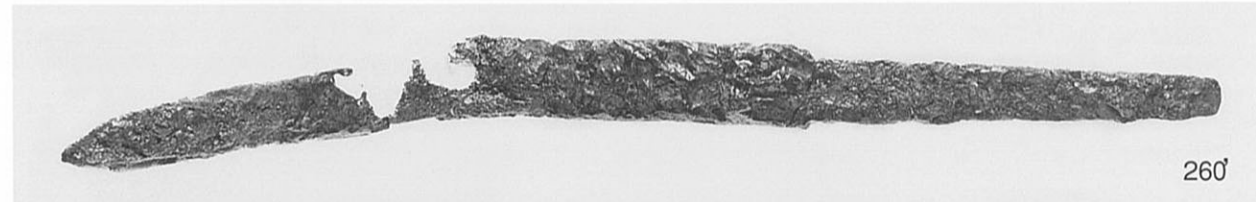
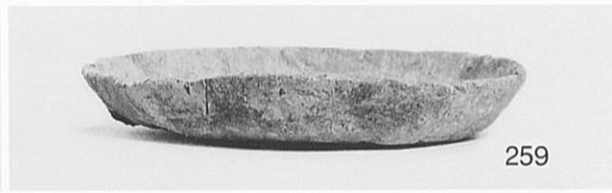
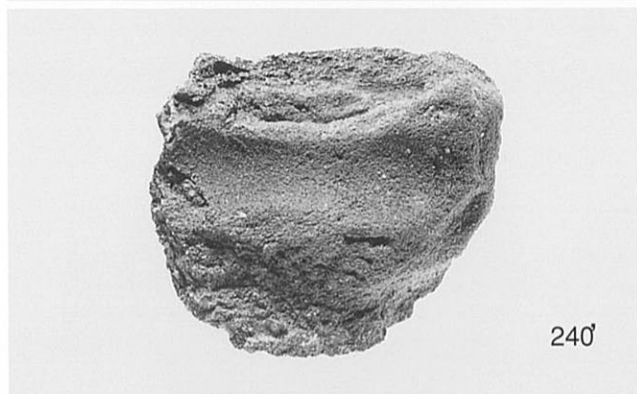
234



232



237





214



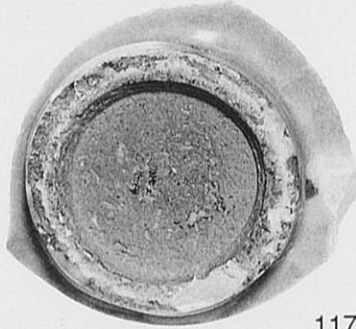
156



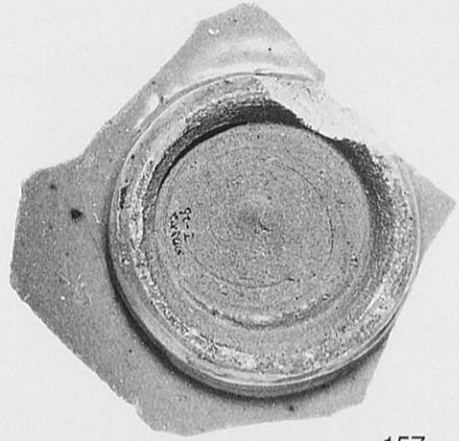
252



52



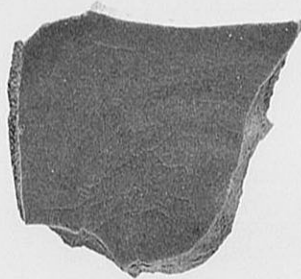
117



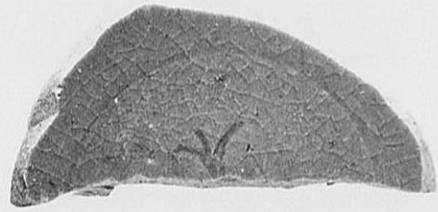
157



214'



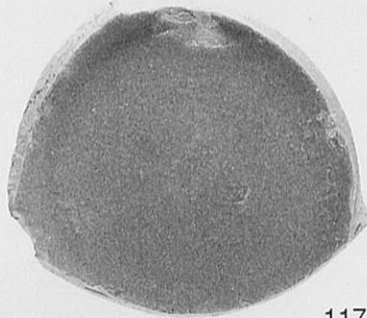
156'



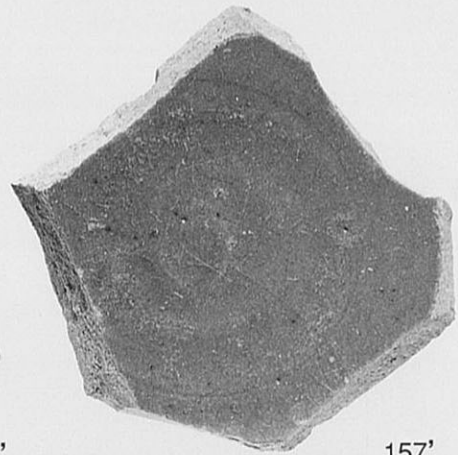
252'



52'



117'



157'

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第111集

泉佐野市湊・旭町・大宮町・若宮町・大西町所在

湊 遺 跡 他 II

－南海本線（泉佐野市）連続立体化事業（第1～3工区）

に伴う発掘調査報告書－

発行年月日 2004年3月31日

編集・発行 財団法人 大阪府文化財センター

〒590-0105 大阪府堺市竹城台3丁21番4号

印刷・製本 株式会社 じんのう